

北海道における

フランシスコ修道會の五十年

フランシスコ会

北海道布教小史 (一)

一九〇七年から一九二九年に至る分は

ヴェンセスラウス・キノルド司教の報告による

ゲルハルド・フリーベル

以下記するところのフランシスコ会北海道布教小史は、本誌の無料附録として発行するもので、資料の尽きるまで毎号添付いたします。

千九百五十七年一月十九日は、フランシスコ会員がほとんど三百年の間中絶していた日本布教を再開した五十週年記念日に当たる。但しかれはその先輩修士たちが多大の犠牲を払って働き、信仰の

一、布教の新協力者を探しに

日露戦争が終わると、新たに世界強国の一つとなつた日本は、宗教の方面でも新飛躍をすることと思われた。当時日本には約六万のカトリック教徒がいて、四司教区に分かれたれ、すべてパリイ外国宣教会の管轄の下にあつた。宣教師の数は少なく、わけても国の北部では、布教に働く人々が甚だしく不足していた。それで函館司教アレクサンドル・ペルリオズ師は、千九百五年ローマに御旅行の折その広大な司教区のため援助する新しい人々を探す決意をされ、同年十月十七日横浜を出発された。

ために血を流した旧布教地区には帰らずキリスト教にとつては全くの処女地と言つてもよい北の島北海道に乗り込んでそこに居を定めたのである。

その船中でのことである、師はフランスの一紳士と知り合われたが、その人は会話の間に娘がローマにあるマリアの宣教師フランシスコ修道女会に入つていて、ことを打ちあけ、どうぞこの年老いた父の挨拶を娘に伝えていただきたい、と司教に頼んだ。そこで司教は実際その年の十二月に、同会の本部修道院に行かれたが、聞けばその修女は、少し前にほかの修院へ転任になつたとのことであつた。それから総長と話しておられる間に、日本のことにも言及されたところ、総長は部下の修女たちが、日本の熊本県琵琶崎に

ある癩療養所で働いているといつたので司教は、その修院なら、自分もすでに一度訪ねたことがある、と答えられ、早速自分の司教区にも修院を一つ設けてはくれないか、と訊いて見られた、すると総長は「よろしゅうございますとも」と答えたが、ただその設置御希望の場所がどこか、また会には金を使うことがたく

援助は出来ない、自分の訪歐の主要な目的は、布教の資金を少し集めることなのだ、といわれた。総長はそれに対して、寄附をしてくれそうな宛先をいくつか知らせてくれた。このようにして司教は全く思いもかけず、マリアの宣教師フランシスコ修道女会修女たちを、管下布教の新協力者として得られたのであつた。その内にはペルリオズ司教は、日本に布教に熱意を寄せておられ、大



日本北部仙台司教区初代のペルリオズ司教

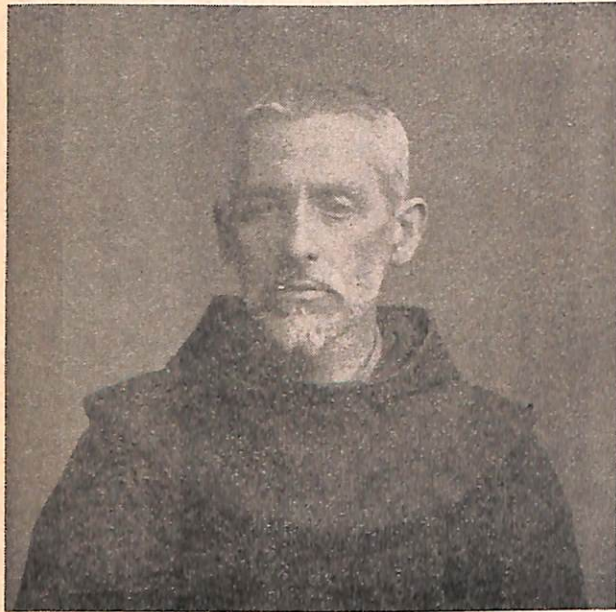
さんあるので、今の所援助できないから物質上の問題をどうするか、それが知りたいといつた。司教はこの申し出を非常に喜ばれ、少時考慮された後、北海道の首府として急速な発展ぶりを示しつつある札幌に設置を希望する旨、答えられたが、しかし物質上の問題については、自分もいくら好意をもつていてもたいした

いかに聖フランシスコを崇敬しその熱心な第三会員でもある、マルナ師というフランス人司教に出会われた。この人は長く日本を旅行して研究し、その資料を「日本に復活したイエズスの御教」という二巻の著書にまとめたくらいで、いわば日本の布教情勢に卓れた識者であつたが、ペルリオズ司教は自分の司教区に

ン師が選定された。英語を教える司祭はやがてあとから来る筈であつた。

ヴェンセスラウス・キノルド師は、その頃ちようどドイツ領東部アフリカに一教会新設のため赴き、すでにスアヘリ語の勉強を始めたところであつた。フランススコ会の総長は、ベルリオズ司教が宣教師派遣を頼みに来られると、ヴェンセスラウス師を日本にやるよう定め、千九百六年十一月十二日、これを諸国人から成る宣教師団の長に任命したのであつた。

千九百六年の有様はこのようなものであつた。修道会総長は、この二人の司祭を、修女たちと共に、もしくはその少し先に出発させる考へであつたが、修女たちの出発はだんだん遅れるばかりであつたから、その計画を捨てて、千九百六年九月に両司祭をローマに呼びよせ、この二人はやがて十一月十四日、アメリカ經由で日本に向かうため、ナポリから乗船した。そして千九百七年一月七日横浜に上陸、一月十九日目ざす札幌に到着、北一条東六丁目の教会が多少窮屈であるにもかかわらず、懇ろに迎えられた。当時その教会の主任司祭は既に述べたラフォン神父で、師はやはりパリー宣教会の宣教師である病気のピリー神父を、同僚として自分の所においていたのである。



モーリス・ベルタン神父



ヴェンセスラウス・キノルド司教 (司祭時代)

ラフォン師は、新参の宣教師たちに対しても、打ちつけて親切であつたが、それでもその教会に、長く滞在していることはできなかった。両フランススコ会員は、その司祭館にただ一つしかない客間に住んでいたのだが、何分にも手狭であつた。それで間もなく、自分の住居を探さなければならなくなつたが、司教がヨーロッパから帰られない内は、働く場所や方法が決められないので、さしあたりホンの仮の住居を自案でとすることにした。この目的にかなう借家はなかなか見つからなかつたので、小さな家を買入れることにし、交渉に巧みなカトリック信者がさういふ家屋を探すことを引き受けてくれた。ところが四月の中頃になつて、北一条東三丁目、地所つきの家が軒見つかつた。価格は二千元、その頃としては相当な値段である。それは二戸建ての家屋であつたから、こちらの目的に就いて、少し模様をかえる必要があつた。しかし一つには資金に乏しいのと、二つには将来またこの仮の住居を売る考へがあるのとで、その改造変更は最少限度に止めることとした。その仕事がつむと同時に、必要欠くべからざる家具や台所の設備を整えることにかつた。祭壇にはミサ用具の荷箱を代用した。フルダの管区長マキシミアン・ブランドイス師は、聖体器と寄附金を送つて下さつたし、モーリス・ベルタン師の母君は、台所用かまどやフォーク、ナイフ、スプーンなどを送つて下さつた。しかし最も緊急な仕事が終わるまでには、六月の十二日までかかつた。それは五月九日の夜札幌の主要商店街の約四百戸を焼いた大火で、遅れたためであつた。

六月五日には、カナダからの新参同僚修士が二人到着した。それは英語教授を担当するはずのペトロ・ゴーチエ神父とガブリエル・ゴッドブー修士とであつた。この両修道士もやはり、さしあたりフランス人神父の教会に泊めて貰わな

三、最初の住居

マリヤの宣教師フランススコ修道女会の一修院を設けてもらうことになつた旨、この人に話し、しかしその修院の近くには毎日のミサ執行や、終日聖体顕置のために司祭を常置する必要があるのに、何分管下の宣教師の数が少ないので、修女たちの司牧に一司祭をあてることは困難であるといわれた。するとマルナ師は、ではフランススコ会員を札幌へおよびになつたらいいでしょう、そうすればただその修女たちの小聖堂で勤行することができるばかりでなく、あなたの広大な司教区のため、布教にも貴重な力添えとなるでしょうから、とすすめてくれた。同時にマルナ師は、自分の知合いに、千八百九十五年フランス海軍の一將校として日本に旅行し、後にその国で布教のため働こうと、フランススコ会に入る決心をした、モーリス・ベルタンという一司祭がいることをも話した。

ベルリオズ司教がその用向きでフランススコ修道会総長ディオニジオ・シユール師と相談のため、始めてサン・アントニオに赴かれたのは千九百六年四月二十六日のことであつた。するとこの人はすぐさま承諾して、さしあたり三人の司祭を御用立ていたしましたようにいつた。

それからベルリオズ司教は、総長の紹介状を貰つて、募金の旅に出かけられた。シユール師とトリヤ、チロール、ハ

ンガリアを通つて、ガリチア、シレジア、パワリア、ベルギー、フランスまで行かれたが、総長が受け合つた通り、その紹介状によつて、フランススコ会などの修道院でも無上の歓迎を受けられた。とりわけチロール、オーストリア、パワリアの修道院ではさうで、ただ無上の歓迎を受けられたばかりでなく、寄附が得られるよう、ありとあらゆる援助をも蒙られたのであつた。マリヤの宣教師フランススコ修道女会の総長が、司教に持たせてよこした宛先も、ちようどこの地方であつた。それで札幌の修院のためには早くもチロール、オーストリア、パワリアからの寄附、ならびにベルギー、殊にアントワープからの寄附を宛てることと予定され、その集まつた寄附は、時々ローマにあるマリヤの宣教師フランススコ修道女会の本部修道院に送られたのであつた。ベルリオズ司教はさう早く日本に帰ろうとは思われなかつたので、自分が必要な指図をしておいた札幌に在るラフォン師に、その貰つた寄附金で適当地所を買わせるよう、右修道会総長に依頼された。またその地所に少なくとも修女たちの仮修院を一つ建てることも希望された。しかしラフォン師は極く一般的な指図しか受けておらず、その上到着した金もあまり大した額ではなかつたので、最初はその買入れを躊躇していたが、改めて催促されるに及んで、教会から歩いて

七分ほどかかる所、すなわち北三条東三丁目、地所を一つ手に入れた。但し、前にもいつたように、師は来る筈の修女の人数について、なんの報知も受けていなかったから、修院を建てることはしなかつた。師はそれよりも、司教の歸りを待つ方がいいと思つたのである。で、司教がほとんど二十カ月になんなどとする不在の後帰任せられ、千九百七年九月札幌に來られてから漸く、ラフォン師は一

二、札幌におけるフランススコ会修道士たち

すでに前にもいつた通り、フランススコ会の総長は、さしあたり三名の宣教師を派遣することを、司教に確約した。これらの仕事は司教の希望によれば、修女たちの所での聖祭執行のかたわら、またなによりも、漸次将来男子中等高等学校設立を目的とする外国語教授をしてほしいというのであつた。しかし総長は、いかなる事情にもせよ、その司祭たちにも厳密な意味での布教を少し許していただきたい、といつたのに、これはベルリオズ司教も快く承諾し、自分は後にわが司教区の一部を、独立の布教地区として分離するかも知れないが、さしあたりつてまた将来いつ頃さうするかは、まだ約束できないといわれたのであつた。

それは千九百四年スペイン人ドミニコ会員に譲り渡された四国は島なので、層詳細な指図を受け、それに従つて、千九百八年の春、修女たちの仮修院を建て始めた。同時に司教は、千九百八年の夏かせめてはその秋に、修女たちにせひとも到着して貰いたいものだ、と、ローマの本部修院に通告されたのであつた。その人々が実際に札幌に着いたのは千九百八年の八月末で、人数は七人、そしてまず日本語の勉強に取りかかつた。

それだけで全く独立していたから都合がよかつたが、しかし日本のほかの地域では、事情が異なつていたので、分離は困難と思われたためであつた。司教は新しく来た司祭たちに、副業として外国語の教授をするよう、頼まれた。それは当時札幌で大いに要望されていたからであつた。その教授科目として、司教が推薦されたのは、ドイツ語、フランス語、および英語であつた。従つてこの三カ国出身の司祭を一人ずつ派遣するよう、総長に依頼された。このようにして、更にその修道会の会員達を諸国人にしたいといふ御自分の希望をも、実現しようと思つたのであつた。それでまずドイツ語にはフルダ管区出身のヴェンセスラウス・キノルド師が、フランス語には、マルナ師推薦のパリー生まれのモーリス・ベルタ

ければならなかつた。しかし幸いにも、それはただ一週間だけで、それからほみな新しい住居に移つたのである。

そこでミサ聖祭が始めて行なわれたのは、聖アントニオの祝日のことであつた。主が居をお定めになつたのは、長さ五メートル四十、幅二メートル七十の小さい質素な部屋に過ぎなかつたが、聖体の秘蹟のおそばにいと、故郷に帰つたような気がするので、みな心楽しく満足した。この修道者たちの小グループはできるだけ心地をよくして、修道院の秩序を立て、一しよにする霊操を悉く忠実にこなした。寝る前には、至福なる童貞が成立以来日な浅い教会を導いて、然るべき途を進ませて下さるよう、やはり一しよに七つの御喜びのロザリオの祈りを唱えた。

日本に再来したフランシスコ会の新教会は、このようにして設立された。同僚会員は四人、すなわち司祭三名、修士一名であつたが、いずれも同心一致して、院内での会話には、一同が話すことのできる、フランス語を用いた。

さて、次の出来事を語る前に、千九百七年における札幌および北海道の布教情勢については、いささか述べておこう。

札幌では、ラフォン師およびピリエー師の両宣教師が働いていた。共にパリー外国宣教会出身であつた。年上のラフ

オン師は主として市内ならびにその近郊で働き、年下のピリエー師は助任神父としてこれを助けていたのである。ピリエー師はまたそのほかに、多年北海道の北部および東部を、広く布教の旅をして

た。しかし師は千九百七年にはもうこの苦勞の多い巡回の旅ができなかつた。この大柄な堂々たる人は、肺病にかかつてその体力が次第に衰えてきたからである。師は親切で非常にいいねいな、信心深い司祭であつた。死ぬ少し前までも、自分の部屋で毎日、教理を教へていた。フランシスコ会が再設されるにつけては、心から喜んでくれた。同師は貧しく、病氣のためになお金がかかるにもかかわらず、節約して三十円を蓄め、最初の祭壇を買い入れる一助としてこの金を受け取つて下さいと、しきりに頼んだ。死ぬ数日前には、フランシスコの第三会に入会を願ひ出た。帰天は千九百八年九月二十三日、札幌を最後の安息の地とした最初のカトリック司祭である。今でも極く古い信者たちは師を忘れてはいない。古い豊平墓地にある師の立派な墓は、始終手入れをされておられ、毎年その命日には、まだ相変らずいくつものミサが献げられてい

る。数年前九十二歳の高齡で世を去つた古い一信者は、いつも涙ながら師の噂をして、「あの神父さまはわたくしどものため、天主さまに身を犠牲に献げら

れたのです。」といったものであつた。このわたくしどもというものは、不熱心な信者たちをさすのである。それはこの老人も多年信者の務を守らず、ピリエー師にまた正しい途へ連れ帰られたからである。



借家住居当時の札幌北一条東三丁目仮修道院

た。当時札幌には、信者が僅に八十人と、求道者が二十人ばかりあつた。聖堂は

だなかつた。教会の家屋の二階の三間を小聖堂として用いていたのである。それで家のなかはずこぶる窮屈であつた。その家屋さえ、ラフォン師が奔走して、自費で数年前にやつと建てたものであつた。これは師に取つて、重い負担であつたから、師はその建築の際毎日自らつら

肉内労働をすることも厭わなかつた。その土地も師が自腹を切つて買ひ入れたのであつた。

札幌、函館両市のほか、北海道にはなお三つの教会があつた。それは室蘭と小樽と函館にある。小樽と旭川とのフランシスコ会員の来るついで、三年前に設けられたばかりで、まだやつと始まつた所であつた。それにはまだ小聖堂すらなかつた。ミサ聖祭は一室で行なつたのである。室蘭のはすでに千八百九十四年の設立であるが、少時司祭のいないことが度々あつた。カラフトの半分は千九百五年の日露講和後、日本のものになつたが、教会行政上はまだロシアのモヒレフ司教区に属していた。このような有様で、広大な布教上の未開拓地は、働く人々を待つていたのである。

もちろん新参のフランシスコ会宣教師たちは、まだあまり手伝いをする事ができなかった。それはまだ日本語が思うように話せぬ上に、担当の布教地域もまだ決まつていなかつたからであつた。それでもなにか働こうと、移転してから数カ月たつと、早くも語学の教授を始めた。この最初の広告に応じて、申し込んできた英語、ドイツ語、フランス語学習希望者は、百十名を下らぬほどであつたのである。その人々は昼の間働いていたので、授業は夜にしかできなかった。

(つづく)

北海道布教小史 (三)

一九〇七年から一九二九年に至る分は

ヴェンセスラウスキノルド司教の報告による——

ゲルハルト・フリーベル

どの語に対して、週に二晩二時間ずつと定めたが、とてもこんな多数の申込みは受けつけられないし、第一、場所の不都合が心配であつた。しかしそういう事態にはならなかつた。何事でもそうであるように、この場合にも最初の熱心が、間もなく冷めてしまつたからである。けれども学習をしまいまで続けた人々は、少ない代りにそれだけまた粒よりであつた。その多くは教授、医師、学生というような人たちであつた。授業料はもちろん貰つたが、その収入は、少し切りつめればそれで生計が立てられるくらい、多かつた。これはこの教会が諸国人で成ると考へられ、かつ物質上のシツカリした後援を持つていなかつたので、意義のないことではなかつた。

この宣教師たち出身の各管区では、新教会の必要とする物に対してまで、責任を負う義務はないと思つていたのである。もちろん時々はいささかの寄附が、とりわけフルダとパーリーから届いた。しかしそれはほんの時たままで、費用を支弁するに足りなかつた。総長は最初の宣教師たちに、その出発前六千リラを渡したが、その金を円に換算すると、家屋購入費と必要な修繕費を支払うのが手一ぱいであつた。ミサの謝礼金は、設備費などに使つた。しかしそれだからといって、別に誰も困りはしなかつた。生活するに足るだけのものは、いつもあつたのである。けれどもただそれだけでは、教会は発展できないので、司教が帰られて後、もつと大きな地所を手に入れ、更に大きな家屋購入の金を集め、後日本当の活動をするための準備を整へることを考へなければならなかつた。で、方々に寄附勧誘の手紙を送つたが、ほとんどなんの効果もなかつた。教会が新しく、一本立ちしておらず、宣教師たちの名も知られていなかつたからである。それでもその後の右の寄附勧誘状に対する返答が時々来ることは来たが、それには寄附金が入つておらず、その代りに「あなたがたの司教におすがりなさい。」という忠告が書いてあるばかりであつた。こういう

風で、この教会を一管区に所属させるのが緊急必要なことは、すでにその頃から感じられていたのである。

ペリオーズ司教がその長い御旅行から帰つて来られたのは、千九百七年九月のことであつた。遺憾ながらその司教区の会計で横濱まで船中の司教を迎へに行つたド・ノアイユ師は、早速悲しい知らせをお伝えしなければならなかつた。それは司教が日本帰任の途に就かれていた間に、八月末、函館のほとんど全市、一千二百戸というものが焼け、立派な司教座聖堂も、司祭館も、近くにあつたシャルトルの聖パウロ修女会の修院も、更に大きい学校も、孤兒院も、すつかり猛火の犠牲になつた、というのである。その時にはまるで台風のような疾風が吹きあれていた上に、二度も風の方向が変わつたので、火は四方八方に燃え広がつたのであつた。助かつたものといつては、ちよつとした家財道具のほかに、なにもなかつた。司教はこの悲報を聞かれると、「主の御名は祝せられさせ給え！」といわれできるだけ速く、北海道に赴くこととされた。そしてまず函館に着かれて、必要な建築の指図を与え、次いで札幌に向かわれたが、すでにフランシスコ会の人々がいくらかの施設を持ち、多少の働きをしているのをごらんになつて、たいそう

喜ばれた。その住宅を一覽された後、「これなら聖フランシスコも、いけないとは仰しやるまい。」といわれたが、なおあなたがたも、この住居を忘れることはな

いでしょう。」と附け加えられた。

このフランシスコ会員最初の住居は、年月のたつ内に、いろいろ様子が変わつた。附近にある大きなビール工場で働いている馬車追ひの人々が、安い金で評判のソバやウダンの食えるソバ屋になつたこともあつた。後には近所の自転車屋がこの家を買ひ取つて、そこで自転車修繕を開業したりした。キノルド司教は、後年よく新参の若い宣教師たちを連れてこ

こを通られ、その教会の見すばらしい始めについて語られたものであつた。この北海道布教の源に対する深い愛着を、お心に抱いておられたように思われたのである。この最初の住居における暮しは、時として非常に貧しく、ある時などは金庫のなかに、僅か二十四銭しかなかつたので、滞つてゐる勘定をどうして払つたらいいか、わからないことさえあつたほどであつた。しかしそれにもかかわらずキノルド司教は、「ここに住んでいた人々には、この家のことや、ここで暮らしたなつかしい日々が、深い懐れを以て思い返されるのである。」といつておられる。

四、最初の活動の舞台

つたのは、なにかんなく、少くとも差当た

つての活動の目的を定める上にも、役立

つこととなつた。最初の兩宣教師は、ロ

（一） 将来の住居は、市の北部に定

（二） そうすればその住居の周辺地

（三） それまで語学の教授を続け、

司教のお指図通り、市の北部に土地を

この土地に家屋を建てることは、千九

百八年の春から始める計画であつたが、



—千九百八年にできた札幌北十五条修道院—

それが失敗に終わると、総長に請願書

出た。しかし数カ月たつてもなんの返

千円の建築費が出来たのであつた。それ

の返事も来た。しかしそれが私信であつ

すでに工事が始まつて後、ローマから

新しい家の祝別は、司教が自分で行

四月にはもう一通の書状がローマから

しては二間しか余つていなかった。その

に向け出発の際、ヴェンセラウス・キ

千九百九年四月には、大いに思いがけ

（一） 司教をそこに開かれたが、それ

（二） 司教をそこに開かれたが、それ

（三） 司教をそこに開かれたが、それ

異なつた五カ国生まれの五人の神父と、

千九百九年には前述の同僚修士たちが

この兩教会の最初のは函館の場末にあ

千九百九年六月、フランシスコ会が引き

アヴィエー師は、ほかの所へゆかなけれ

人がなかつたので、司教はフランシスコ

この布教活動を始める機会が到来したと

口に出されたことのないお考えであつ

されたのであつた。

亀田教会に派遣されたのは、モーリス

上その家屋は手入れをする必要があつた

この布教活動を始める機会が到来したと

口に出されたことのないお考えであつ

されたのであつた。

亀田教会に派遣されたのは、モーリス

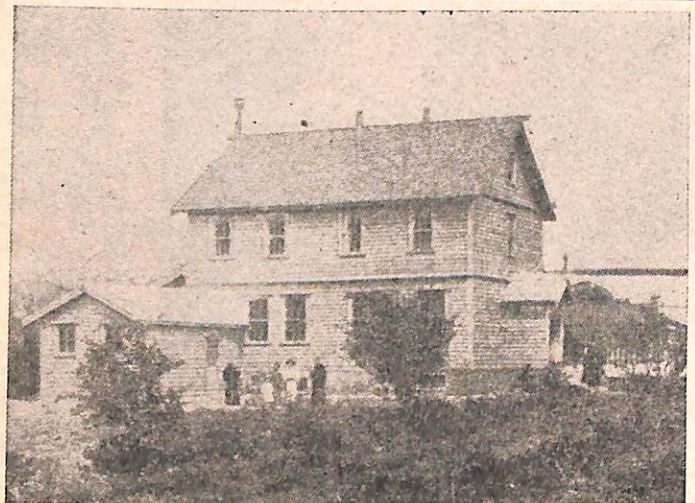
紋章がまだあるし、またフランツ師の描

この布教活動を始める機会が到来したと

口に出されたことのないお考えであつ

されたのであつた。

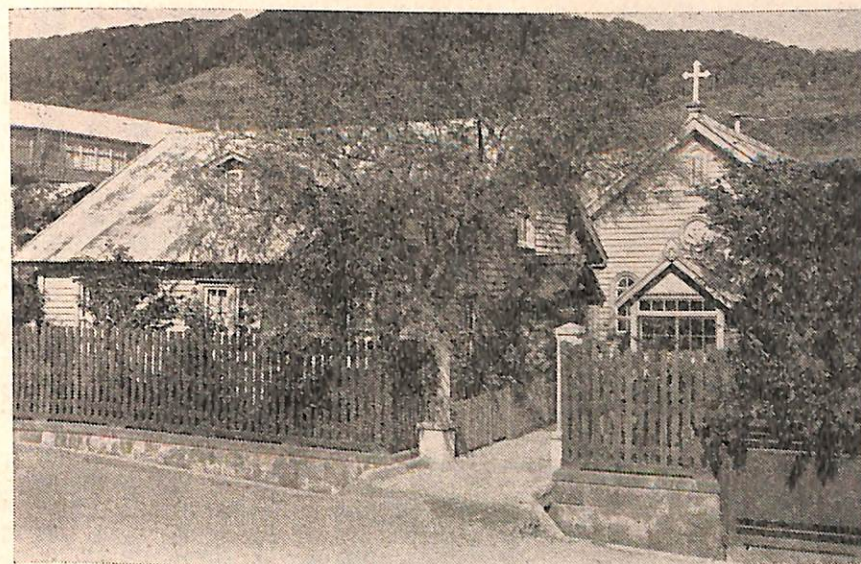
亀田教会に派遣されたのは、モーリス



—千九百九年にできた函館亀田教会—

で、室蘭は当分無住のままであつた。亀田教会がフランスシスコ会員に委託されて後、司教はこの場所にも駐在することを同会員に頼まれた。そこで最初のフランスシスコ宣教師として、ペトロ・ゴーチエ師がそこに派遣された。師は伴侶として自分と同国のガブリエル・ゴッドブー修士を附けて貰つた。再びミサ聖祭が行なわれたのは、千九百九年七月二十六日その教会の保護の聖女である聖アンナの祝日のことであつた。その教会は全くベトレムソツクリであつた。その家屋はもと既であつたもので、下に小さい部屋がいくつもあり、その上の屋根裏に小聖堂があつたのである。千九百十年一月十一日室蘭に転任になつたワレンチン・ザウエル修士が、その有様を「この家は下が四間から成り、一つは神父用、一つは修士用、一つは客間用、一つは家事用に宛てられている。おつと、もう少しで台所を忘れてしまふところであつた。家の南側に付けて小さな物置が建ててあつて、そこに薪や石炭などが置いてあり、また雄鶏一羽と雌鶏二羽とも飼つてある。そこにかまどもあるので、台所に使えるのだ。北側には狭い階段が屋根裏に通じていて、そこに聖主に住んでいたのはなはだ當を得たものといつていい。全部新築したくても金がないので、千

を建てる場所を作るため、家屋をわきへ移した。それからその家をできるだけよ修繕し、それに小聖堂を建て増した。すべての仕事は五月初めに早くもできあがつて、その小聖堂を祝別奉獻するためには、ペルリオ・ゴーチエ師が御自分でおいでになつた。



—千九百十年にできた室蘭教会—

この両教会を整備修繕すること、千九百九年、十年兩年に對する人も資力も悉く尽きてしまつた。司祭も修士もみなすつかり手がふさがつているのに、この両教会のいづれにも、広い地域が一つずつ付いているのである。それで千九百十年の秋に、新しい同僚修士たちが来るという通知があつた。十月五日、アレキシオ・ヒツプ師、オイゼビオ・ブライトン師およびヒラリオ・シヌメルツ師が札幌に到着した。この三神父はフルダ管区の出身であつた。この人々と共に修士も三人来た。それはメツツ管区からヨゼフ・バルテメと、フルダ管区から

区からのゲルハルド・ヒルトとの各修士であつた。二、三日遅れて十月八日には、カナダ出身のカリキスト・シエリナ師が十二月二十八日にはシレジア管区出身のアグネルス・コワルツ師がそれぞれ来着した。このようにして千九百十年には、日本にいる同僚修士の数が二倍になつたのである。

を一管区に所属させるという問題も、ますます緊急を要することとなつた。すでに千九百七年の秋と千九百八年の夏二度にわたつて、布教地の長たるキノルド師は事情を説明して総長に、この布教地をフルダ管区なら一ばんよいが、とにかく一管区に編入して下さるようにと請願した。しかしこの請願は却下された。と言うのはその布教が諸国人で行なうという定めであつたからである。

千九百十年の秋、キノルド師はローマの当時の布教秘書に手紙でもう一度事情を説明し、またもやフルダ管区を指定してやつた。管区長サルニン・ゲーエル師との交通によつて、その承諾の得られることが保証されたので、それだけ早くフルダ管区所属ができるようになったからである。しかしローマからの返事は数カ月待たされ、千九百十一年二月四日に至つてようやく来たのであつた。

ところで一管区に所属せざるを得ない理由をかいつままで言えば、次の如くである。

神父五名、修士三名が殖えて人数がそれそれ異なつた六管区に属する十六名となつた。そのため言葉もお互にまだよくわからず、布教地の長は万事二三カ国語で知らせなければならぬ。

それからどの管区にも特殊な所があつて、それを固執しようとする気持はわかっているが、それによつて不統一になりやすい。(つづく)

フランシスコ会

北海道布教小史 (三)

一九〇七年から一九二九年に至る分は

ヴェンセスラウス・キノルド司教の報告による

ゲルハルド・フォーベル

更に一管区に所属せざるを得ない、もう一つの理由は、物質的問題である。人数が殖えるに連れて、自然と支出も多くなつた。しかし布教地はまだ独立してないので、当時はまだ信仰弘布会からなる補助も来なかつたし、総長の所から多額の援助の来ることもなかつた。なるほどフルダの管区長は、高尚な心でしばしば布教費を送つてくれた。すなわちその少し前に設立されたフランシスコ会布教地援助会の集めた寄附や、その他同管区の義援金をよこしてくれたのであるがしかし管区そのものとしては、この布教地が同管区に所属しない限り、なんの義務もなかつたのである。こうしてこの布教地には物質的な基礎というものがなかつたのであつた。

同僚修士たちの数がもつと多くなれば編入はたとい不可能でないにしても、非常にむずかしくなるからである。

これらの諸点を悉く説明された当時の布教秘書は、それに対して理解ある態度を示し、請願の意味で奔走してくれた。ローマから返事が来たのは、千九百十一年二月四日のことであつた。しかしそれは当時の布教秘書フェルナンデス師の個人的な返事であつて、それには、総長とその機会について相談したが、総長はその計画に反対である、それは二つの理由からで、第一はその布教地が始めから諸国人混合で働くとされてきたことであり第二は総長自身もフルダ管区の一員であるからにはその宣教師をどうも自分の管区に編入するわけにはゆかない、殊に他の管区もそれを望んでいる以上、なおさらそうである旨、記してあつたのである。

今述べたような状態は、この宣教師の気分にならなかつた。徹底的にそれを整理したいとは、すべての人の希望であつた。その上それはこの布教地を一管区に所属させる最後の機会でもあつた。何となればいろいろな国や管区出身

こうして自分の間、見込がないことになつたが、二月たつとまた、同じ布教秘書から手紙が来て、それにはフルダ管区

に布教地編入の件の請願書を、新たに至急送付するようにという要求が認められてあつた。但しその請願書には、管轄司教の承諾状を添付してほしい、というのである。で、それを貰うために、キノルド師は司教の許に赴き、事情の説明を申しあげたところ、司教は始めびつくりされてその計画のことをあまり聞こうともされなかつた。それにまたそのお考えでは、どうせ一管区に直属させる必要があるのなら、むしろカナダ管区に編入させたいというのであつた。しかし賛否の理由をよくよく熟慮された後、ついに承諾を与えられ、しかも自分はただ教会の繁栄のみをこいねがうから、快よく同意すると

六、成果多かりし年 (千九百十一年)

千九百十一年には、ただ布教地がフルダ管区に編入されたばかりでなく、札幌に一病院の設立と、俱知安及び白老の二教会開設ということもあつた。

ペルリオ・ゴーチエ師が札幌在住のマリア宣教師フランシスコ会修女達に、ただ一般的な指示しか与えられなかつたことは、すでに前にも言つたが、その時には修女たちも札幌に来て三年目を迎えたにもかかわらず、その活動計画の細かいことは依然として決まっていなかつた。その上なお生計を立ててゆく問題もあつた。司教は事情があつてそのために何かをして

下さることが出来にならなかつた。修女たちの住んでいる仮修院でも、なにも始めることができなかった。新しい敷地はすでに買い入れて、その支払いは同修女会の総長がしてくれていたのであるが、それ以上は何をする費用も、実に毎月の生活費さえ不足がちなのであつた。かれらはすでに事業を断念しようかという考えさえ抱いた。それでペルリオ・ゴーチエ師はその事業を助けるのに、どうすることもできないというので、フランシスコ修道院の院長ヴェンセスラウス・キノルド師に頼られた。かように依頼されたのは、

一九〇七年から一九二九年に至る分は

一九〇七年から一九二九年に至る分は

一九〇七年から一九二九年に至る分は

一九〇七年から一九二九年に至る分は

とりわけ買入れた地所が、フランシス・会員の住居から遠くないところにあつたからであつた。キノルド師は、司教の請いに応じなければならぬと思い、小さい病院を建てることとした。大きい病院とするには、資金がなかつたし、その上、そういうのを建てるのは、冒険とも思われたためである。それは、宣教師の古参の人たちやカトリック平信徒が、うまくゆきそうにもないと言つたからであつた。事実、ほかの所ですでに試みたが、失敗に終わったことがあるのである。それにもかかわらず病院を建てようとしたのは、ほかの事業をするには周囲の事情がまだ都合がよくなかつたからであつた。ぜひともあるだけの金で間に合わせのために、修女たちの病院を病院の建物に利用しようとした。それでそれを取り払い、新しい大きな敷地にまた建て直さなければならなかつた。修女たちは千九百十一年の三月末に、小さい借家に引越し、間もなく新しい場



一天使院最初の修道志願者

かに仕方がなかつた。フランツ師は背中にリュックサックをしよつて、何年もこの司牧の旅をしたのである。で、師はその道ばたにある泉とその水質を悉く知り尽くし、また途中ひまつぶしにシルレルの諷詩を暗唱したりした。

割合にうまく行つた。それどころか存立の危い時さえあつたが、天主は御摂理を以て助け、すべての難関を切りぬけさせて下さつた。

千九百十一年のもう一つの新しいことは、白老教会の設立であつた。静かな大海原に臨んでいるこの村には、まだ多くのアイヌが住んでいた。ベルリオー司教はすでに数年前から、この滅びゆく民族のために、宗教上で何か尽くしてやりたいという望みを抱いておられ、かつて御自分でもう一つの村でかれらのなかに少時住んでおられたことがあるばかりか、アイヌ語の小公教要理を編纂されたことさえあつたのであるが、主としてアイヌの布教に当てるべき特有のカトリック教会は、まだ出来ていなかった。それで司教の御希望にに応じて、そこへ巡回していただのであるが、千九百十一年の夏に至つて、アレキシオ・ヒップ師とアグネルス・コワルツ師とが、そこに教会開設準備のため派遣された。そして日本風の空家を一軒借り入れたが、ここでも始めはいかに原始的であつたか、それはアグネルス・コワルツ師の一報告を見るとわかるのである。

「アレキシオ神父とわたしとは、到着するとまず、家の備付けをしなければならなかつた。われわれの家はこれまで店であつたので、日本風に店の前面は全部ガラス戸造りになつていた。ところで日本の家の部屋の間に立てるふすまが、まだ



一千九百十一年にできた俱知安カトリック教会

なかつたので、われわれが坐つていると、まるでカンテラのなかにでもいるように、道ゆく人々の目にまる見えで、道路からはわれわれの家の隅々まで見えたのであつた……。

「翌る六月二十三日、われわれは献堂式を行なつた。この教会は聖ヨゼフに献げるつもりであつたので、聖ヨゼフの御像を立てたが、ちょうどイエズス御心の祝日であつたから、またイエズス御心の御画も壁にかけた。但しこれはあるカレンダーの表紙絵に過ぎなかつたのである。これが千九百十一年の白老の仮聖堂献堂式で、われわれの板造りの家が修道院ともなれば教会ともなつたのであつた。」

この年にはまた便利のいい所にある敷地を買入れて、住宅と聖堂との建築工

千九百十二年には、何も新設されなかつた。これは一つには前に設立されたものの増築に金を使い尽くしたのと、二つには宣教師が増す代りに減つたので、足りなくなつたのによるのである。

まずこの布教地を去つたのは、ヘルクラン・イルベック修士であつた。次にペトロ・ゴーチエ師がカナダに帰つた。師はそれからフィレンツェのそばのアルヴェルナ修道院に行つて、そこで間もなく他界したのである。

クリストフ・フィッツモリス師が去つたのは、それにも増して悲しいことであつた。この小兒のように信心深い善良な神父は、重い心臓病にかかり、千九百十二年九月聖地に赴き、少時イエルサレムに滞在後、エジプトへ転任になり、そこで英軍カトリック将兵の司牧を勤めたのであつた。

幸いにも千九百十二年秋には、新しい司祭が二人来た。ヴォルフガング・ラング師とドロテオ・シリング師とがそれで

七、地域 拡大 さる (一九二二年—一九一三年)

この病院はたびたび拡張されて、自立できるよになつた。天使病院と称するこの病院は、今日病床百二十を有し、日本におけるカトリック屈指の大病院となつてゐる。

この修女たちが広い修院と美麗な小聖堂とを手に入れたのは、千九百十四年のことであつた。この施設からはすでに多くの祝福が流れ出ている。布教に対する他のさまざまな利益は言わぬとしても、この病院での受洗者数は、もはや四千人を越えているのである。

千九百十一年に新設された第二のものは、俱知安教会であつた。若い宣教師たちに、時々全く日本風な環境のうちに暮らし、日本の人々と絶えず交際して、その言語や生活様式を一層よく知ることができそうな、適当な場所がほしいという要望があつたので、その目的に俱知安を選び、同時にその場所の都合のよいことがわかつたら、一教会を設けようと思つたのである。そこで小さな日本家を一軒借り受けたが、それは三間から成り、駅から遠くない所にあつた。千九百十年十一月初めてそこに赴いたのは、クリストフ・フィッツモリス師であつたが、十二月一日にはフランツ・フェルゴット師がそこへやられた。使用人というものはなく、誰も自炊をしたのである。その生活がどんなにつらかつたか、フランツ神父は自分の日記にこうしたためてい

「ここには雪が深山あつて、とても寒い。家は全くの日本風で、方々に隙間がありそこから風が遠慮なく吹きこむ。……クリストフ師は暖房設備のあるただ一つの部屋に寝台なしで寝み、わたしは寝台を貰つて寒い所にねるのであつた。——それでなければ、わたしはありつたけの着る物を身につけていても、夜つびて下から来る寒さのせいで、夏のうすい掛布団が一向温かくないので、とても眠れなかつた。わたしはここで始めてリニューマチ気味になつた。……小聖堂に使う部屋では、祭師の葡萄酒が凍るので、ゴミサは居間で立てなければならぬ。」

小さい敷地が手に入ると、住宅と小聖堂との工事が始まつた。祝別奉獻式は千九百十一年十一月七日に行なわれた。新設教会の保護の聖人は、聖アントニオであつた。この町そのものにおける成果はたいしたものではなかつたが、広大な地域に住んでいる信者たちの司牧には、多大の時間と努力とをかけて、遠路を歩かなければならなかつた。南方からの移民で、俱知安周辺の新天地に、新しい生活を築こうとしている人も多く、そのなかにはカトリック信者も少なくなつた。例えばその教七十人に及ぶ信徒の団は、ソケシという小さい山村に住んでいたが、そこへゆくには、汽車の便がまだなかつたので、悪い道を十三四時間も歩くほ

事を始めた。そして翌る千九百十二年二月五日、その新教会の奉獻式が行なわれた。(四頁の挿絵参照)

なお、千九百十一年には、修道院のそばに学生寄宿舎も一つ建てられた。またダヴィド・ミバク師という、望んでいた働き手がもう一人来たのもこの年のことだ。師は十月十五日札幌に着いて、当分そこに滞在したのである。

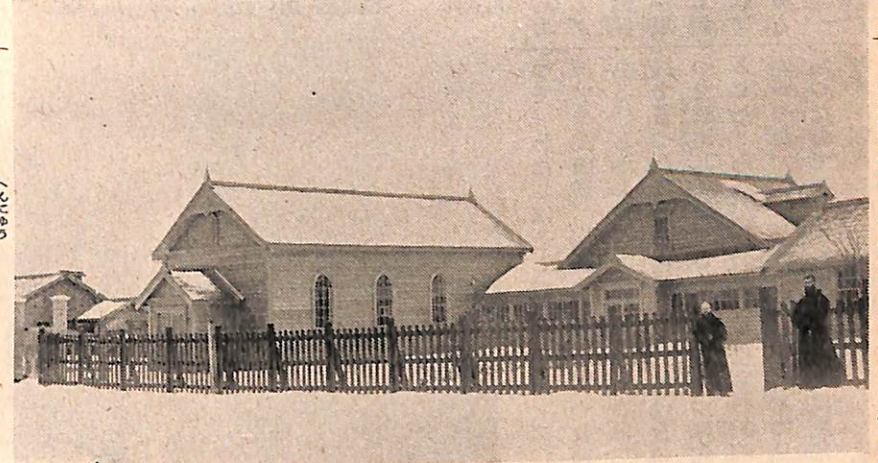
千九百十二年五月二十一日の統計によれば、教会五、病院一、および学生寄宿舎一となつてゐる。所属信徒の数は約三百であつた。布教の人員は司祭十名、修士六名、修士志願者一名、修女七名と同志願者四名、ならびに伝道士五名と伝道婦二名であつた。

ある。二人とも始めの内は日本語を勉
強するために、札幌に止まってい
た。

前にもすでに言つた通り、千九百
十二年にはなにも新しく設けること
ができなかつた。その代り札幌の病
院は拡張され、亀田には美麗な小聖
堂が建てられた。この小聖堂の建築
費は大部分、やはりモーリス・ベル
タン師の仲介によつて、パリから
来たのである。

樺太の豊原に教会が始められるに
至つたのも、もとをせればこの千九
百十二年のことである。なるほどア
グネルス・コワルツ師はフランス・
フェルゴット師と共に、その前年同
地のポーランド人信徒と少数の日本
人信徒巡回訪問のため、そこへ行つ
て来たことがあつたが、この年には
アグネルス師は前よりも長くその地
に滞在し、新たに同島の首都と定め
られたその町の、少ない家屋の一軒
を借り受けたところ、偶然それは少数の
残留ロシア人の保護に當つていたロシア
教の司祭の前に借りていた所であつた。
それから教会設置の準備を進め、敷地を
買い入れたが、本當の設立は次の年にな
つて始めて行なわれたのであつた。

樺太の南半分は、政治的には日露戦争
後の講和締結以来、日本のものとなつた
が、教会行政上はまだ樺太全島がモヒレ



一白老カトリック教会(外部) 前頁参照一

ウ司教区に属していた。その日本領が函
館司教区に編入されたのは、ようやく千
九百十年になつてからのことであつた。
北部のロシア領は依然モヒレウに属して
いたが、後には新設されたウラヂオスト
ツク司教区に編入された。南部が函館司
教区にまだ入れられない内に、フォーリ
ー師は千九百七年、すでにこの日本の新
植民地を訪問した。師はもちろん日本人
信徒に、秘蹟を授けることができたが、

フランシスコ会

北海道布教小史 (四)

一九〇七年から一九二九年に至る分は
ヴェンセスラウス・キノルド司教の報告による
ゲルハルド・フリーベル

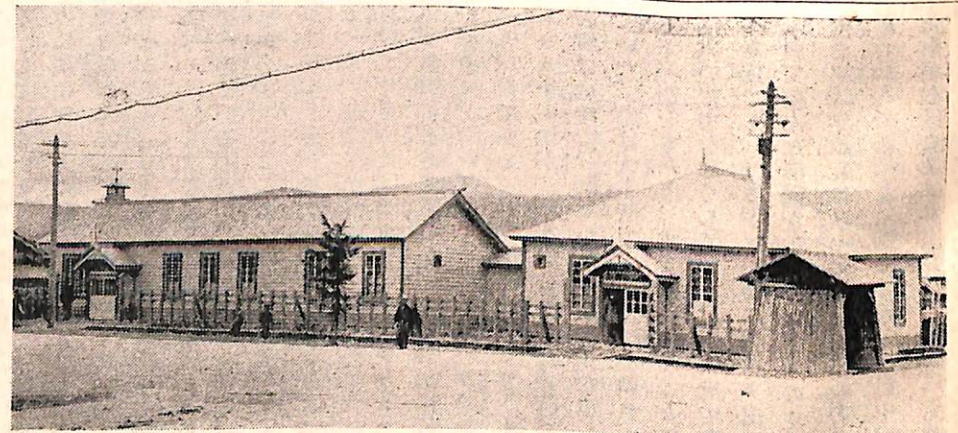
こんな有様は多年を経てようやく改ま
つたが、それでもポーランド語やロシア
語のできるアグネルス師は、つらい努力
を払いながら、少数の人には全くひ
どい忘恩を以て報いられたのであつ
た。その他の人々はなるほど感謝の
心を持つてはいたが、自分のために
してもらつたことを、忘れない人は
ごく少ししかなかつた。それに引き
かえ、小さい時からキチンとした宗
教教育を受けた若い世代は、善良で
また物質的にも、まあ有福であつ
た。しかしこの人々も今は鉄のカ
ーテンのかげに閉じこめられたり、ソ
連からポーランドへ移送されたりし
て、宗教上の援助は何一つ受けず
にいるのである。

千九百十三年三月には、ベルリオ
ー司教が北海道全島にわたる巡察の
大旅行を始められ、すべての既成教
会を見て回られた。まず最北の旭川
教会から取りかかれ、そこから札幌に
来られたのは四月二十一日のことであつ



旧教会の前でコルニエー神父とコワルツ神父を囲む樺太の信者

それに招かれた。説教は朝晩行なわれ、
四月二十七日には堅振があつた。その秘



一九一三年に出来た豊原教会

札幌から汽車で一時間ばかりかかる所
に、人口約四千の広島という大きな村が
ある。当時、すなわち千九百十三年には、
まだ鉄道が敷設されていなかつたので、
札幌からそこへゆくには、五時間ほどか
かつて歩かなければならなかつた。そこ
に、とりわけラフォン師の熱心な奔走に

蹟を授かつた信者は二十二人であつた。



一白老教会聖堂内部一

そこに流されている多数のポーランド人
と話し合うことはできなかつた。師は千
九百八年にまたも同地にゆき、小樽のフ
ランス人宣教師コルニエー師も千九百九
年、十年の二度にわたつて樺太を訪れた
が、ポーランド語ができなかつた。フォ
ーリイ師は大泊に家を一軒買ひ入れさ
したが、それはたかだか、通り過ぎる旅
客を宿すのに役立つだけに過ぎなかつ
た。買ひ入れた時にはその位置も便利で
あつたが、後に港湾施設が出来た頃に
は、家屋の位置も甚だ不便になり、その
上信者たちは大概豊原およびその周辺に

住んでいた。それでアグネルス・コワル
ツ師も最初にやや長く滞在した時には、
札幌に帰つたのであつた。
翌千九百十三年四月、師はまた豊原に
移り住んだが、この度はヴォルフガング
・ラング師と一しよであつた。二人は非
常に便利な所にある家に移転した。それ
は最初の内に借りていたのであるが、後
千九百十三年五月になつて、隣りにある
土地と共に買ひ取つた。この家屋はある
新聞の編集所であつたから、少しの模様
がえて、十分大きな住宅とすることがで
きたのである。この家に続いていく大
きい印刷所は、改造して香部屋つき小
聖堂とした。

日本人カトリック信者は少数で、ポ
ーランド人の方が多かつた。しかしか
れらの信仰状態はどうも思わしくなかつ
た。樺太は日露戦争前は重罪人の流
刑地であつた、カトリック教会が設立
された当時、そこにいた大人のポーラ
ンド人たちはみな同様に重罪人として
そこへ流された連中であつたのであ
る。家庭を持つていない人々は、たいが
い、教会法の規定にかなわないうよう
な結婚をしていた。子どもたちは子ども
たちで、全く何も習わずに生い立ち、
それにはいがいの大人同様、読み書き
ができないので、これに何かを教える
ことは、困難でもあつた。(つづく)

よつて、次第次第に、小さいが熱心な信徒
の一団ができた。かれらは月に一回ミ
サ聖祭を行なつて貰ひ、かつ教理も教
えられたのである。この人々は集会専
用に分相応の家を一つ建てた。ラフォ
ン師は公教要理を教えるのに極めて厳
しいので知られていた。師は公教要理
を暗記できない人には、だれにも洗礼
を授けなかつたのである。しかしそれ
にもかかわらず、師は担当している農
民のために自分の全生活を献げた。こ
の熱心な宣教師は、自分ではほとんど
何も取らずに、いつも憐みの心をもつ
て、貧しい人々に恵んでやるのであつ
た。千九百十三年、凶作で農家の人た
ちが困つた時には、部下の伝道士を呼
びよせて、
「ちよつとわたしの金庫をあけて、ま
だどのくらいなにかあるか、見て下さ
い。」と言つた。そこで調べて見ると、
百三十二円あつたが、これは当時とし
ては少なからぬ金高であつた。
「それを持つて行つて、食うに困つて
いる信者の人たを救う運動に寄附し
て下さい」と師がいうので、
「あるだけみんな寄附なさるのです
か？」と伝道士がびつくりして尋ねると、
「え、そうですよ。天主さまは御攝理
でわたしたちをお忘れにならず、また金
庫にいくらか入るようにして下さるでし
よう。」という答であつた。

その新たにできた村のあたりでは、土地がまだ極めて安かつたので、ペルリオ司教は広島村に広大な地所を買入れられた。そこでもとの信徒集会所を壊して、新しい敷地にそれを建て直した。しかしこれはだんだんその目的を果たすに不十分になつて来た。それで農家の人たちは小聖堂を建てることにし、千九百十三年の春これを竣工した。

この人々は仕事のほとんど全部を自分たちの手でできない、しかも教会からは少しもそれに対する援助金を貰わなかつたのである。それで工事が完成した時、かれらは大いに喜び、司教にどうか御自身おいでになつて献堂式を挙行して下さいとお願ひした。司教はちやうどその時、前に述べた通り堅振を授けられて、札幌に御滞在中であつたので、喜んで承諾され、同行するようフランシスコ会修道院長を誘われた。



広島村教会

て、しきりに依頼を始められた。それで院長はその願ひを容れるよりほか仕方がある。園が立つている。これらの経営に当たつて居るのは、マリアの宣教師フランシスコ会の修女たちである。

千九百十三年に譲り渡された第二の教会は岩見沢教会であつた。この町は人口約二万五千、北へゆく鉄道幹線に臨み、札幌から汽車で一時間余りかかる所にある。ここはまた幾多支線の分岐点で、附近に炭山を控えているため、すこぶる重要な所でもある。ここにはすでにいつも信徒が若干——とりわけ鉄道員が——住んで居た。こういう理由で、それが地の利を占めて居るので、ペルリオ司教は夙からすでにここに一教会の設置を望んでおられたが、ただその費用の出所がなかつた。ところが天主は御摂理を以て、助けて下さつた。千九百九年一フランシスコ会司教の招きにに応じて、その郷里に近い出身で、カンブレイ司教区の一フランシスコ会司教である、神学博士イッポリト・ビュルトー師が、日本を訪問した。師の両親は金持で、師にかなりな財産を遺して居た。師は大学者で、いくつかのヨーロッパ語をも語り、すでに天主のことは大いに力を尽くして居り、ローマで数年を過ごし、フランスのカトリック出版方面で盛んな活動を示し、リールのカトリック大学設立に与つて少なからぬ力のあつた人であつた。師は日本を旅行中、函館司教区をたまねく訪れ、札幌へも来たが、そこで当時の宣教師から、司教が

五月一日、小聖堂の祝別奉獻がすんで後、信徒の中の頭立つた人が三人司教の所へ来て、どうかわたしたちの所に、誰か神父さまを常駐させて下さい、とお願ひした。すると司教は微笑してフランシスコ修道院長を指さししながら、「それはこの人にお頼みなさい。」といわれ、御自分も農夫たちの側に加わつ

なくなつたが、ただその神父の住宅をまづ建てる必要があるといつた。やがてこれらは前の集会所の改造工事にかかり、八月にこれを司祭の住宅として完成した。で、そこへ初代主任としてヒラリオ・シヌメルツ師が派遣された。

ペルリオ司教が購入されたその大きな地所には、今日司祭館と美しい小聖堂のほか、約百二十名の小兒たちを擁する育兒院とそれに連なる農場、女子中等学校および村の子どもたちを入れる幼稚

園が立つている。これらの経営に当たつて居るのは、マリアの宣教師フランシスコ会の修女たちである。

千九百十三年に譲り渡された第二の教会は岩見沢教会であつた。この町は人口約二万五千、北へゆく鉄道幹線に臨み、札幌から汽車で一時間余りかかる所にある。ここはまた幾多支線の分岐点で、附近に炭山を控えているため、すこぶる重要な所でもある。ここにはすでにいつも信徒が若干——とりわけ鉄道員が——住んで居た。こういう理由で、それが地の利を占めて居るので、ペルリオ司教は夙からすでにここに一教会の設置を望んでおられたが、ただその費用の出所がなかつた。ところが天主は御摂理を以て、助けて下さつた。千九百九年一フランシスコ会司教の招きにに応じて、その郷里に近い出身で、カンブレイ司教区の一フランシスコ会司教である、神学博士イッポリト・ビュルトー師が、日本を訪問した。師の両親は金持で、師にかなりな財産を遺して居た。師は大学者で、いくつかのヨーロッパ語をも語り、すでに天主のことは大いに力を尽くして居り、ローマで数年を過ごし、フランスのカトリック出版方面で盛んな活動を示し、リールのカトリック大学設立に与つて少なからぬ力のあつた人であつた。師は日本を旅行中、函館司教区をたまねく訪れ、札幌へも来たが、そこで当時の宣教師から、司教が

岩見沢に一教会を建てることをお望みの由聞かされると、自分の金をその設立に用立てようと申し出た。もちろんこの申し出には喜んで応じたが、ビュルトー師はなおそれ以上のことをなし、一そう大きい犠牲を払つてくれた。すなわち師は自分でそこへゆき、見すばらしい日本家を借り受けてそこに住み、それから適当な土地を探してもらつて、それを買い入れ、翌千九百十年春、自費で住宅を建て、それができあがると、移転して、千九百十三年までそこに居たのである。その間に師は自分がとてもここで働くことはできないと悟つた。師はもう五十歳近くであつたから、日本語を習ひ覚えるのが非常に困難であつたばかりでなく、日本風な暮らし方や感じ方、考え方に慣れることはできそうにもないと思つたのである。師はある時フランシスコ会の修道院長に向かつて、「この国民のなにもかもが、わたしの間に、とうてい渡ることのできない、広い深い溝を有しているようです。」といつたことがあつた。そういふわけで師は、千九百十三年の夏ペルリオ司教に、同地に駐在する適当な宣教師を定めて下さいと願ひ出た。司教はまたその人選を、フランシスコ会に依頼されたので、カリキスト・ジェリナ師がそこへ派遣された。ビュルトー師はその到着後出発した。本当はフランスへ帰るつもりであつたが、師のいう所によ

れば、その前に、まだなにかよいことをしようと思つたので、ちやうど司祭のいなかつた琵琶崎の待勞院に居る患者たちの司牧に当たることを、長崎司教に申し出た。一年たつと、師は帰国を思い立つた。しかしその内に戦争が勃発して、多くのフランシスコ宣教師が召集された。高邁なビュルトー師は深く心を痛めた。また多数の信徒を、司祭のないままに捨て置いてゆくことに堪えられなかつた。それで師は踏み止まり、しかも死ぬまで帰国しなかつた。待勞院に勤めた後は、長崎司教区中最も辺鄙な所にある教会の一つを受持つことを申し出た。師はいつも「人はなにかよいことをしなければならぬ。」と言ひ、言ひしたものであつた。後には東京大神学校で、教鞭を取つたが自分の始めて設立した岩見沢教会を忘れず、千九百三十五年の同教会創立二十五周年記念日には、高齢にもかかわらず、祭式執行の輔佐に自ら来道したのであつた。

千九百十四年には、残念にもまた同僚修士が少し布教地を去つて行つた。この年の始めはまずパワリア管区出身のマルチエリノ・ヴァイゲルト修士が、次いで間もなくカナダ管区出身のガブリエル・ゴッドフリー修士が去り、後十一月にはジェラルド・ヒル修士もアイルランドのその管区へ歸つて行つたのである。

この年の三月には、モリス・ベルタ師が、モロッコのフランシスコ人従軍司祭

モリス師がモロッコへ召ばれたのと、ほとんど時を同じくして、司祭四名が聖ゲオルグのフランシスコ会最初の修女三名を同伴して七月日本に渡来するといふ喜ばしい知らせが、フルダから来た。また実際その通り出発したのであるが、船がスエズ運河まで来た時、第一次世界大戦争が勃発し、そのドイツ船はイギリス海軍の手で抑留されてしまつた。そのため神父たち修女たちも旅行を続けることができなくなつたので、よんどころなく、また故国に歸つたが、それさえいろいろの回り途をして、やつと辿りついたのであつた。

こうしてわが布教地は、それから何年もの間、援助のないままに過ぎた。けれどもその後間もなく、更に三つの教会を担当しなければならなくなつた。その理由はといえば、こうである——

この年すなわち千九百十四年の三月、ペルリオ司教は至急フランシスコ修道院長と相談したいと望まれ、これに答へたが、それは司教に対して、なるべくその司教区の一部を独立の布教地として、フランシスコ会員に割譲していただきたいという依頼状であつた。司教は快くそれに必要な措置を取らねばならぬと思つたが、同時に苦しい事情をも伝えるを得ないと思つたのであつた。その事情とはこうである——千九百十

知 牧 区 の 設 置 (一九一五年)

千九百十三年は、フランシスコ会布教地に三教会の設立もしくは引継ぎがあつて、またまた大発展



一九一三年に引受けた岩見沢教会

この年の三月には、モリス・ベルタ師が、モロッコのフランシスコ人従軍司祭

この年の三月には、モリス・ベルタ師が、モロッコのフランシスコ人従軍司祭

二年秋、神言會担当の新潟教区が独立するに至つて間もなく、フランス人宣教師たちは、フランススコ会員の働いている地区も、やがては分離されるであろうと思つた。前にもすでにいつか北海道全島を、従つて函館市も含めて、分離独立させようと思つておられたのである。すでに千九百年、函館の町はずれにある亀田教会をフランススコ会員に委ねられたのも、その理由からであつた。しかし他の人々はまたこれについて、別な考えを持つていた。どんなことがあつても、函館市とその周辺とは、札幌に所属させぬというのがそれで、その理由はほかにたくさんあるが、特に挙げていたのは次の三つである。

一、伝統。函館は日本が再び開国されたからできた最初の四教会の一つである。

二、修道院。函館の西にはトラピスト男子修道院があり、市の東にはトラピスト女子修道院があり、また市内にはシャルトルの聖パロウ会の修院がある。

三、仙台はただ司教館のある所に過ぎないが、函館はその司教区全体の呼び名になつてゐる。

この内、決定的なのは、第二の理由であつた。司教は部下の宣教師たちが自分の計画に反対であることを、長い間夢

にもご存じなかつたので、それだけにそのうち知らされた時には、一そう悲しい思いをされた。ましてフランススコ会の神父たちの内には、そんなことを知つていゝ人はただの一人もいなかった。しかし司教は、ぜひとも譲歩しなければならぬと思つたので、札幌知牧区設置の折には、函館ならびにその周辺地区を断念するよう、フランススコ会員に懇請された。また実際の通りにして、司教は御自分で布教聖省に請願されたが、その区劃については、函館地区を御自分の司教区に残してほしいと言ひ送られたのであつた。

請願書はローマに届いたが、その返事はすぐに來なかつた。

ところが八月の始めに戦争が勃発して三週間たつと、日本もドイツを敵とする連合軍側に加つた。宣教師たちは教会の成行を大いに心配した。しかし宣戦布告の後間もなく、敵方外人を決して迫害してはならぬと国民をいましめる閣令が出た。人民には、わけても宣教師たちに好意を示すよう依頼があり、宣教師たちには、その任に留まり、安心して働きを続けるよう、すゝめがあつた。やがて警察も宣教師の一人一人に面接し、なにか敵意を示して自らきつかけを作らない限り、ドイツ人が一人も迫害されぬよう力を尽くす旨申し出た。日本は正式にドイツとの戦争状態に突入し、新聞は折に

触れてドイツを攻撃したが、それでも国民が敵意を示すことは、きわめてまれであつた。宣教師たちは、開戦後も前と同じく、人々と自由に往來することができたのである。もちろん警察の厳重な監視や、次第に発せられたいろいろな訓令は、ある程度支障となつたが、それにもかかわらず宣教師たちの活動が、全く妨げられることはなかつた。

その内にペリオリ司教は、まだ分離すべき地域で働いている四人のフランス人宣教師を引きあげさせる手配をされた。これは、戦争に召集されて本国に帰つたフランス人宣教師が少なくなつただけに、なおさらそう命ぜられたのであつた。

まつさきに引きあげたのは、札幌北一条教会のラフォン師であつた。師は千九百十四年十二月八日、十五年の長きにわたつて極めて熱心に働き多大の成果を収めた札幌の地を離れた。札幌で師と共に働いていたアンシャン神父は、ドロテオ・シリング師と交代するまで、なお二カ月の余も單身踏み止まつていた。ほとんど時を同じくして、それから間もなく、ウォルフガング・ラング師が後任となつた小樽の、コルニエー師と、カリキスト・ジュリナ師が後釜に坐つた旭川の、ウット師とが去つた。カリキスト師は当時岩見沢にいたが、チモテオ・ルツペル師と交代したのである。

こうして分離は、千九百十五年二月十二日に発せられた指令がこの地に到着する前までに、事実上果たされた。指令の到着したのは、四月のことであつた。ペリオリ司教は布教聖省から分離の実行を委任され、かつ知牧の任命があるまで新設知牧区の管理に当たるよう定められた。ヴェンセスラウス・キノルド師が知牧に任命されたのは、四月十三日であつたが、この任命の指令も二カ月遅れて六月十三日に、ようやく札幌に届いた。それから間もなく、ペリオリ司教がその地区の管理を引渡すため、来札され、次いで別手を引かれたが、これはそれきりいつまでもというわけではなかつた。始終依然としてこの布教地の忠実な友であられ、ほとんど毎年一度は函館から來訪され、短期間滞在されたのであつた。

ここでこの偉大な司教の御生涯の、記憶すべき日を少し挙げておこう。アレキサンデル・ペリオリ師は、千八百五十二年九月十二日、セリエール・アン・シヤンペリーにご誕生、千八百七十二年パリ外国宣教会にご入会、千八百七十五年十月十日司祭の叙品を受けられた。千八百七十六年には香港で同会の会計に就任、千八百七十七年から同七十九年にかけてはマルセーユで同じ役目を勤められた。

(つづく)

フランシスコ會

北海道布教小史 (五)

一九〇七年から一九二九年に至る分は
ヴェンセスラウス・キノルド司教の報告による
ゲルハルト・フリーベル

宣教師として日本北部に來られたのは、千八百七十九年のこと、千八百九十一年にはカリングの名義司教となられ同時に函館代牧区の初代代牧に任命せられた。この年の六月十五日には、その代牧区が司教区に昇格された。司教叙階式は七月二十五日東京で行なわれた。ペリオリ司教は、千九百二十四年十一月二十五日附の布教聖省指令を以て、その司

九、第一次世界大戦中の新知牧

(一九一五年—一九一八年)

正式の名称では「札幌知牧区」という新教区は、左の地域を包含していた。

一、渡島支庁の管轄区域、すなわち函館とその周辺地区を除く北海道全部。

二、樺太の日本領。三、千島列島。

新知牧区の擁する当時の信徒数は九百三十人で、この新しい教会行政地区に属する教会は十あつた。

亀田教会は函館司教区に編入された。その代り他の三教会を引き受けることとなつた。それはすなわち、札幌北一条と

旭川と、小樽との各教会である。どの教会にも、司祭を一人ずつしか配置することができなかつた。しかしこの千九百十五年の秋には、一教会を閉鎖した。白老のがそれである。前にもすでに述べた通り、これはアイヌを改宗させるために設置されたのであつたが、年のたつにつれて、見込のない企画であつたことが明らかになつて來た。アイヌ民族は宗教が散つて行つてしまつたのである。それでこ

の教会を廃止し、そのささやかな財物を売り払ふこととした。その機会は來たがそれはようやく次の年になつてからのことであつた。村の人たちはその地所と建物を買い取つて、村医の住宅に宛てたのである。この家屋はそれから少時して焼失した。この教会の廃止によつて、アレキシオ・ヒップ師は手が空いたので、小神学校の管理と、新たに創刊された週刊紙「光明」の編集とを担当した。

「光明」は千九百十五年の御降誕の大祝



中に創刊されたためばかりでなく、戦争がその創刊の理由であつたためでも、戦争の落し子であつた。戦争中は旅行が制限されたために、宣教師たちは、信者や求道者のために、前ほど外へ訪問に出かけることができなくなつた。それで多少口で教える代りとし、かつ信者たちの手に少し宗教的讀物を与えるため、日曜日発行の週刊紙を創刊しようという計画が熟したのであつて、日本にはそれまでまだ、宗教週刊紙というものが全くなかつたのである。この週刊紙は九百五十部印刷したが、その内の六百部ばかりは、予約購読者の払い込みがあり、残りは無料で配布したのであつた。

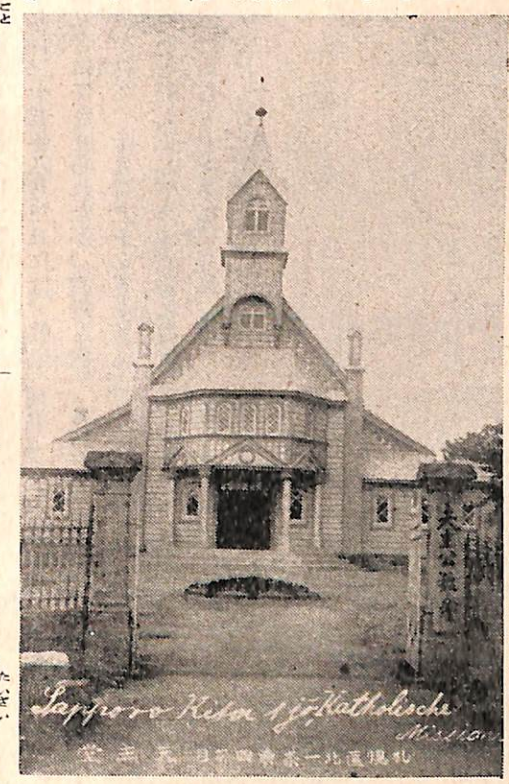
フランシスコ修道会の今までの管区長が、知牧に任ぜられたので、會議に從ひ新しい管区長、正式の称号を用いられ、コミッサリウスを任命する必要がある。これは千九百十五年八月フルダの管区會議で行なわれ、当時小樽の宣教師であつたヴェンセスラウス・ラング師が任命された。

小神学校が開かれたのも、千九百十五年のことである。すでに千九百十二年から司祭志望の少年数名を迎え入れ、まずこれを亀田に置いてその世話に當つたのは、ダヴィド・ミクサー、次いでドロテオ・シリング師で

あつた。当時は布教地がまだ独立していなかつたから、厳密な意味での神学校など、まだ問題にならなかつた。しかし知牧区設置が目前に迫ると、その少年たちは亀田を引きあげなければならなくなつた。そこは函館司教区に属しているからである。札幌には千九百十一年修道院のそばに学生寄宿舎として一家屋が建てられていたの、かれらは同市にきた。その建物には十室あつた。それは大部分ぶさがつていたが、わが宗教のためにほとんど効果が挙げがらなかつた。この家を小神学校として設備を整えたのである。

(写真参照)

知牧区設置と共に、わが布教地は新しい時期に突入した。世界大戦があつたので、遺憾にもその時期は全くよくなつた。新しい神父たちは来る事ができなかった。新しい神父たちは来る事ができなかった。資金は相当逼迫して、前途が不安であつた。なるほど神父はみな働くことができたが、時のたつにつれて警察からの干渉が殖えた。その上ドイツを敵として居る国々の政府が、日本も国内に在住するドイツ人を、宣教師たちまでも收容所に入れてほしいと、時々強要して来た。これは実行されなかつたが、しかし連合国の要求に多少譲歩するため、最初の内は自由であつた外国との交通が禁じられた。後間もなくいわゆる売買禁止令が出され、それによつてたまたま必要な食料、衣料、その他生活する上に必要なものもなくなつてならぬ物を除くほかは、



一九一六年にできた札幌北一条天主堂

らゆる売買が禁じられたのである。看視もまた一層厳重になつた。教会の敵に對しては、熱烈な愛国者として活動し、推測もしくは虚偽の噂にもとずく宣伝を行なうのに絶好の機会が到来した。するとそれにもとずいて、いつでもそれから厳しい取調べが行なわれるのであつた。それにその時代の精神も宗教に全く不利であつた。連合諸国へのいろいろの物資の大量輸出によつて、たくさんの金が国内へ流入した。しかしその結果金の価値は下がり、物がすべり、物が高くなつた。そして仕事がたくさんあつたので、だれもみな豊かな報酬を得ていたが、そのため却つて人々は宗教の宿敵である快樂と奢侈贅沢とに走る事になつたのである。しかしそれにもかかわらず、司祭たちの働きには、効果がなかつた。

千九百十六年にあつた主要な出来事は札幌北一条の聖堂が建立されたことであつた。千九百十六年にあつた主要な出来事は札幌北一条の聖堂が建立されたことであつた。千九百十六年にあつた主要な出来事は札幌北一条の聖堂が建立されたことであつた。

この教会は千八百八十一年に創立された最初の主任司祭は植物学者として世界的名声を博していた、パリー外国宣教会出身のユルバン・フォーリー師であつた。師の肖像は今なお札幌にある北海道大学理学部の一室にかけてある。師は日本北部に林檎の栽培を教えた人で、それは今日大なる収入をあげている産業の一つになつて居る。師は受持地域が広大なため

札幌にはいつも短期間しか滞在できなかった。と言ふのは、まだ鉄道がなかつたために、遠路の旅を、ただ徒歩か馬上でするよりほか仕方がなかつたからである。しかし師は根気よく北海道を端から端まで歩き、散在している少数の信徒に霊魂上の助けを与え、また多くの未信者に洗礼を授けた。但しその準備の教理教授にしばしば短時間すぎるきらいがあつ

なり大量の石料を安く買入れておいた。日本には火事が多いので、石造の聖堂を建てようと思つたからである。けれども費用を見積つたところ、その不可能であることがわかつた。そこで手持ちの石を基礎と柱の台座とに用いることとしたら、ちよつと間に合つた。そのほかは木造建築にしたのである。この聖堂の献堂式は、千九百十六年十月八日、多数の人士参列の下に行なわれた。これは今なお札幌で一ばん大きい聖堂で、司教座聖堂となつて居る。

千九百十七年には、教皇特使ペトレリ師の来訪によつて小更迭が、五月に行なわれた。師は千九百十六年すでに一度、教皇特使として来日されたが、それは少し前に即位の大典を行なわれた天皇陛下にお慶びの辞を申しあげたためであつた。しかし今度の訪問の目的は別であつた。すでに数年前から、日本政府は神道を盛んにし、外国から流れこむ「日本のない」風潮を防ぎ、国民精神を守るための手段にしようと努めていた。学生生徒や官吏、その他政府に關係のある人々は、土地の、または國の神々に敬意を表するたため、一定の日に神社に参詣するこ

うすることできないので、なるべくな

とを強制された。もちろんカトリック信者は義務とする所に従つて、これを拒否した。すると、学校の校長や上司の人々の見解によつて、拒否者に対し、重いか罪か、とにかく懲罰の措置が取られるのであつた。方々の町や村で、中等学校の学生が退学処分にあつたり、先生が免職されたりした。新聞はカトリック教徒を攻撃して、愛国心が無いと書いたり、これに注意人物の烙印を押ししたりした。なかには次のような意味の記事を掲げたものもあつた。

「キリスト教が弘布するよりも、日本にとつて大きな危険はないであろう。この宗教は、君臣の大義を破壊し、陛下の勅語を奉戴せず、危険思想を流布すると共に、思想の自由、學術の研究、文明の進歩を阻害するものである。従つてキリスト教はわが國體と相容れざるものであるから、われわれはわが帝國の神聖なる大義が汚されることのないよう、これを國外に駆逐することを望む。」云々。

キリスト教にとつて、甚だ面白からぬこの情勢に搦て加えて、政府当局の多くの人が、宗教的行為でなく、単に祖先や國の偉人に敬意を表する行為に過ぎないとして居る神社参拝が、果たして行なつていいものか悪いものか、それさえ明確に言うことができないのであつた。それで当時日本の司教たちは、教皇にお頼りしてお指図を請ひ、自分たちではどうするともできないので、なるべくな

らばいつそのこと御自身政府に執成して下さるよう、お願いした。カトリック教徒は、一勢力をなすにはまだあまりに数が少なかつたし、その上カトリック教会は日本において他の各宗教のように容認されてはいたが、まだ法律上は仏教や神道のように宗教団体として認められていなかったのである。ちよつとその頃紛争の最も烈しかった長崎地区では、司教が内閣総理大臣と折衝した。首相は司教の立場も理解し、従つて対処方を緩和してくれたが、間もなく辭職させられた。それで教皇は、日本にまだ教皇使節館の設けもないまま、マニラの教皇使節ペトレリ師に、政府と交渉のためまたもや日本を訪問するよう、命ぜられたのであつた。当局大臣は使節をもやはりていぬに迎え、その言ひ所を聴取した。しかしその答は、いろいろな大臣と談合しなければならぬから、何分の返事のあるまで、二週間ほど待つてほしい、というのであつた。その時使節は、待つことは待つけれども、その間方々の教会を訪れるため国内を旅行したい、と言われた。そういうわけで、使節は札幌にも来られ、二日間滞在された。お歸りの際は小樽をもちよつと訪問された。

東京での使節と政府との折衝からは、

一〇、第一次世界大戦直後の数年間 (一九一八年—一九二一年)

千九百十七年八月には、宣教師の間に小更迭があつた。管区長ヴォルフガング・ラング師は、小樽から札幌へ移り住んだ。その代りには北一条のドロテオ・シリング師が赴任し、これに交代したのは岩見沢のチモテオ・ルッセル師であつた。岩見沢へはヒラリオ・シヌメルツ師が広島から転任し、そこへはアレキシオ・ヒップ師が赴いた。

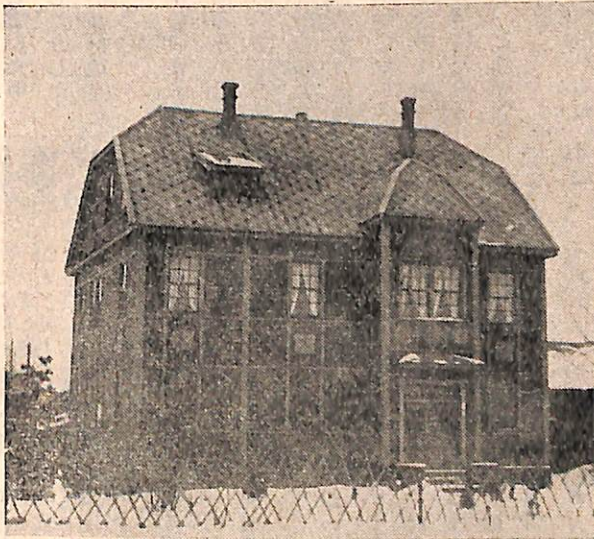
たことは、遺憾であるが、しかしこれは土地の事情によるものであつた。フォーリー師は植物採集の旅に出て台湾にゆきそこで毒虫に刺されて不慮の死をとげた。千九百十五年のことである。

次いで千八百九十一年には、日本に教階制度が布かれ、札幌教会は常駐の司祭二人を得た。この教会は千九百十五年二月、正式にフランススコ会員が引き継いだ。最初その仮小聖堂は司祭の住宅一階にあり、その後そこから引き移つた石造階制の二階にあつて三間を占めていたが、夙から要求を満たすに足りなくなつて来た。この家を建てたラフォン師からしてすでに、何年も前から聖堂をほしがり、そのため募金して来たのであるがそれはただ少ない所屬信徒のなかでだけに過ぎなかつた。零細な寄附が手に入る度にそれを積み立てておいたところ、師が札幌を去る時には、合計六千円を越える金高になつて居た。ある日カトリック信者である一人から、聖堂建築基金にとかなり多額な寄附が入つた。この女は大金を他人に貸しておいたのであるが、返してもらえないと思つた。それでもそれが返却されたら聖堂建築費としてさしあげましようと思つたのである。幸いにもそれは大部分回収された。当時は材料費や工賃が割合まだ安かつたので、建築に着手することができた。ラフォン師は市内にある時火事であつた折に、か

人に対するいろいろな規定は、まだ当分効力を失わなかつた。とは言え、カナダからユルバン・クルチエー師という援助者が来た。師は千九百十八年十二月六日札幌に来着、少時同地に滞在後、旭川に赴いた。それはその同国人カリキスト・ジェリナ師の所で、日本語を習うためであつた。

千九百十九年には平和が克復されたがドイツ人差別規定はまだ撤廃されなかつた。それどころか七月一日にはドイツ人フランシスコ会員の家々の財産目録作製の調査が行なわれた。これは講和の条件として、ドイツ人の財産を悉く没収することが要求されたからである。なにもかも——どんなに小さいものまでも——書き留められ、郵券類や金銭もあるだけ残らず勘定された。役人二名、警官四名から成るその方の委員が来ると、当局の命令書を渡したが、それには、抵抗したり何かを隠匿したりすることを禁ずる、そんなことをすれば、厳罰に処するといったためであつた。この委員たちは何の通告もなしに、突然現われたのである。しかし在日ドイツ人たちがまだそんなことを夢にも知らずにいる内に、ローマにはすでに知れたので、ベネチクト十五世教皇は東京の日本政府に宛て打電された。それは、ドイツ人宣教師も他のすべてのそれと同じく、聖座の名代として働いてゐるのであるが、同様に教会の財産も、

宣教師たちやその国の一団体のものではなく、全教会の財産であつて、その最高管理者は教皇であるから、管理について弁明を求めたのもまた教皇である、という趣旨であつた。宣教師たちもこれと同じことを言つていたので、七月二日には早くも、教会の財産は没収すべからずという勅令が発せられた。それで、宣教師からも、なにも取りあげられなかつたのである。



一九二〇年に建築の教区長館

千九百十九年には、ついにドイツ人に対する差別規定が撤廃された。ドイツ人宣教師たちは活動する上に再び完全な自由を得た。しかし残念なことには、ほかの障壁が生じて、折角自由になつた時だけに、一そうつらく感じられた。それは資金がいっぱい尽きてしまつたことである。その上自分の間は故国から、なにか援助金の貰えそうな見込みもなかつた。とは言え、今度もまた天主は御摂理を以て設置以来日なお浅い知牧区を、見すて給わなかつたのである。

千九百二十年春には、札幌北十一条に教区長館が建てられた。布教本部として用いられている修道院が、新たに来る答の宣教師たちを、もはや容れるに足りない

くやつたからである。ルカ・ベルニング師が、聖ゲオルグのフランシスコ会最初の修女三名を伴ない札幌に到着したのは、千九百二十年八月末のことであつた。この修女たちはすでに戦争前に来る筈であつたから、その修院は六年の間空のままであつたわけである。ルカ師は到着したものの、宣教師のある日食事をすまずと、スプーンをわきにおいて、「こんなものも、今にもういらなくなる。」と言つた。享年五十二であつた。

千九百二十年七月には、六年間不在であつたモーリス・ペルトン師が、モロッコからまた日本に歸つて来た。そして師は札幌から、カナダのフランシスコ会員が鹿兒島に新設する教会の準備をしようとしたのであるが、その計画の実現が一年以上も遅れたので、当分札幌知牧区の手伝いをするのであつた。師の手伝いは、千九百十九年からダヴィッド・ミバク師が倶知安の空いている教会へ転任になつていただけに、一そう歓迎された。「光明」紙の経営は、半年ほどの間ドロテオ・シリング師が引き受けたが、師がフルダ管区に歸つてからは、北一条教会のチモテオ・ルッペル師が自分の教会を管理するかたわら、千九百二十三年の夏まで同紙の編集を続けた。

千九百二十年の出来事の内、なお述べておかなければならないのは、教皇使節「マゾニ・ピオンデ師の訪日である。と言ふのは、千九百二十年の春、聖座により日本ならびにその植民地のため教皇使節館が設置されたが、その初代使節が数年来インド駐在の使節を勤め、その前には十八年間布教聖省の一員であつた前述の「マゾニ・ピオンデ師が任命されたのであつた。(つづく)

フランシスコ会

北海道布教小史 (六)

一九〇七年から一九二九年に至る分は
ヴェンセスラウス・キノルド司教の報告による——
ゲルハルト・フォーベル

師は札幌知牧区を千九百二十年九月初旬御来訪、札幌市の数日前に移転を完了したばかりの新築教区長館に最初の賓客として二週間滞在された。

千九百二十年は、ひそかに働いた一年であつた。目に立つことはなにもできなかった。教会を拡張することもできなかった。しかしそれは活動を停止しているという意味ではなかつた。それどころか信徒の数が多くなればなるほど、いよいよ仕事も殖えてきたのである。実際、札幌知牧区すべての教会に、信徒が増加したことは、言つておかなければならない。

最もつらかつたのは物質上の逼迫であつた。その上日本の物価は、世界で一番高いといわれたくらいに高かつた。この悲境に臨んで、知牧ヴェンセスラウス・キノルド師は、当時のフルダ管区長テオドール・ヴィッツェル師にすがり、どうぞ総会に出席のため管内を通るアメリカ合衆国の管区長たちに、なんらかの方法で助けてもらえまいか、または寄附を集め

に米国に赴く一宣教師に、言葉や行ないで力添えをしてもらえまいか、尋ねてみて下さいと願つたところ、このあとの方なら、してもよいと言われたさうであつた。そこでドロテオ・シリング神父が米

国へゆき、そこで二年の間大いに奔走したが、その募金成績もかなりよかつた。師の集めた金では、まず滞つていた負債を払い、生計を立て、大きい地所を買ひ後に述べる建物を千九百二十六年までに仕上げた。

千九百二十年九月一日の統計によれば札幌知牧区で働いていた司祭は既述の如く十二名、修士は三名、修女は十一名で教会は九つあつた。そして受洗者は三百二十八人、受洗準備中の求道者は百三十八人おり、信徒数は一千二百五十八人となつてゐる。

千九百二十一年二月、知牧は東京の教皇使節館を通じて、ローマ布教聖省からの書状を二通受け取つたが、それはロシア領である樺太北部に在住するカトリック信者の司牧を命ずるものであつた。こ

の地区はシベリアのモヒレウ司教区に属してゐたが、その司教はベテルスブルグに住んでゐた。北樺太は依然その司教区に入れられてゐたが、札幌の知牧はただその全権管理者に任命されたのである。北カラフトには当時日本軍が駐留してゐたので、アグネルス・コワルツ師は千九百二十一年および二年に、いくたびかアレクサンドロウスタまでゆき、そのカトリック聖堂でミサ聖祭を行うことができた。しかし後に日本軍がまた北カラフトを撤退してからは、そこへゆくことも不可能になつてしまつた。

札幌知牧はまた、布教聖省から、一度カムチャツカへ自分でゆくか、適当な一宣教師をやるかして、そこに教会を設立することができないかを見るように、との命令をも受け取つた。けれども同地に赴く許可は、決して司祭には与えられなかつたので、この計画は実現しなかつた。始めからフランシスコ会員の布教地域に属してゐた千島列島にゆくことも、同様司祭には絶対にできなかつた。日本政府は外国人に同列島往訪の許可を、いかなる手とせよとなしなかつたのである。

千九百二十一年度の主要事件は、新領の協力者が来たことであつた。ウゴリ・ノル、チデモ・ヨルダン両師が、八月十七日、札幌に着いたのである。両師と同時に聖ゲオルグのフランシスコ会修女たちも更に三名来着した。

しかしドイツから来たこの宣教師たちも、それまでに出来た空席をただ満たしたに過ぎず、人数を増すことにはならなかつた。千九百十一年から、従つて十年間というものの、宣教師の数に變りはなかつた。来る人があれば去る人があつたためである。新参の人々はいつもまず事に熟達する必要がある、かれらが立去つた人々の後を埋めるまでには、長くかつたから、実際にはその立場は決して同じではなかつた。

フランシスコ会の小神学校からは、最年長の学生ヨゼフ大久保が、プロバガンダの神学校で哲学と神学を修めるため、千九百二十一年秋、ローマに向けて旅立つた。

この小神学校は多くの心配をかけた。それは小さすぎたので、拡張しなければならなかつたが、それに対する費用がなかつた。また神父たちは布教の仕事で手がふさがつてゐるので、適当な教師を得るにも大いに困つた。

千九百二十一年十一月三日には、モーリス・ペルトン師とユルバン・クルチエー師とが、南のはずれにあつて、千五百四十九年フランシスコ・ザヴェリオが最初の司祭として上陸した、ゆかりの地鹿兒島に、カナダ、聖ヨゼフ管区の教会を設立しにわが布教地を去り、本当は同管区出身のカリキスト・ジェリナ師も、三人目にそこへゆく筈であつたが、札幌知

一、好 況 時 代 (一九二三年—一九二九年)

牧区に司祭が不足していたので、任地旭川になお一年の間踏み留まり、それからやはり南方に去つたのである。

千九百二十一年には、すべて司教区であるフランス人宣教師たちの布教地と並んで、そのほかの国人を宣教師として知る知牧区が三つあつた。それはスペインのドミニコ会担当の四国、神言会担当の新潟、およびフランススコ会担当の札幌の各教区である。千九百五年知牧区と定められた四国教区は、千九百二十一年現在、信徒五百三十名に宣教師八名を有し、千九百十二年知牧区と定められた新潟教区は、千九百二十一年信徒四百六十六名と宣教師十八名であつたのに、千九百十五年知牧区と定められた札幌教区は、千九百二十一年早くも信徒千二百五十八名と宣教師十二名を擁するに至つたのであつた。札幌教区は広袤の点では日本最大であつた。そして信徒がその広い地域に散在しているので、宣教師たちの旅行には、時間も費用も余計にかかつた。それにもかかわらず、知牧区と定められた千九百十五年から千九百二十一年までの間に、新しい信者が四百人ばかり殖えたのである。これに対して他の知牧区その増加数は百五十人か百人ぐらゐに過ぎなかつた。

マリアの宣教師フランシスコ修道女会経営の病院でも、千九百二十一年には従来より多数の患者を取り扱つた。

従来札幌北十五条にあつた修道院の附属聖堂は、信者の数が殖えるにつれて、狭隘を告げるに至つたが、決定的な聖堂建築ができないので、北十一条に四千円の費用で仮聖堂を建てた。これは後に本聖堂が建てば、かなり大きい集会所として用いることができるよう、作られたのであつた。落成は千九百二十二年七月末で、同時にさしあつて集会ならびに伝教の場所として使う建物もできあがつた。

千九百二十二年八月には、ローマへ召還されたフマゾニ・ビオンチ前教皇使節に代わつて新教皇使節マリオ・ジャルチニ師が、札幌へ来訪された。これに隨行された師の秘書ヤヌアリオ早坂師は、五年後ローマでピオ十一世教皇から司教に祝聖叙階された最初の日本人で、長崎司教区を治められた方である。

千九百二十二年からは、キリスト教に対する態度に変化が生じた。カトリック信徒のある夕べの集いに、教皇使節のおられる前でその秘書早坂師は、「わが国では、宗教にとつての冬が終りを告げ春が近づいて来ました。」と言われ、それからその証拠となる事実を列挙された。また実際そうなつて、求道者の数は著しく殖え、宗教に対する関心は盛んになり

司祭や修士の召命を蒙る人も増加したのである。この相違は、前の時期を経験した人には、ハッキリとわかつた。

千九百二十三年には、教会のある権利が認められた。これは一見些細なことのようであるが、実は大いに重要なことであつた。それは教会が団体として認められ、不動産を所有させてもらえる権利を賦与されたことである。今までは教会が一つの地所を手に入れると、必ず一邦人の名前で登録しなければならなかつたから、従つて法律上はその人が所有者になるわけであつた。当時邦人司祭はまだ少なく、北海道その他方々の所では、ただ一人の日本人司祭さえいなかつたので、土地所有の登録は、たいがい伝道士か信用できる信者の名前で行なつたのである。で、この人々が法律上の所有者なのであるが、もしそういう「法律上の所有者」の一人が死ぬと、「相続人」や相続税法について面倒が起つた。しかしそれよりもつと悪い場合もあつた。それはすなわちそういう人が、自分の信用されているのをいいことにして、そうした土地を売つてしまふことであつた。土地所有に關するこういう面倒こそ、ドイツ人宣教師の二三名が日本に帰化した理由にほかならない。それはそうすればその名

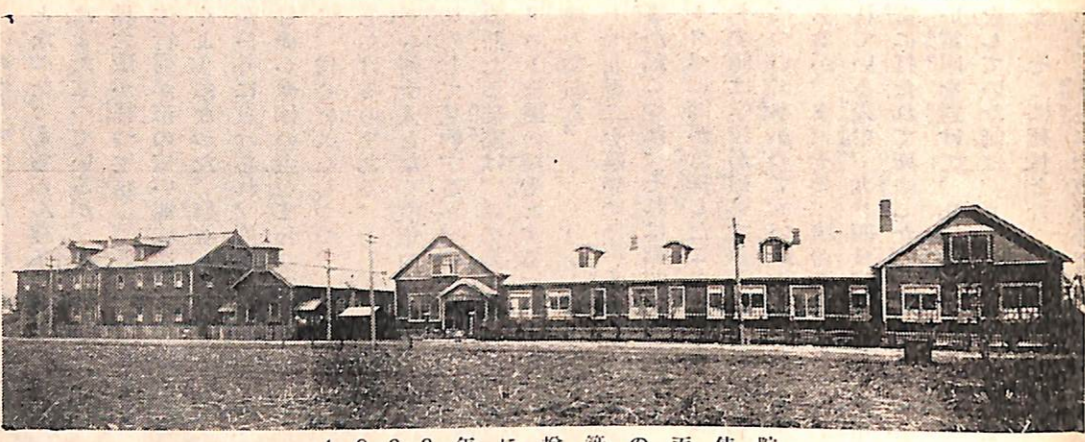
前で登録することができるからであつた。

熱望していた宣教師の増加が実現されたのは、千九百二十三年九月のことであつた。渡来したのは、フルダ管区出身のエマヌエル・ツェントグラーフ、チト・チーグレル、およびシレジア管区出身のダマソ・ゴラの三神父と、それに同行のチト・ヤコブス、およびルトゲール・ハインの二修士で、この人々は神戸に上陸し、札幌へ来るのに、迎えに行つたチモテオ師の案内で、非常なまわり路をしなければならなかつた。それは少し前の九月一日に、例の関東大震災があつて、東京、横浜が滅茶々々になつたからである。

マリアの宣教師フランシスコ修道女会経営の病院は、思いもかけぬ順調な発展を示し、狭隘を告げるに至つたので、千九百二十二年には、一部を改造し一部を拡張しなければならなくなつた。

聖ゲオルグのフランシスコ修道女会に志願者数名が入会を申しこんだので、札幌の修院に、修練院設置の許可をローマへ願ひ出たところ、それは普通の条件で与えられた。その最初の着衣式が行なわれたのは千九百二十三年八月のことであつた。同様に修女の住む修院も起工され翌年落成した。この修院の祝別奉獻式は千九百二十四年七月二日、従来修女たちが住んでいた小さい仮修院は、別院とな

り、多年修練院として用いられた。



1922年に増築の天使院

その本修院がまだ全くは出来あがらない内に、高等女学校校舎の建築準備も始まつた。校長と定められたヨハンナ・ペルクマン童貞は他の一童貞と共に、五月

すでに、一流カトリック諸学校の設備および経営ぶりなどを見学のため、東京その他の諸都市を歴訪し、約一カ月の後、歸つたが、できるだけ、その提案と希望とに従つて、校舎の準備をし、政府に認可を申請した。こういう学校に対する教案は、かなり精密に定められ、その方針は勝手に更えることができなかった。こういう折にはいつもそうであるように、とうとう申請書が受理されるまでには、いくたびも折衝したり、変更したりしなければならなかつた。文部省の認可は、千九百二十四年十二月二十四日に下りたが、これによつてこの学校も国立諸学校と同じ権利を——もちろん同じ義務をも——得たのである。

その内に校舎の建築工事は順調に進み、こうして千九百二十五年四月一日早くも授業を始めることができた。毎年同学年の三級級に生徒百五十名を入学させることも申請して許可された。最初の年からすでに入学申込者が三百十八名もあつたので、定めぬ通り入学試験を行なつて、百五十名を選抜した。

千九百二十四年俱知安では、教会が便利な場所に移された。設立当時には旧の場所も便利であつたのであるが、時のたつにつれて、町が反対の方向に発展し最初の教会のまわりにあつた家々は取り

払われて、ほかの所に建て直されたのでやがて教会は一つポツンと取り残されるに至つたが、とうとう教会もこの動きに従わざるを得なくなつたのである。

人口約一万の苦小牧もその頃は空蘭教会担当地域に属していた。この町には東亜最大の製紙工場があるが、すでに数年前から月に二回、小さい借家でミサ聖祭がキチンキチンと執行されていた。しかし千九百二十五年には、オイゼビオ・ブライトン師の熱心な奔走のおかげで専用の家が建てられ十一月九日に開かれた。

ミカエルの祝日には、最初の修道志願者ヨゼフ白石が第三会の会服を着け、アントニオという修道名をもらつた。

札幌市の信徒数は著しく増加したのでこの年には始めて聖体行列を試みることにした。信者たちもこの知らせを熱狂して迎え、無上の緊張を以てこの行事を待たつた。老いも若きも、熱心にその準備に取りかかつた。北一条教会は、極めて美しく飾られた。午前九時、盛況ミサと説教とがあり、聖体は晩まで顕置されたままであつた。その昼の間は、いろいろな会や身分の人々がそれぞれの時間に従つて礼拝を行なつた。これも始めてのことであつたのである。とうとう緊張しきつて待ちに待つていた晩が来た。他所からの宣教師もたいがいこの行列に参加しに集まつた。聖堂は超満員の盛況であつた。行列は七時に動き始めた。もちろん最初のこととして、それはただ聖堂内で——翌年は教会の構内で——行なわれたに過ぎなかつたのである。この行事全体は信者の心に、あとまで残る深い感銘を与えた。当時知牧キノルド師は、

「この行列が街路を練り歩くことができないいろいろな神仏の社や寺のある所に、祭壇が設けられて、そこから主が御民を祝福し給うような時



1925年に出来た苦小牧出張所と日曜学校の生徒

前にもすでに述べた通り、聖ガオルグのフランシスコ修女会の学校は、千九百二十五年四月一日に開かれたが、遺憾にも校長ヨハンナ・ベルクマン童貞は、当日出席できなかつた。重い病の床に就いていたからである。入学試験の指図はまだしていたのであるが、それから病気がかかり、手術を受けなければならなくなつた。そして再び学校を見ることなく、五月二十五日世を去つたのである。同童貞はほとんど五年にわたつて、熱心に研究を積み、自分の職に対して準備したものであるが、天主は同校のため、犠牲をお求めになり、童貞もまた快くそれを献げたのであつた。後任の校長としては、クサヴェラ・レーメ童貞が定められ、政府からも承認せられた。

「藤学園」という名で知られているこの学校が、創立者ヴェンセラウス・キノルド師の会心の事業であつたことは、特記しておかなければならない。師は死ぬまでこれに極めて大なる関心を寄せておられた。故国ドイツがインフレの結果、



1925年に建つた札幌フランシスコ修道院

そこからの経済的援助がごく僅かしか来なくなつたので、ほかの手段方法を探さなければならなくなり、それで既述の如く、ヴェンセラウス・キノルド師は七年間わが知牧区で働いていたドロテオ・

は体操場のほかに、まだ教室、図書室、自然科学の標本室をも擁していたのである。できてからまだ日の浅いわか布教地にとつての重要な出来事は、ベルナルデン・ヤコビ師が総長特派巡察使として、来日されたことである。師と共にラヂスラス・フレッシェン師とナザリウス・デイ



1925年にできた藤学園

北海道布教小史 (七)

フランシスコ会

一九〇七年から一九二九年に至る分は

ヴェンセラウス・キノルド司教の報告による
ゲルハルト・フリーベル

シリング師を、募金のためアメリカへ派遣することを、フルダに願ひ出られたのであつた。それから二年間、ドロテオ師は新世界で大いに奔走した。藤学園の事業が成功したのは主として師のおかげであると言つていい。

戦争が終わつてからは宣教師の数が司祭も修士も絶えず増加する一方であつたので、従来の本部は狭隘を告げるに至り、その上新らしい道路ができるため立ち退かなければならなくなつたので、札幌北十一条の一地所に千九百二十五年現在のフランシスコ修道院を建てた。これは秋までに出来あがり、聖女エリザベットの祝日に祝別された。

古い建築工事が行なわれた。それは藤高等女学校の体操場であつたが、この建物

は、いつ来るのであろう。」と記しておられる。しかしこの御希望の一部は、その御生存中に果たされることとなつた。もちろん神仏の杜寺はまだ立つているが、第二次世界大戦が終つて後は、毎年聖体行列が市の広い地域を練り歩くようになつた。祭壇もいくつか戸外に設けられ、約三千人の信徒が聖体の主のまわりに集うて、信心を尽くしつつ、供奉申しあげるのである。そして教外者も何千人となく沿道の両側に堵列して見物するが、その静粛整然たる態度は、以て若干のキリスト教国の模範とするに足るほどである。



チモテオ小尾神父

北一条教会に、チモテオ師の後任として来たのはヒラリオ・シニメルツ師、そのまた後を襲うたのは旭川のエマヌエル・ツェントグラーフ師であつた。ダヴィド・ミバク師は会計となつて、俱知安から札幌へ転任し、その後釜にはチト・チーグレル師が坐つたのである。

樺太の教会も、順調な発展を示した。わが知牧区所属地区の南カラフトにいる信徒は、千九百二十四年、三百五十名を算し、受洗者は九名あり、またロシア正教からの改宗者が四名あつた。

カラフトの大泊では、敷地を手に入れた、新しい一教会設立の準備を進めた。宣教師の数は千九百二十五年、三人だけ増えた。六月にはシレジア管区出身のマルチン・プロトニク師が来て、間もなくアグネルス・コワルツ師と共に働いた。



チモテオ師が雷に打たれて死んだ所の木が道路が出来てもしばらくはそのままにしていた。

更に統計として、わが知牧区の成功を証するのは、信徒の旺盛な熱心である。千九百二十五年には、この教区に信徒が一十七百二十二人いたが、宣教師たちは告白を聴いたこと一万三千五百回、また聖体を延べ四万八千人に授けた。従つて一人の信者が年に平均二十八回聖体を拝領したわけになる。

(つづく)

の札幌到着は千九百二十六年十月二十八日のことであつた。巡察使管区長は長い航海の間に重病にかかられたけれども、日本に着くまでにうまく回復された。師は他の地域における布教活動の模様を少し知るために、東京に一週間滞在された。それから十一月四日札幌に到着された。師は聖女エリザベトの祝日の前週に、集まつた宣教師たちの懇話会を指導し、の間もなく最北端の豊原（カラフト）から巡察を始められたが、そこへ渡られる途中、時化に狂う北の荒海を知る十分の機会を持たれた。続いて、北海道における巡察を行なわれたが、その結果若干の更迭があつた。すなわちルカ・ベルニグ師は管区長となり、デチモ・ヨルダン師はダヴィド・ミバク師に代つて会計となつて多年その事務を執り、チト・チーグレル師は倶知安から札幌へ転任になり、その後にはソラノ・デンケル師がゆき、ウバルト・シェツケ師は広島へゆき、そこにいたウゴリン・ノル師は手が空いたので光明の編集を担当したのである。週刊紙「光明」の発行からだんだん発展して、宗教的な読物や書物の発行所およびそこや他の出版社刊行の書籍を扱う売店もできた。これらの経営は全部千九百二十七年一月一日から、管区の手に移された。

されたのは、二月十二日朝のことであつた。三月四日には、今まで会計を勤めていたダヴィド・ミバク師が、新しい活動の舞台カラフトに赴いた。師はそこでまず豊原に在るアグネルス・コワルツ師の許に身を寄せ、そこから大泊に出張して、日曜のミサ執行と、教会の建築準備とに当たつたのである。千九百二十七年にはまた、熱望していた新しい働き手の増加も実現した。九月十六日には、ゼーノ・フレック師、ヴィタリス・チレ修士、および修道志願者ベリンハルド・ステファンが札幌に着いた。また十二月七日にはマルチン・フリーゼ師がまわり道してブラジルを経由、札幌に着いた。師は同国で癩患の良薬を探して来たのである。千九百二十七年には、新しい教会を二つ、設けることができた。それはカラフトの大泊と、北海道東部の釧路とにである。大泊にはすでに千九百二十七年、フランス人宣教師フオーリ師



1927年設立の大泊教会

が、小さな土地の付いた家屋を一軒、手に入れておいたが、その内にこの地所も家屋も、教会を設けるには狭すぎるようになった。それにその位置も、時がたつにつれて不便になつて来た。と言うのは、その町が、港湾施設のできた結果、だんだんその家屋のある辺とは遠ざかつて行つたからである。それでアグネルス師は、ついでを以てもつと中心部寄りの、やはり小さい家の立っている土地を買入れた。その家はもう新しくはなかつたけれども、まだ住むことができるので、仮聖堂付きの本当の住宅を建てるまで、ダヴィド師が仕事を始めるのに都合がよかつた。

この年藤高等女学校のそばに、約百二十名を容れる大きな寄宿舎が建てられた。この建築は、偶然、新たに施行されたばかりの警察の建築取締規定の適用を受けた最初のものであつたので、いろいろの困難に出会つた。近所にいたある人が、いくたびも建築取締規定に違反してると言つて密告した。この密告は本當でなかつたけれども、その度に警察から調査する間工事を中止せよという命令が来た。ある時などは、まる一月も、それを中絶させられたくらいである。しかし三度目の密告も本當でないことがわかつてからは、もう当局でも顧みないようになり、工事をしまいまで遂行することができたのであつた。その落成は十月一

日で、すぐ引き移ることができた。エマヌエル・ツェンドグラーフ師は、もつと人々と接触を図るために千九百二十七年九月一日、岩見沢に幼稚園を開いたが、これはわが北海道の布教区で、その方面の最初の試みであつた。この幼稚園の成績は甚だよかつたので、後にはすべての教会でも、こうした幼稚園を設けたのであつた。千九百二十八年にもまた、新しい協力者が渡来した。二月七日には、ゲルハルド・フリーベル師が、ダニエル・クリューベル修士と共に、札幌に着いた。なおわが教区最初の邦人司祭、ヨゼフ大久保師も、フルダで学業を終えて後、これと同行、札幌に歸つて来た。大久保師は千九百二十七年七月二十四日、フラウエンベルグ山上の美々しく飾られた修道院附属聖堂で、フルダのヨゼフ・ダミアン司祭から司祭の品級を授けられたのである。同司祭は授品後修道院で新司祭に一場の挨拶をせられ、その中で、ほかならぬこの自分がドイツで叙品されることになつた最初の札幌教区日本人司祭に按手するため、御摂理によつて天主に選ばれたこととは、大いに喜ばしいと、力をこめて述べられた。それからまだ、その式に出席



1925年に建てられた釧路教会

した日本人司祭洪谷師、その他新布教の日本人司祭志願者三名が紹介された。

たのは、二月十二日朝のことであつた。三月四日には、今まで会計を勤めていたダヴィド・ミバク師が、新しい活動の舞台カラフトに赴いた。師はそこでまず豊原に在るアグネルス・コワルツ師の許に身を寄せ、そこから大泊に出張して、日曜のミサ執行と、教会の建築準備とに当たつたのである。千九百二十七年にはまた、熱望していた新しい働き手の増加も実現した。九月十六日には、ゼーノ・フレック師、ヴィタリス・チレ修士、および修道志願者ベリンハルド・ステファンが札幌に着いた。また十二月七日にはマルチン・フリーゼ師がまわり道してブラジルを経由、札幌に着いた。師は同国で癩患の良薬を探して来たのである。千九百二十七年には、新しい教会を二つ、設けることができた。それはカラフトの大泊と、北海道東部の釧路とにである。大泊にはすでに千九百二十七年、フランス人宣教師フオーリ師が、小さな土地の付いた家屋を一軒、手に入れておいたが、その内にこの地所も家屋も、教会を設けるには狭すぎるようになった。それにその位置も、時がたつにつれて不便になつて来た。と言うのは、その町が、港湾施設のできた結果、だんだんその家屋のある辺とは遠ざかつて行つたからである。それでアグネルス師は、ついでを以てもつと中心部寄りの、やはり小さい家の立っている土地を買入れた。その家はもう新しくはなかつたけれども、まだ住むことができるので、仮聖堂付きの本当の住宅を建てるまで、ダヴィド師が仕事を始めるのに都合がよかつた。

二十四年の御復活から、フラウエンベルグの修道院で神学の勉強にとりかかつたのであつた。大久保師は二月十二日、札幌北一条教会の聖堂で盛式ミサを献げ、続いて近くにある伝道館で、札幌信徒の歓迎会が行なわれた。わが布教地の発展に関係はないが、それでも書きとめておく値打のある小事がある。それは千九百二十八年二月二十二日から三月一日まで、天皇の弟君秩父の宮殿下がウインター・スポーツ大会御出席のため北海道に滞在せられたが、



その間わがフランシスコ修道院のパン製造係のパンを召しあがつたことである。それが甚だ殿下の御意に召したことは、後に一度、御依頼によりなお二塊をあとからお送り申しあげたことがあつたほどであつた。わがパン製造係のルトゲール・ハイム修士の光榮として、ここに記しておく次第である。チト・チーグレル師は、四月三日、札幌から室蘭に転任になり、これと交代したオイゼビオ・ブライトン師は、神学校で哲学とラテン語を教えるため、札幌に來た。チト師は室蘭でミサ典書の翻訳に着手した。この本は千九百三十五年光明社から出版せられるまで、八年かかつたが、大成功で、多年にわたり日本で最も多く使用された信心書の一つとなつた。教会法による修練院が札幌にある修道院内に開かれたのは、千九百二十八年六月二十九日のことであつた。これに対する認可は、すでに千九百二十七年十月二十四日、布教聖省から下つていた。最初の修練者は、修道志願者としてドイツから来たルドビコ・ステファン、ならびに日本人アントニオ白石の二人であつた。八月一日には、シドニーの聖体大会に御出席の途中、わがフランシスコ修道院を訪問された、ドイツ、オスナブリ

千九百二十九年三月十八日、北海道の「地方新聞」「小樽新聞」は、札幌知牧区が代牧区に昇格され、従来の知牧ヴェンセスラウス・キノルド師が代牧に任命されたというローマからの報道を掲載した。これは始めて聞く話であったので、やがて四月二日、東京の教皇使節から

二、札幌代牧区の設置 (一九二九年)

右の新聞報道を正式に確認して来た。知牧ヴェンセスラウス・キノルド師は三月十八日、小アジア南部アダリア附近の教会行政区割ベルジエ州にある、パネモテコ(今のバードム・アガチエ)の名義司教に任ぜられたが、更に四月三日附指令で、札幌代牧に任命された。そして千九百二十九年六月九日、札幌北一条教



叙階式を終えて教会を出られる司教達

道師、神言会員新沼知牧チエスカ師、フランシスコ会員鹿兒島知牧エジデオ・ロア師、ならびにその布教地の管区長で、もと北海道の宣教師であったフランシスコ会員カリキスト・ジェリナ師などであった。荘厳な祝聖叙階式は、三時間近くもかかった。札幌の諸教会合同聖歌隊は、多声合唱でミサ曲を歌った。

あります。またあなたがよく目的を弁えて、あせらず着々と働いて収められた成果が認められたためでもあります。今日という日はあなたにとつて、また劃期的な日でもあります。なしとげられたことは実に多いが、しかし多くの仕事はまだあなたを待つて居ます。ですから今日という日はまた今後休まず働くための拍車でもあるわけで

北海道布教小史 (八)

フランチスコ会

一九〇七年から一九二九年に至る分は
ヴェンセスラウス・キノルド司教の報告による
——
ゲルハルト・フリーベル

それで値段は比較的安かつたし、市内における位置も中心部に近かつた。新教会は一部鉄筋コンクリート、一部煉瓦建築で、二階建てである。その上に聖堂、下に集会所と教理研究室とがあり、司祭館は聖堂のうしろにあつて木造である。この聖堂はかなり大きいので長年狹隘を告げる心配はない。

たのである。しかし修女の数は絶えず殖える一方、寄宿舎にも信者の少女がたくさんいたので、もはや場所が狭くなつてしまつた。それで十分広い、きれいな小聖堂を建て、十月十七日に献堂式を行つたのである。(次頁の写真参照)

千九百二十八年には、いろいろ建築工事をしたので、仕事も心配も多かつた。しかし遺憾ながら、かなりな負債もできたので、翌年千九百二十九年には、大きい事業はなにも始めないことにした。

ツクのベルミング司教が、北十一条教会聖堂で盛大な司教高座ミサを執行された。同年岩見沢には新しい教会が建てられ八月十五日厳かに祝別された。

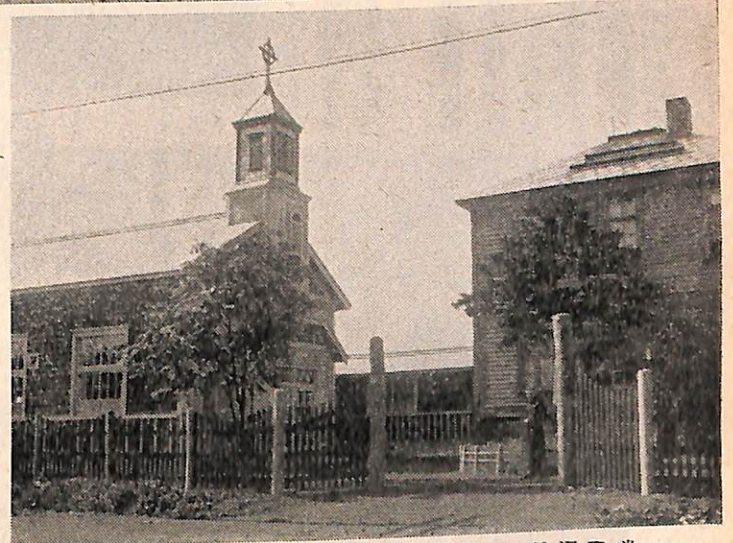
千九百二十八年における更に重要なことは、広島村に一病院が設立されたことである。この設立の由来を尋ねれば、その前の年村の有力者数人が、札幌の天使病院に医師を一人分けてほしいと頼んだ



1928年にできた小樽富岡教会

ことから始まる。この依頼には応ずることができなかつたので、結局週に二・三回、汽車で約一時間かかるその村へ、医師一人と修女二人とを出張させることを承諾した。それから次第に小病院設置の計画が立てられるに至り、村ではそのための補助として三千元を集めることを約束した。その募金も実際行なわれたが結果は約束の金額の半分を少し上回る程度

で反対し、許可が下りないようにと、あちらこちらの役所に運動したのである。工事は七月末に完了し、その病院は八月三十日に開かれた。これを支持する人々は大いに祝い、ほかの人々は素知らぬ顔をしていたが、漸次反対派は口をつぐみ後にはその方の重立つた人が一人ならず病気になるこの病院へ診療を受けに来たのであつた。



1928年に新築された岩見沢聖堂

千九百二十八年度における、次の最大の企画は小樽教会の移転新築の件であつた。この港市は出船入船の行き交ひ頻りに、急速な発展を示し、この年には人口十六万以上を算えた。教会の横には一病院が立つていたが、市に買い取られ、拡張されることになつた。ところがそれはただ一方、すなわち教会の敷地の方にしか拡張できなかったもので、市はそれを買い取ろうと、教会側に交渉した。結局話がまとまり、市はその土地に対して五万円を支払つたが、教



1928年にできた広島の病院

会はまだ一年一カ月の間そこに留まつていた。建物は値段の点で折合いが付かず樹木もやはりそうであつた。この建物は後に取りこぼすため特に売り払つた。それは全部木造であつたが、ただ小さすぎるのみならず、腐朽した所もあつたのでどうせ早かれ晩かれこわさなければならなかつた。それ故市の申し出は大歓迎であつたのである。

新しい敷地は、市との交渉が始まつた頃からすでに、内々探していたが、とうとうある地所が見つかった。それは旧のよりはすいぶん大きかつたが、ただ地ならしをしなければならぬので、少々不便であつた。(つづく)

会の聖堂で、司教に祝聖叙階された。祝聖者は日本駐在教皇使節マリオ・ジャルデニ大司教、共祝者はアレキシオ・シャボン東京大司教、およびベネチクト会員ボンニフアシオ・ザウエル朝鮮元山司教であつた。

そのほかこの盛儀に出席されたのは、函館司教区管理者ワット師、仙台ドミニコ会修道院長デユマ師、不在のトラピスト男子修道院長代理ドン・ジェラル

午後には札幌市民会館で、公けの新しい叙階祝賀会が、盛り沢山なプログラムで開かれた。

代牧区に昇格し、司教叙階があつたことは、わが布教地にとつて、一大発展を意味するものであつた。この事の意義は叙階式の際の三つの挨拶がよく表わして

たくしたち一同にとつて、大きい喜びの日であります。開下よ、あなたが司教に叙階されたのは、あなたの北海道布教に尽くされた御功勞が認められたため

あります。この布教地域は、まだ一切が発展中であり、絶えざる働きによつて更に発展すべき所であります。わたしはあなたも、今司教となつても、御担当の布教の仕事に、今後も全力を尽くされるであろうことを、信じて疑いません。あなたが今日祝聖によつて蒙られた天主の聖寵は、その際あなたにとつて有効な助けとなるでしょう。それですからわたしもここに集まつているすべての人も、あなたがまだまだ長い間、この布教地北海道において活動せられ、豊かな成果を挙げられんことを望んでやまないであります。一

「閣下、あなたは今朝祝聖被階者たる大司教閣下に、感謝の意を表すため、聖なる典礼の言葉をお用いになりましたが、わたくしもあなたにわたしの希望を表明するため、その同じ言葉を用いて、『アド・ムルトス・アンノス（多年に亘つて）』と申しあげたのであります。ここには日本のさまざまな布教地域から、この祝いに來られた方がおいでになります。わたくしたちはみな、この日本における布教活動でどこにおいても多少とも闘わなければならぬ困難というものを知つております。札幌教区が特に順調な発展を

とげたとすればそれは天主様の御祝福



被階式に参列の郡集

の次には、特にあなたの賢明にしてよく目的を弁えた御働きと、部下宣教師の方々の不撓不屈の活動の結果と申すことができましょう。わたくしはとりわけ一つの点を指摘したいと思ひます。それはこの日本で、いろいろな修道会に属する数カ国の人々が、宣教師として働いていることとあります。この人々はみな、一致して働きつつ、わたくしたちの働きの



マリア院及びその小聖堂

目的である、教会の発展に寄与することを念としております。この人々は過去においてもまず第一に宣教師でありましたし、現在においてもそうであります。なかんずくわたくしが指摘したいのは、隣り合つている函館および札幌両教区が、仲よく睦まじくして來たこととあります。ですからわたくしは北海道御到着の際、あなたを函館で船中にお迎えすることができたのを、

今日でもまだ、特別な喜びとしているのであります。なおわたくしはここで、今はわたくしと遠く離れておられるものの、常に多大の関心をもち、あなたやあなたの方を思い出さなければなりません。それは函館司教アレキサンデル・ペリオーズ閣下であります。あなたをよびよせ、始終あなたに特別な信頼を寄せておられたのは、実にこの方にほかなりません。あなたがその信頼に十分応えられたことは、あなたの教区の発展と、わたくしたちが本日祝うあなたの司教叙階とが示しております。それゆえ、わたくしはもう一度あなたに、声を大にして『多年にわたりて！』と申しあげる次第であります。』

鹿兒島知牧、フランシスコ会員、エジデオ・ロア師のお言葉

「札幌教区の昇格は、わたくしたちの鹿兒島教区に、特別な喜びを喚び起こしました。わたくしたちは、同じフランシスコ会の兄弟として、関心を以て閣下の御働きとその御成功とを仰ぎ見る者であります。更にわが鹿兒島の最初の宣教師たちも、この札幌で宣教師としての訓練を受けましたので、わたくしたちはわが教区を、札幌の

出先と称してもいさほどの理由を有していると思ひます。お働きになるに當つて、よく目的を弁えておられることは、今朝も殊更に、行事の裡に残りなく現われました。すなわち聖歌や祭式はわたくしたちの眼の前に、さながら戦艦が、落ちつき払つて、目ざす所を

一三、司教叙階後の數年間 (一九二九年—一九三一年)

北海道は殖民地である。毎年人口過剰の南から、何千という人が北海道に新天地を開こうと、やつて來る。未開拓のひろびろとしたこの地域の至る所に、新しい部落が出来、原始林が切り開かれてゆく。ここでは數年たつ内に村々が、いな町々さえも、出来るのが見られるのである。

わが教区もこの発展を考へるのなかに入られておかなければならない。新しい教会を設けようとする、いつもまず、その場所が確かに將來有望な所かどうかを考慮し、待つてみなければならぬのである。わが教会のある場所がほとんどみな、はじめ新設の際は一向問題にならぬような所であつたのに、後には大きい町になつたことも、かようにして説明がつく。新たに居を定めた所が、いわば一夜を経てまた消失したことも度々あつた。左に記すことはその例として役立つであろう。

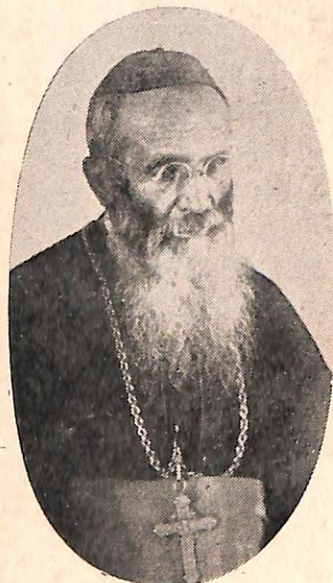
あやまたず、進んでゆくように、力と安定とを以て展開されたのであります。それでわたくしたちは、フランシスコ会員として、わが兄弟たちに心の底からお祝いを申しあげ、今後も閣下の御企画に天主の御祝福と幸とのあらんことを希望したいと思ひます。」

千九百二十九年、日本政府はカトリック家族七十世帯を、九州から北海道東部に移住させた。その住みついたあたりはほとんど全部原始林であつた。最初は非常に困難な仕事である。木を焼き払つた地上に、まずできるものは、黍や燕麥や馬鈴薯にほかならない。住みついた人が五年辛抱すれば、政府の割り当ててくれた土地が自分の所有になる。しかしそれだけの年月がたたぬ内にそこを引きあげると、その土地はまた政府の手に歸るのである。右のカトリック家族七十世帯もかようにして、チャシコツという所に居を定めた。かれらは自ら見すばらしい小屋を建て、そればかりか部落の中央に聖堂をさえ設けた。その聖堂には、月に一回出張してくる神父用の一室も付いて

いた。かれらは一人残らず昔の殉教者たちの子孫であつたが、何分南のはてから來た人々なので、北海道の厳しい氣候に馴れていなかつた。それでまだ五年たつ

ぬ内に、一世帯また一世帯と、漸次そこを去つてゆき、五年たつてから残つていたのは、わずか一世帯に過ぎなかつた。かれらの小屋は腐朽し、聖堂の板は附近に住んでいる他の人々が、有難い貰ひ物として持つて行つてしまつたのである。千九百二十九年七月二十三日は、その日札幌代牧区の広い地域から、カラフトを切り離す途が開けた点で、わが教区にとつて意義があつた。アグネルス師は、賜暇で歸つていたドイツから、九カ月後の後再び渡來し、ポーランド人のフランシスコ会員、パウリスノス師を連れて來た。師はこの神父にハルビンで会い、多數のポーランド人流刑者のいるカラフトの教会に関心を持たせたのである。パウリスノス神父は、司教と相談後、八月四日またハルビンに歸つたが、翌日早くも聖庁任命前シベリア地区管理者、フランシスコ会員ジェラルド・ピオトロウスキー

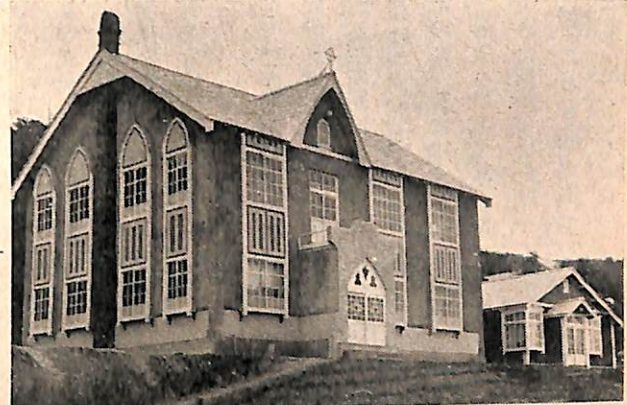
そして師の管区が承諾を決して拒まぬであらうとの堅い見通しをもつて、九月八日日本国に出発した。實際その承諾は、待つこと久しからずして与えられたのである。札幌諸教会の処女たちの会は、教週間奔走して準備をした後、藤高等女学校の戸内運動場で、この年九月二十八日、二十九日両日にわたり、一大バザーを開き多大の成果を収めた。千九百二十九年には、新信者二百二十八名が増加し、求道者三百四名が受洗の準備をした。司祭常駐の教会は十一、出張所は六つあり、そのほかに教会のない所に大小さまざまなグループを成して暮らしている信者が合わせて百十一名あつた。アレクサンドル・ペリオーズ司教がフランスで永眠されたのは、千九百二十九年十二月二十七日のことであつた。かくて千九百三十年一月十四日、この偉大な司教の御靈魂の安息のために、札幌で司教高座死者ミサが行なわれた。



晩年のペリオーズ司教

師がカラフト南部をポーランドの汚れたき御孕りのフランシスコ管区で引き継ぐための交渉をしに、札幌に到着した。千九百三十年には、新しい教会を四つ開設する事ができた、カラフト西岸にある真岡の教会は、七月二十日に祝別された。その初代主任神父はラヂストラウス

・フレッシェン師であつた。札幌市の山鼻地区にも、新しい教会ができて、これは八月三日祝別され、ウバルト・シニツケ師がその最初の主任司祭に任ぜられた。八月一日には、苫小牧出張所が教会に昇格され、学業を終えて五月二十一日帰国したアンドレア・神原師が、この新教会の担当を命ぜられた。北海道東部では、十月十七日帯広教会が開かれ、ゲルハルド・フリーベル師がこれを担当した。



樺太真岡の教会

新教会の設立は、いつも容易であるとは限らなかつた。それには政庁から許可をもらう必要があつたが、当局官吏の態度が好意的であるかいなかによつて、その許可を受けるのに難易を生ずるのであつた。それに、教会を開設しようとするその土地に、少くとも百名の信者のいなければならぬことが、法律で要求されていた。この法律が厳重に施行されたら事実上どこにも新設することができなかつたであろう。何となれば、宣教師が一人も駐在していないような所に、どうし



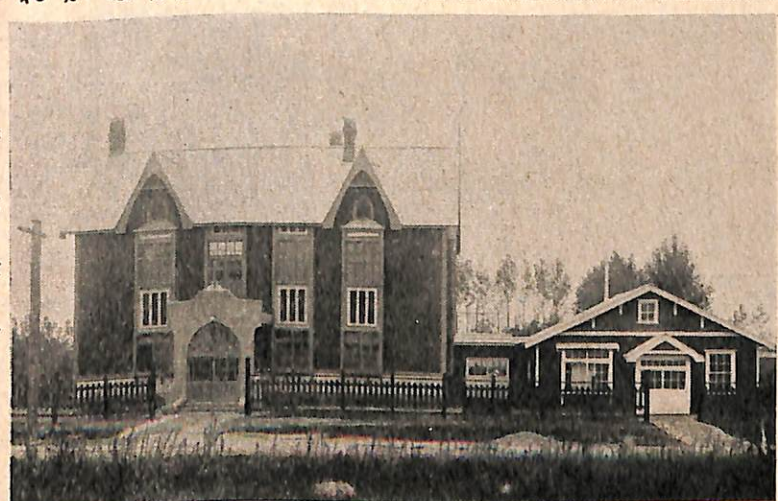
山鼻司祭館と信者一同

て百人もの信者ができる筈があるか。幸いなことには、既成教会の担当地域はしばしば非常に広く、そのなかに多数の信者が散在して住んでい

た。それで隣りにある教会の地域の一部を切り離して新しい教会を設ける土地を中心とする新地区を作り、こうしたいがいは法律の要求している信徒数を得たのである。好意を有せぬ官吏が最も好んで用いる妨害の仕方の一つは、よく新しい地区に属すべき信者の姓名住所を書いた名簿を要求することであつた。しかしこれは法律の要求する所ではなかつたので、われわれはいつもそれ

を設立するに当たつて、いろいろ困難を自ら体験しなければならなかつた。われわれの申請書を扱つ

を拒否した。それは信者の姓名を知らせると、その人たちが迷惑するかも知れないので、そうして少しでも困らせたくなかつたからである。けれどもかように拒否すると、政庁の認可の遅れることがたびたびあつた。そして係りの役人がこの認可を六ヶ月以上延ばすことがあると、願書が無効になるので、改めてまた申請しなければならぬのであつた。筆者も帯広に教会



帯広教会

た役人は、その書類をどこかへ紛失してしまひ、申請書など提出しなかつたと言ひ張つた。結局北海道庁の、われわれに好意を有する上司の手でその書類を「発見」することができ、間に立つた役人は「紛失」に対し、辻褄の合った理由を持ち出すことができなかったもので、憤りながらもその下に捺印したのであつた。千九百三十年二月三日には、ロベルト・クリツチ神父に、オプタトウス・ブル、およびシルヴィウス・シニタインメツツ両修士という新しい宣教師が札幌に着いた。それから数週間後には、多年

札幌の修道院で料理係を勤めていたチト修士が、ドイツへ帰つた。札幌にある修道院に隣接する教会は、狭すぎるようになつたので、三月中に拡張に着手した。三年前から聖堂の外で、但しただ教会の構内においてではあつたが、行われて来た聖体行列の本年度には、広島代牧区のは、広島代牧区のエズス会員ロスと、名古屋知司と、名古屋知牧ライネルス師とが参加された。(つづく)

フランシスコ会

北海道布教小史 (九)

——一九〇七年から一九二九年に至る分は
ヴェンセスラウス・キノルド司教の報告による——
ゲルハルド・フリーベル

キノルド司教が定期ローマ訪問のために旅立たれたのは、千九百三十年九月十日のことであつた。全く平服で、「教師」としての旅券を持つて、シベリア經由で旅行されたのである。ドイツに到着されたのは、十月初めであつた。緑のネクタイをして「教師の旅券」を持つておられたにもかかわらず、シベリア鉄道ではソ連の役人が、「神父さま」と言つて話し

かけたさうである。九月二十三日には、カラフトを担当することになつた宣教師たちが、札幌に来着した。上に述べたジェラルド・ピオトロウスキー師、ハルピンのポーランド人大神学校前校長であつたパウリヌス・ウイリチンスキー師、ペトロ・ウイルク

師、およびザカリア修士がそれである。これに同行して、シレジア管区出身のカピストラン・クイオテク師も来た。千九百三十一年三月八日、九日兩日には、東京でカトリック出版社の総会議が開かれ、わが代牧区からはウゴリン・ノル師とチト・チーグレル師とが代表とし

て出席した。この会議で、日本全国を対象とする週刊の宗教新聞発行の件が決定されたが、これは将来漸次カトリック日刊新聞に仕上げるつもりなのである。従来発行されてきたいくつかの雑誌や月刊新聞は、この新企画を遂行するため、廃刊した。それによつて新しい週刊新聞のために、多数の購読者を確保しようというのである。わが週刊紙「光明」もこの理由から、同年六月末を以て、発行を停止した。但し「光明社」の名の下に、宗教書の刊行は継続したのである。これまで「光明」の編集者であつたウゴリン・ノル師は、その後東京大司教の要請に応じて、新しい「カトリック新聞」発行に協力するため、上京した。千九百三十一年五月二十八日には、キノルド司教が、ローマおよびドイツ訪問から帰任され、しかも新しい宣教師、ルドルフ・ケルネル、アウグスチノ・テイシュニンゲル兩師を連れて来られた。千九百三十一年八月十九日には、わが修道院で料理係を勤めていたポーランド



人ザカリア修士が、ウラヂオストックの教皇使節の命令で、同地の司教に会いに出發した。ロシア語が流暢に話せるザカリア修士は、司教の甚だ悲惨な境遇にあるのを見た。司教は引込んだ家に住み、その二間を使つておられたが、莫大な税が課せられていたので、ほとんど命をたなぐことさえおできにならぬくらいであつた。ザカリア修士は司教のためにポーランド人のある信者の援助を仰いだ。そして司教に若干の金を残すことができた。その家を去る時には、ソ連の一警官

札幌に男子の中等ならびに高等学校を設立することは、数年前からの愚案であつた。それでキノルド司教は、その企画のために、ブライエルハイデの教職修道会の人々を招かれた。その第一陣として、独人ウイタリス・クレルクス、米人トマス・ジョーンズ、および独人オドリクス・シエンチルボルグ三修士が到着したのは千九百三十一年十月十二日のことであつた。この修士たちはまずフランシスコ修道院に留まり、日本語の学修をして、以て将来の活動に備へたのであつた。

晩秋に完成した日本二十六聖殉教者の映画は、十月二十九日から十一月四日まで、札幌で一封切された。長崎出身の平山氏がその全財産を抛うつて、この大映画の製作に出資したのである。この映画が上映された所はどこでも、カトリック教会が盛んに活動して協力した。札幌では教会が約五六千枚の入場券を売つたがその売

上げの一部は教会のものになったのである。上映の際には、約一万五千の観客があり、カトリック教会の聖歌隊が合同演奏の音楽を担当し、一宣教師が同映画紹介の説明を行なった。

御降誕祭の折には、博愛活動が盛んに展開された。ヒラリオ・シヌメルツ師は部下の信徒と共に、札幌市内数カ所、約七百名の貧しい人たちに、食を与えた。ルカ・ベルニグ師は受持の札幌北十一条教会の婦人たち少女たちの手で、

一四、困難増加にもかかわらず発展 (一九三一年—一九三五年)

千九百三十一年九月満洲里に戦争勃発するや、日本軍部には著しい動きが見られ、それは次第に国民の間にも拡がり、それからの数年間、少なからず布教の働きを妨げた。盲目的な忠義、人を柔弱にする安楽を軽んじ、いかなる危険に臨んでも怯まず、祖国を何物にもまさつて愛し、天皇に絶対服従するなどの昔の武士の理想に帰つて、大和魂を新たに振興強化することが求められたのである。

この昔の精神の復興、および外国影響の駆逐を使命とする、いろいろな会が結成された。そういう会には愛国秘密結社も少なくなくあつたが、そのなかで殊に黒龍会というのは非常に勢力があつて、全国に暴力を揮い始めた。同会に「国威」をそこなつたと見られ、暗殺された人もあつた。

募金を行ない、集まつた金を親しく家庭訪問して分配した。ダマソ・ゴラ師とアレキシオ・ヒツプ師とは、前者は旭川で、後者は釧路で、部下信徒の手で金品を集め、後、自分の貧困を恥じている人々に分配するよう、市役所に委託した。ヒラリオ・シヌメルツ師は貧者や病者のために尽くした博愛上の功勞を認められ、畏きあたりより金一封を賜つたことがある。(前頁の写真参照)

あつたくらいである。神道の復興は常にこの「日本精神」の復興と手を携へ、キリスト教を何か日本の本質と異つたものとして、これに反対の態度を深めたのは、極めて当然の成行であつた。外人宣教師を秘かに監視する目も、日に日に厳しくなつた。しかしその活動は、最初直接妨げられはしなかつたのである。

千九百三十二年は、わが教区にとつての一大不幸を以て始まつた。と言うのは二月二日午前二時、聖ゲオルグのフランシスコ修女会経営の藤高等女学校が出火焼失したことである。しかし火災保険が付けてあつたので、その損害を埋め合わせることができた上に、生徒の親たちからたくさん寄附があつたため、新校舎は直ちに起工、前のよりも一層立派に出来あがつたのであつた。

ちが北海布教地区のその外部的な拡張は、経済上にも困難があつたにもかかわらず、阻止されなかつた。それで北海道の西岸にある町留前にも一家屋を借り受け、将来発展して独立の教会となるまで、まず旭川教会の出張所とした。同様に札幌近傍の江別でも、ある地所



とそこにある建物とを手に入れ、岩見沢教会の出張所を設けた。ここではその時から毎日曜ミサ聖祭が行なわれたのである。

北海道の北東部にある今日の北見市、当時の野付牛町は、急速な発展を遂げた町であるが、そこにも翌年教会を設立する見込で、一地所を手に入れた。カラフトは札幌代牧区から分離されて、独立の布教地区となり、ポーランドのフランシスコ会員がこれを担当したので、従来同地で働いていたコワルツ、フレツシユ、カピストラン各神父は、北海道へ引きあげた。

正式に日本領カラフトが札幌代牧区から分離されて、知牧区に至らざる独立布教区と発表されたのは、千九百三十二年七月十四日のことであつた。けれども札幌司教会は、最初の内、依然その教区長であつた。カラフトの教会は分離当飯時、本教会三つ、出張所三つに、信徒四百三十八名を擁していた。別同地で働いていたのは、フランシスコ会員六名であつた。

これまでフランシスコ修道院に滞在していた、ブライエルハイデの教職修道者たちは、男子中等学校のそばの、自分たちの修道院に引き移ることができた。それは聖ヨゼフの御保護の下におかれ、ヨゼフ院と呼ばれた。千九百三十二年七月十六日には、新しい宣教師が到着した。それはグラチアン・ドレスレル師、ヴィルシル・ナーゲル師



札幌上演聖エリザベト劇の一場面

最初の邦人フランシスコ会員ペトロ・バプチスタ武官師三名であつた。

この年には、札幌代牧区の諸所方々で、公然布教大会を開いたが、来聴者の出足はいつも非常によかつた。それには常にその場所切つての大きい集会所を選んだのである。

その頃製作され、北海道の至る所で大成功を収めた、日活映画日本二十六聖人も、信仰の宣伝に絶好の機会を提供した。すでにその上映の何日も前から、信者たちは盛んな布教活動を始め、何千枚とい



「天草四郎」劇中の一人物

う入場券を売りさばいたり、説明書を配布したりした。そしてその上映に興を添えるために、聖歌の合唱や、音楽の演奏や、適当な講演などが行なわれた。なおこの映画の所有者は、いつも好意を以て売上げ高の一部を、その地の教会に分けて

くれたので、その際いくらか教会にも利益があつたのである。

千九百三十二年の春には、札幌北一条教会の青年会と処女会が北十一条教会の青年会の協力の下に、オイゼビオ・ブライトン師作の戯曲「天草四郎」を札幌丸井記念館で連続三回、秋には依頼により市民会館で四度目に上演したが、これは赫々たる成功を収めた。市民会館の管

理者が、自分はこの会館で、すでにいくつも劇を見たことがあるが、しまいまで見通したのはまだ一つもなかつた、大団円まで足を引き留められたのは、これが始めてだと言つていたほどである。オイゼビオ師作の戯曲が上演されたのは、これが最初ではなかつた。すでに大正十二年、師は空園教会において、日曜

学校上演用の「キリストに従いて」という劇を發行していたし、二年後にはよく知られている「イニス・フェールの鐘」というクリスマスマス劇を東京の公教青年会から出しており、これは今までに四度も版を重ねているのである。昭和四年に刊行した五幕物の聖女アグネス劇「ローマの

花」もいくたびか重版された。また昭和二十六年には「クリスマス聖劇集」という題名で、御降誕に関する戯曲を集めたものを發行したが、これも間もなく再版しなければならなくなつた。これらの劇は日本全国でいくたび上演されたかわからないが、版を重ねた数によつて多少察せられるであろう。



横浜紅蘭女学校上演の「ローマの花」の一場面

たびも上演させた。なお昭和四年に光明社から發行され

た、ゲルハルド・フーベル師作「聖エリザベト劇」も特筆に値し、昭和四年以来、種々の学校やカトリックのさまざまな会でたびたび上演された。

ダヴィド・ミバク師も、昭和六年にクリスマス劇の二短篇を書き、後に上梓した。それでその頃には上演用戯曲がたくさんあつたのである。

クリスマスに馬槽を飾る運動も、日本に確固たる地歩を得た。札幌の山皇教会では十一月二日から同八日まで、内容豊富な馬槽展示会が開催され、晩にはワバルト師が布教の講演を行なつた。

一方「光明社」も多忙を極めた。大小さまざまな書物を次々と新刊したことも特筆に値するが、ただ札幌だけでも、約二万五千部のパンフレットが光明社から頒布されたのであつた。

特に有意義な事件の一つは、わが代牧区の青年たちの第一回大会が、十月十七日札幌で開かれたことであつた。これはこの大会の開催を甚だ熱心にすゝめ、かつ実行したアウグスチノ・テイシネンゲル師の功績である。活潑な発言があつたほかに、日本人の大きい愛好しているスポーツも予定に入れられ、野球の争覇戦が行なわれて、その結果旭川青年会が苦戦の末辛勝し、ある有福な信者寄贈の立派な優勝杯を獲得して持ち帰ることができた。

かわらず、教会は大体において無事に働きを続けることができた。尤も時代の不安の影響をある程度まで布教活動も受けはしたけれども。

当時の日本の政治情勢を一瞥すれば、議会政治でなく、独裁政治を目ざして努力していたグループが、速かに味方を得たこと

もわかるであろう。ドイツの国家社会主義と、イタリアのファシズムとが国内の一部分に少なからぬ影響を及ぼしていた

殊にその数年前から日本を牛耳っていた急進的な陸軍軍人の一グループは、その根本の性質において極端な国家主義で、アジアにおける日本制覇の大胆な計画実現のために、あらゆる反対を暴力で除こうとしていた。千九百三十二年五月十五日には、いわゆる五・一・五事件が起こり、一団の過激な青年将校の手で犬養総理大臣が殺され、政府のいくつかの官庁には



1933年に建てられた稚内教会の内部。大和魂の復興および稚内には、前からキリスト教が日本精神と合わぬ、水のなかの油のようなものとして排斥されていた。この精神のますます激化する宣伝は、キリスト教の立場

は日に日に困難となつて来たのである。それにもかかわらず、千九百三十三年における教会の外部的發展は、まだ停止しなかつた。北海道の最北端の港町稚内には、千九百三十一年一小家屋が建てられ、出張所として用いられていたが、

爆弾が仕かけられた。この不慮の事件は一個の政治的行動以上のもので、国を自己の支配下に置こうとする極端な国家主義的分子の、最初の試みであつたのである。その前数年間には軍部の指導の下に多数の会が結成されたが、それらの努力は日本国民を打つて一丸とし、「現人神」天皇の統治の下に、党派のない国家統一を成就する教に あつた。大和魂の復興および稚内には、前からキリスト教が日本精神と合わぬ、水のなかの油のようなものとして排斥されていた。この精神のますます激化する宣伝は、キリスト教の立場

千九百三十三年には本教会ができ、その町及び周辺地区に布教のため、一司祭が常駐するようになった。すなわちダヴィド・ミバク師が七月十六日同教会を担当するに至つたのである。また北海道東部の野付牛町（今の北見市）にも聖堂ができ、七月十四日ダマソ・ゴラ師がそこへ赴任した。なお聖ゲオルグのフランシスコ会の修女たちは小樽に一修院と附属幼稚園を開くことができたが、この幼稚園は豊かな祝福を世に送つている。

北海道布教小史 (一〇)

——一九〇七年から一九二九年に至る分は
ヴェンセスラウス・キノルド司教の報告による——
ゲルハルド・フーベル

しかし学校設立が外国人の計画であるとかかるやいなや、強い反対が認められた。政府に宛てた申請書には、長い間返事がなく、許可の見込みはいよいよ少なくなるばかりであつた。ついに政府は中学校の設立を却下したが、商業学校認可の申請書を呈出するようわれわれに勧告した。商業学校は中学校よりも程度が低かつたのである。しかし校舎がすでにできていたので、一切を水泡に帰するよりはと、そうすることに決定せざるを得なかつた。この商業学校は、後間もなく認可された。そしてその初代校長に就任したのは、フランシスコ会員ベトロ・パブチスタ武宮雷吾師であつた。この学校についての詳しいことは、また後に述べるとしよう。

一方、わが高等女学校たる藤学園は、喜ばしくも以前同様、非常に評判がよかつた。北海道にいる人で、この学校を知らない者はほとんど一人もなく、毎年遠くからも少女たちが、そのあまり容易でない入学試験を受けに来る。千九百三十

三年度の新学年には、入学申込者が五百二十一名もあつたが、これは従来の同校入学申込者の最高で、札幌にあるすべての女学校の中でもやはり最高であつた。この学校からどれほど豊かな祝福が世に送られたかは、千九百二十五年の創立以来千九百三十三年の三月までに、早くも生徒八十二名、教職員六名、生徒の家人四十三名が受洗したことからもわかるであろう。



小樽幼稚園

つた。この人はもと仏教の僧侶であつたのである。それから帯広教会主任ゲルハルド・フーベル師が「青年と宗教」について、また信者の一青年が「カトリック教会と、現下の時事問題に対するその態度」について、更に信者の一医師が「カトリック教会の本質」について、それぞれ語つた。講演に興を添えるためには、歌や音楽の小曲を演じたが、これに協力してくれたのは、チェロを奏した信者の

所と、その前にある戶外運動場とを使用させてくれた。この集会所は明け放して舞台とし、運動場は観覧席として用いたのである。歌唱者および音楽演奏者たちは、札幌の教会から招いた。観客は約六百人、ほとんど全部教外者ばかりの小さな村としては、大成功であった。

ゼーノ師はそれから間もなく、ダマソ師と交代するため、旭川へ転任になると、その新任地でも右の御受難の活人画上演に力を尽くし、市民会館に集まつた約千五百人の観衆の前でそれを行なつた。この催しにつき、旭川の新聞は「無比の慈善オラトリオ」と題し

「旭川カトリック青年会は、当地の養老院および孤児院、ならびに札幌のカトリック診療所のため、慈善を目的として、十月十七日午後六時から、キリスト受難千九百周年を記念すべく、オラトリオを上演した。ダマソ師が指揮するオーケストラは北海道で最も有能な人々の中に数えるべき九名の奏者から成り、混声合唱団は三十名の青年処女から構成されていた……。活人画も、オーケストラの伴奏する合唱も当時の有様（キ



リストの御受難)をマザマザと眼前に髣髴させた。満員の会場でのこの敵かなオラトリオ上演は、現代で類少ない

感動を与えたのである。「云云。宣教師たちはまた、受持信徒に実践的隣人愛を仕込むことを怠らなかつた。

札幌で千九百三十三年十二月二十五日、午後二時から貧しい子ども六十九名に物を贈つたのもそうである。十二月二十六、二十七、二十八の三日には午後四時から、貧しい人三十名ずつに食を供し、また貧しい病者五十名に贈物を分け与えた。更に御降誕祭には、貧困家庭二十三世帯に衣料を贈つた。なお帯広市でも第三会、青年会、処女会の人人がクリスマスに貧しい人人に食を供し、衣料を贈つたのである。

キリスト教を拡めるには、邦人司祭を養成することが極めて重要であるので、わが代牧区では教会のこの念願も決してなおざりにはしなかつた。千九百三十三年までに邦人の教区付司祭二名、フランススコ会の修道司祭一名を養成した。千九百三十三年には、わが代牧区からローマにあるプロバガンダ大学に遊学の司祭志願者一名、東京の大神学校に在学の神学生が十一名あり、それからまだ札幌の小神学校に残つている少年が六名あつた。札幌では千九百三十三年八月二十四日、神学生三名が剃髮式を受け、一名は最初の下級聖品二段を授かり、今一名は十一月十一日に副助祭の、次いで十二月二十三日に助祭の聖品を授与された。なおフランススコ会に属する邦人聖職者三名がフルダに遊学しており、内二名は翌年の司祭の品級を受けたのである。

念にも吹雪であつた。それでも観覧者は五百人を越えた。三日目はやつと吹雪が収まつて日の光がさしたので来観者の数も一躍千二百人にのぼつた。

ペトロ・パプチスタ武富雷吾師が、文部省から新設男子商業学校の校長として確認されたのは、千九百三十四年三月一日のことであつた。この学校は毎年百五十名の生徒を入学させるのであるが、申込者が三百人ばかりあつた。開校式は四月一日。この学校は多年教会の大きい心配の種になつた。政府は女子の教育はあまり気にかげなかつたのに、男子の学校となると、そのあらゆる行動を極めて厳重に監視するのであつた。と言うのは、それらの学校を、愛国ならびに軍人精神涵養の場所とするつもりであつたからにほかならない。で、男子の学校ではどこでも、校長のそばに一将校が付けれられ、これが思いのままに教育に容喙する権利を持つていたのである。キリスト教の影響などは悉く、これらの配属将校が除去することができた。それでキリスト教の学校における困難は、たいていこの将校たちから生じたのであつた。校長や校主(この場合は教会)は全く無力であつた。なんとすれば、配属将校が学校を引きあげると、それはその学校の生徒たちに、もう將校になつたり、上の学校に入つたりする資格が与えられないということの意味するからであつた。教外者教職員は

大部分、これら「国家精神の公奉者」に公然または内内で従つていた。ちよつとしたことで、学校を教会から全く取りあげられるような事態を惹起しないためには大なる忍耐と分別とが必要であつた。いろいろ障壁が増加したため、ついに千九百三十五年ブライエルハイデの教職修道者たちが活動を断念してドイツに帰つてからは、全教外者の教職員に依存しなげなばならぬ。たつたので、なおさらむずかしくなつた。すでに旨く行つていける学校をいくつか持ち、会員中に多数の日本人を擁しているマリア会の教職修道者たちを、この学校のために招くことができたのは、ようやくそれから二三年たつて、第二次世界大戦すでにたけなわの頃のことであつた。そのマリア会の一邦人修士が校長と定められると、教外者の教職員たちが反対し

て騒動を起こした。生徒たちやその親たちは扇動されて、同盟休校をやつた。それは全く学校が存続できるかできないかという関が原であつた。しかし教会側は一部法外な要求に対して、断固たる態度を示した。学校は極めて徐々に正常な状態に復した。最も大きい犠牲を払われたのは、もちろんわが代牧区の聖庁

そこで第二次世界大戦終戦直後、師に対する憎悪を忘れることのできない人人の手で、暗殺されたのであつた。この事件は、ここではたださういうことがあつただけ、記しておくに止め、後に再び説くこととしよう。この悲しい出来事を存分に書くにはまだ早すぎるからこれは後日に譲らなければならない。わが男子の学校光星学園についても事情が激変したのは、ようやく日本が戦いに敗れ、かくて宗教があらゆる障壁を脱却してからのことであつた。いよいよ宗教を自由に教えることができるようになり、マリア会の教職修道者たちの活動も豊かな成果を挙げるようになった。もとの計画を実現して商業学校を中高等学校に改めたのも、第二次世界大戦終了直後のことであつた。しかし、ここで千九百三十四年の情勢を顧みよう。日本と中国との衝突は、教会の外部的発展にも、次第に影響を及ぼして来た。それにドイツの外国為替法が実施せられた結果、その地からの援助が悉く絶えてしまつた。宣教師たちの働きは、ますます外から妨害を受けるばかりなので、それだけ信徒の信仰生活の内面的深化に向けた。それで千九百三十四年は、特に内面化の年といふことができよう。一般信者の黙想会や三日間の黙想が、ほとんどすべての教会で開かれた。信者に聖



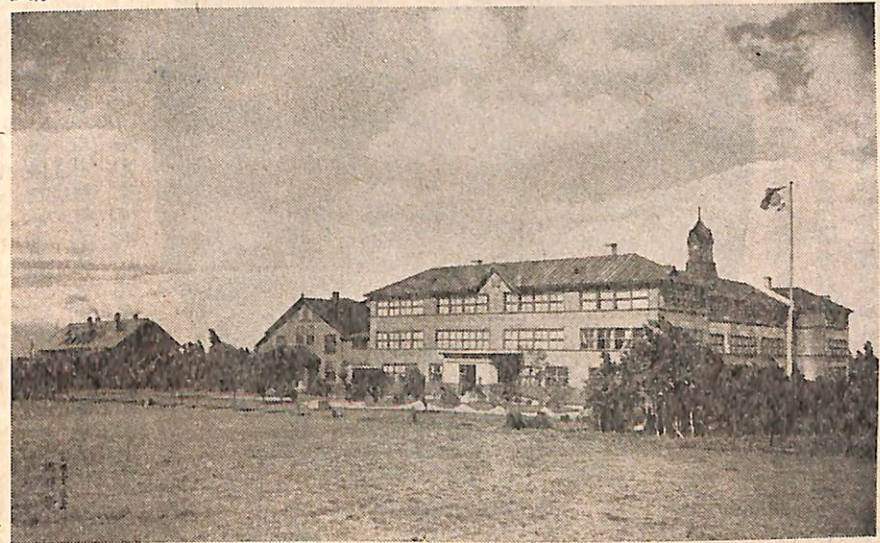
ルカ神父 (前頁参照)

年の贖宥を受ける準備をさせることも、その目的の一つであった。札幌市の三教会には、十月四日から七日まで、時を同じくして黙想会があつた。神父たちは、説教や家庭訪問をしたり、勧誘状を書いたりして、黙想会の準備をした。それは殊にあまり熱心でない信者や、務を守らない信者を掴むことが目あてであつた。この黙想会には、少数の人を除き、信者がすべて参加した。聖体拝領は実に喜ばしいほどであつた。この黙想会の説教には宣教師たちが互に代り合つて当つた。それでいつもなじみでない神父が使われたわけである。この黙想会の好い結果はいろいろあつたが、毎日ミサに来る人がいちじるしく殖えたことも、その一つであつた。

力を合わせるとどういふことができるか、それを示したのは千九百三十四年十月二十二日、札幌市民会館における公開のクリスマス大会であつた。主催は札幌の三教会。六十人の歌手から成る混声合唱団がオーケストラの伴奏で、一連のクリスマススの歌を歌い、それに続いて大人気を博した子どもたちの日本舞踊数番と、クリスマススの劇一つがあつた。入場者は約千四百人。純益は博愛事業に用いることとした。次の日には小樽市で二千人の観衆を前に、同じプログラムで上演した。ここでも純益は貧しい人々のために使用することとした。この上演は二つながら大成功で、カトリック教会の面目を飾るものであつた。

ほかの諸教会でも安閑としてはいかなかった。例えば岩見沢教会の婦人たちが少女ら、衣服や下着類を集め、待降節中晩にうちでそれを修繕し、かようにして御降誕の当日には、貧困家庭三十世帯にこれを贈つて喜ばすことができたのであつた。

前年旭川で上演された御受難のオラトリオが大成功を収めたので、いつか御降誕のオラトリオも同様にして見せようという計画が熟した。御受難劇の作者であり舞台監督であつたゼーノ・フレック師は少なからぬ困難と心配との附随しているその準備に勇気を揮つて当つた。台本としてハ、未信者にもわかりやすいメレル作御降誕のオラトリオを用い、九月から早くも混声合唱の練習を始めた。オーケストラには未信者の上手な演奏者の一団も頼んだ。その多くは庁立師範学校の学生であつた。旭川の冬は非常に寒いので大きい市民会館が使えないので、よんどころなくそれより場内を温めることの容易な、一まわり小さい会場を



光 星 学 園

ここで千九百三十四年七月一日現在におけるわが代牧区の状況を概観すれば、次の通りである。司教一名、司祭は外人フランシスコ会員二十三名、邦人フランシスコ会員三名、邦人数区付司祭二名、

借り、十二月十五日に上演した。当日はひどい吹雪であつたにもかかわらず、立錐の余地もない満員の盛況であつた。それでこの上演も大成功であつたと言わなければならぬ。

平修士は外人七名、邦人三名、プライエルハイデのフランシスコ教職修道会修士は六名、マリヤの宣教師フランシスコ修道女会修女十九名（外人十八名、邦人一名）、準会員十五名（外人一名、邦人四名）、聖ゲオルグのフランシスコ会修女はドイツ人十七名、邦人四名、邦人修練者二名、同志願者四名。

また司祭駐在の教会は十四を算え、そのほか定期的なミサ聖祭を執行する出張所が十カ所あり、更に少なくとも年に二回は、百三十二カ所に散在して住んでいる信者を巡回訪問した。

札幌及び北広島の両病院で、診療日数延べ二万四千二百二十二日に扱つた患者は延べ人員一千八十名。カトリック無料診療所で、診察施設した患者数は六百七十九名。この年開校の男子商業学校生徒数は百五十九名。高等女学校生徒数は八百五十九名。

十カ所の日曜学校で、毎週天主やキリストのことを聞いた未信者の子どもたちが七百七十名。四カ所の幼稚園の園生幼児百三十四名。二カ所の育児ホームの養護児童六十名。

一つの印刷所で定期的に印刷する雑誌二種。更に光明社では十五種の書籍を新刊し、十種の重版書を出した。受洗者数は五百九十七名。（つづく）

フランシスコ会

北海道布教小史（二）

一九〇七年から一九一九年に至る分は

ヴェンセスラウス・キノルド司教の報告による
ゲルハルト・フリーベル

信者のために行なつた説教一千四百百三回。なお、未信者に教理を教えた延べ回数は一万五千四百五回を下らない。外部的な発展については、資力不足のせい、計画中に予定していたことをすべては実現できなかった。それでも前に述べた稚内教会設立、商業学校開校のほかに、札幌の育児ホーム及び病院の拡張が

一五、邦人聖職者養成のための司教の御配慮（一九三五年）

大きい喜びの日であつた。

ここらあたりで、どれほど司教が邦人司祭の養成に配慮せられたかを、一括して記しておくべきであらう。キノルド司教は最初から司祭職に適當な青少年を発見して、その崇高な目的に導くよう努められた。すでに前に述べた通り、小神学生最初の一人は千九百二十二年函館郊外亀田教会に置かれ、最初の校長であるミバク・グヴィド師から教えを受けた。しかし三年後には、北海道のフランシスコ会担当布教地が独立し、函館地区を除く

ほかには札幌知牧区となつたので、亀田の建物フランシスコの神父たちに返さなければならなくなつた。それで神学生たちは千九百二十六年まで小神学校の置かれた



ドイツのフルダ、フランシスコ修道院付聖堂における大久保司祭初ミサの一場面

札幌北十五条に移つた。しかしこの年に北十一条教会の傍に、大きい神学校が新築開校され、それからの二十年間といふもの、司祭の召命を受けた邦人の、ホ

ームとなり養成所となつたのである。校長は千九百十八年から千九百二十九年まで、フランシスコ会員ヴォルフガング・ラング師であつたが、後最初の邦人数区付司教ヨゼフ大久保師が校長に就任した。小神学校の問題は、こうして解決した。しかし大神学校はいかにすべきか。わが神学生たちはどこで高等の学業課程を修むべきか。当時はまだ日本全国のための大神学校が一つもなかつたのである。どうしてもヨーロッパにゆくより仕方がない。それでわが最古の神学生ヨゼフ大久保は千九百二十一年はるばるローマのプロ

ある。その後輩アンドレア榊原有もドイツに遊学し、千九百二十九年司祭に叙品されて帰国した。わが布教区二番目の教区付司祭である。次の神学生ガブリエル武宮雷吾は、修道生活を選んだ。すなわち千九百二十五年ドイツでフランシスコ会に入り、日本最初の殉教者たちを記念すべく、ペトロ・パブスタという修道名を貰ったのである。かくて学業を終えて後千九百三十一年司祭に叙品されて帰国した師は、最初のフランシスコ会邦人修道司祭であった。アントニオ河村謙とベナルチン浅井晴雄も同じ道をたどり千九百二十七年から哲学の講義の始まつた札幌で、哲学の学習を終えると千九百二十九年ドイツに赴き、そこでフランシスコ会に入り、千九百三十四年、司祭に叙品されたのであつた。こうしてわが教区はそれまでにすでに邦人司祭五名を得ていたのであるが、しかしこの人々はいずれにもみな、高等の学業課程をドイツで修めるか、終えるかしたのである。

その内に千九百三十二年、聖座によつて東京に大神学校が設立された。神学生ヨゼフ長坂親秀は、札幌小神学校で始めた学業を、この大神学校で終えた。司祭受品の日が近づいて来た。しかし自分の教区の司祭の手から、親しく品級を授かるうと、札幌に帰り、そこで多数の人士参列の下に司祭の聖品を授けられたのは千九百三十五年、三月十五日のことであつた。始めてご自分の代牧区のために、一邦人司祭を手ずから聖列し、主の葡萄酒におけるその新協力者に、宣教師たり使徒たる祝福を与えることが出来になつた時の、キノルド司教のお喜びは、どれほど大きかつたことであらう！なんとなれば、邦人司祭の養成こそは、特にそのお心にかかけられたことであると、言つても決して謬りではないからである。

なおその後数年間に、札幌でキノルド司教が授品された邦人司祭七人の、叙品の年と姓名とを列記すれば左の通りである。

- 一九三七年 ヨハネ福音史家林忠実師、ヨハネ・バプチスタ中川宏師
- 一九三八年 フランシスコ・ザヴェリオ浅沼正三師
- ヨハネ福音史家伊藤庄治郎師（後に横濱司教区にゆく）
- 一九四一年 マルチノ児玉三男師
- 一九四二年 フランシスコ・ザヴェリオ中川寿師
- またこの期間にわが代牧区の神学生で外国（イタリアおよびドイツ）に留學しそこで司祭に叙品された人が若干ある。



神学生に囲まれたキノルド司教

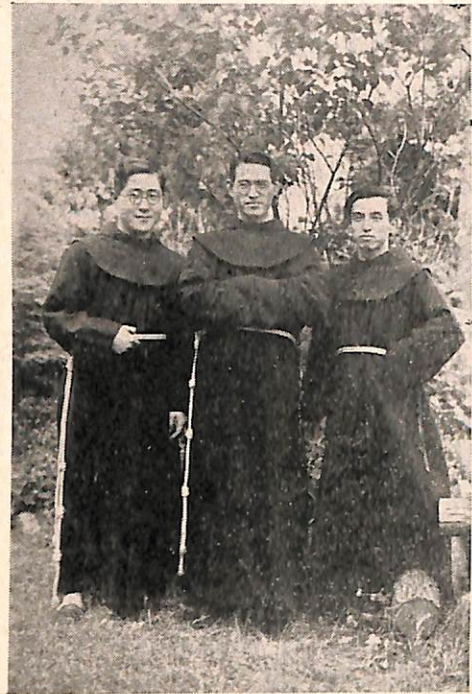
- 一九四二年 ローマでアシジのフランシスコ三原武夫師
- 一九四四年 ローマでアシジのフランシスコ田村忠義師
- 戦争のため、日本では長い間邦人司祭の養成が不可能になつた。しかしキノルド司教はもう一度、以前札幌の神学生であつた人に、按手することが出来になつた。フランシスコ・ザヴェリオ林信夫が、司祭の聖品を授かつたのは、千九百五十二年、十二月二十二日のことであつた。当時キノルド司教はすでに齢八十を越えた老人であつた。その老司教が最終授品のわが神学生に按手して、非常に骨を折りながら、司祭叙品の聖式をすませられたのは、まことに感動すべき光景であつた。実際この司祭叙品は、司祭の愛する北海道布教区における、邦人司祭養成の最後のお仕事となつたのである。キノルド司教が世を去られたのは、ちょうどこの五カ月後のことであつた。

さて、ここでまた千九百三十五年に遡る。筆者のまだ述べておかなければならぬことが少しあるからである。貧困家庭の児童、とりわけ学校へ弁当を持参することのできない児童に食を給するため教会は札幌及び小樽で三月末博愛の催しを行なつた。札幌では市内三越デパートでバザーを開催した。その際そのどの売場でも定価の五分引きで買える割引券を売つたことも、目新しい試みで、人々の好奇心を呼んだ。そのせいもあつて、このバザーは非常な大成功であつた。小樽では『音楽と舞踊の夕べ』を開いた。この催しの中心をなすのは、約七十人の混声合唱団が歌うミサ曲であつた。また同市一流の音楽家たちや、一児童舞踊学

校にも協力出演を依頼したところ、いずれも快諾して、プログラムの非教会的部門を引き受けて下さつたので、一般の注目を引く本場に卓れた会を開くことができた。来場者は二千を越えた。



札幌教区付最初の邦人司祭 榊原有 長坂親秀 大久保俊作



フランシスコ会札幌管区最初の邦人司祭 河村謙 武宮雷吾 浅井晴雄

四月二十七日には、フルダから当時の管区長フランシスコ会員ベネデクト・ゲルツ師が教会法に定めてある巡察にわが代牧区に來られたが、師と共にフランシスコ会修道司祭三名、および藤高等女学校のための聖

十二年以来ポランド人フランシスコ会員たちが担当することとなつた、もとのわが布教地カラフトの教会までも訪問されたが、見聞された所に全く満足され

た。札幌教区が「非常にいい教区」であるといふことは、すでに東京で聞いたと師は語つておられた。もちろん最初そういう言葉は単なるお世辞だと思つたが、やがてわが札幌教区の好い評判は全く本當であると確信するに至つた、といふのである。

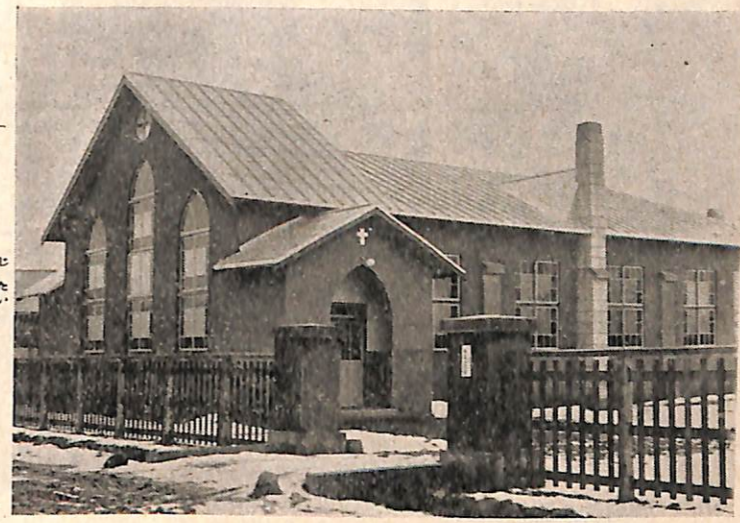
「ヴェンセスラウス・キノルド司教の落ちついた賢明な教区指導と、その部下なる宣教師たちの不撓不屈、忠実な働きとが、最初のささやかな萌芽を成長させ、形を整えさせたのである。」師は後にその旅行記にこう書いておられる。同管区長は六月二十六日、再び日本を去られる時、わが布教地北海道のために氣遣つておられた。ドイツにおけるナチスの反教会政策および外国為替法規定の強化が憂慮すべき事態を生じていたからである。実際わが宣教師は、千九百三十五年からほとんど二十年間というものが、故国ドイツからの経済的援助を全く絶たれてしまひ、教会にとつての受難時代が始まつたのである。

なお今一つ千九百三十五年度の一事件で、ここに述べておかなければならないことがある。それは多年カラフトで布教して来たフランシスコ会員アグネルス・コワルツ師が、東京大司教区所属長野市に、一独立教会を設立するため赴いたことである。カラフトは師の布教の故郷であつた。師はこの日本布教地中最北の地を「孤獨の人の島」と稱していたが、

そこで千九百三十二年から同三十二年に至るまでの二十年間、働いて来た。そしてなおその後その島で働きたいと思つていたのである。師の出身管区なるシレジアは、もちろんこの布教地を十分に仕上げるための宣教師も資力も供給することができなかつた。それで師は千九百二十九年、ポランドのフランシスコ会員たちに援助を求めたところ、かれらは承諾して次の年日本に來たり、千九百三十二年四月、カラフトに渡つた。この人々には人力も資力も十分に備わつていたのでカラフトはかれらの布教地とせられることになつた。この事情の変化はアグネルス師の予想しなかつた所であつた。師は千九百三十二年五月、重い心を抱いて、愛するその島に別れを告げた。そして新しい布教地を求めて、千九百三十五年十月、長野に赴き、翌年には同じフランシスコ会シレジア管区と同僚であるカピスタン・クイオテク、およびライムンド・チョルツ両師も、そのあとを追つて行つたが、遺憾にもアグネルス師は同地で長く布教活動をする事ができなかつた。師はすでに何年も前から、心臓を患つていたので、その治療に東京に赴いたが、同地で千九百三十七年六月二十二日他界したのであつた。享年五十七。師はわが布教地における最も有能な宣教師の一人で、その日本語の知識は一般外人の水準を遙かに抜くものであつたし、日本の文化、宗教、風俗、習慣などにも深く通じていたのである。

一六、第二次世界大戦前の數年間 (一九三六年—一九四二年)

千九百三十六年一月始め、キノルド司教は重い心臓病にかかられたが、なおその上に軽い肺炎も併発された。司教がすでに十九年前から、網膜剝離症の結果視力を失なつておられた左眼も、感冒で急性に悪化したので、司教はよんどころなく入院、一カ月の後ようやく退院された。しかし心臓病はもはや全快せず、なくなられる時まで、しばしば司教を甚だ苦しめたのである。ひどい頭痛を起こす眼病も、また懇篤な医療にもかかわらず治らなかつたので、手術が必要となり、五月四日それが行われた。これは左の眼球を取り去つたのであつた。



一九三七年に出来た田山教会の聖堂

千九百三十六年二月二十六日には、東京にいわゆる二・二六事件が起こり、日本の指導的地位にある政治家たちが犠牲となつた。この騒動は二月二十九日に至つて鎮まつたが重苦しい雰囲気は依然として去らなかつた。こうして三月九日田首相の下に新内閣が組織されるや、政治がいかなるコースを取るか、それはわかりすぎるくらい、わかつていたのである。キリスト教に対する従来の寛容的態度は、次第

れるという事態が生じ、そのため教会の外部的發展は、ほとんど不可能にされてしまつた。光明社はその間にも盛んな活動を展開した。千九百三十三年三月末には、専用の聖歌集として日本全国に広く行なわれ

ている公教聖歌集を根本から改訂した新版を、世に送つた。また千九百三十六年四月には、九百七十六ページに二万五千語を収録した新「独和辞典」上梓の準備ができた。編者は札幌代牧区のフランシスコ会員たちであつた。この大事業の提唱者はマルチン・フリーゼ師で、師は外人司祭八人と日本人数人との協力の下にこの難事業に取りかかり、二年以上鋭意努力して、ついにこれを完成したのである。その校正と印刷の監督に当たつたのは、オイゼビオ・ブライトン師であつた。その際校正刷は七回目を通したのである。この年にはまた、チト・チーグレル師訳のミサ典書の第二版も出た。このミサ典書は、日本のカトリック教徒から大いに歓迎され、前年世に出た第一版千五百部は数カ月で売り切れとなつたが、すぐに着手した第二版においては、需要の盛んなことにかんがみ、前より増刷したのであつた。

千九百三十七年には、ドイツから新しい宣教師が渡来した。三月十六日日本に着いたルカ・ベルトラム師がそれである。千九百三十七年十二月には、札幌にその四番目の教会に当たる田山教会が開設された。これを新築できたのは、病氣の一老婦人が受洗のお恵みに対する感謝として、かなり多額の金を寄附したからにほかならない。しかしこの人はその落成を見て死にたいと言つた。なにしろその

フランシスコ会

北海道布教小史 (一)

一九〇七年から一九二九年に至る分は ヴェンセスラウス・キノルド司教の報告による—— ゲルハルト・フリーベル

戦時中の數年間は印刷を続けることができなかったが、戦争が終了すると間もなく、再び仕事に取りかかり、千九百五十二年に第三巻を、それからまた二年を経て第四巻を刊行することができた。この大事業は第五巻の発行を以て完了するはずである。かような大著を世に送るのは、学問上からいへば、決して小さい仕事ではない。それはその方面の内情に通じている人でなければわからないのである。

の布教地が知牧区に昇格せられ、ポーランド管区出身フランシスコ会員フェリクス・ヘルマン師がその初代知牧に任命せられた、という知らせが東京の教皇使節館から来たのは、千九百三十八年六月のことであつた。この報道は、カラフトの布教地がすでに千九百三十二年、札幌教区から分離されていたものの、まだわが司教の管理下にあつただけに、札幌代牧区にとつて、重要なことであつた。カラフトの新教区長フェリクス・ヘルマン師は、千八百八十七年一月十八日、旧ドイツ領上シレジアのティンメルズドルフに生まれ、プレスラウで神学を修め、パリで東洋語を学び、千九百十六年七月九日プレスラウで司祭に叙品された。そしてまず諸所方方で司牧に当たり、後ついにカトウイツ司教座聖堂付参事会員となつた。師は千九百三十一年六月二十四日ポーランドのレンベルグで、無原罪の御孕り管区のフランシスコ修道会に入り、修練期を終えて後、同管区の聖職者たちのために、神学を講じた。千九百三十七

わが教会施設が五十年の長きにわたつてほとんど全く火災を免かれていたのは天主の特別な御加護のおかげと思わぬわけにはゆかない。すでに述べた如く、千九百三十二年二月には、札幌の藤高等女学校から出火、校舎の大部分が灰燼に帰したし、また千九百三十八年にはマリアの宣教師フランシスコ修女会経営の北広島育兒園が一部炎上したが、わが布教史に留め得る火災は、ただこの二件に過ぎないのである。

の教員が、戦時中の政府の精神に則つて教育を施しているかいないかを調べにわが藤高等女学校にも来たことで、もしミッシェンスクールが政府の希望および命令に厳密に従わなければ、これを閉鎖すると言うのである。もちろんこういう脅威は、不意に来たものではなかつた。その数日前すでに、軍部が光星商業学校を

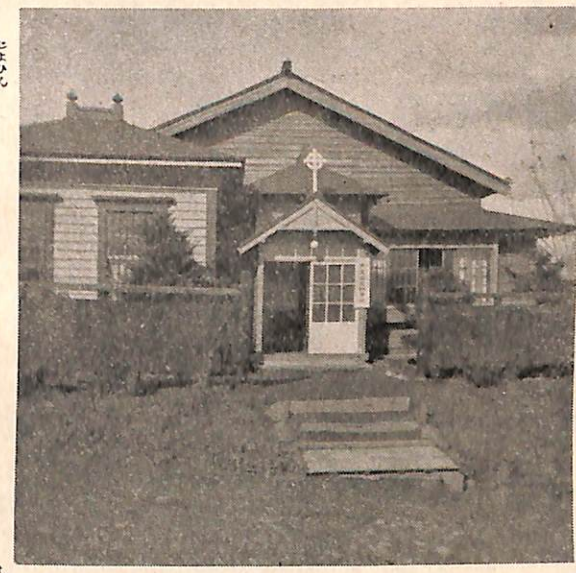


東京武蔵野カトリック墓地でアンドレア原神父の墓を参するキノルド司教とチト・チーグレル神父 (二頁参照)

時はおも八十を越える高齢であつたから建築工事を急がなければならなかつた。この教会の初代主任となつたのは、やはりオーストリアの自分の故郷からも、そのため多少の寄附を仰いだアウグスチノ・ティッシュリンゲル師で、師はそれから二十年近く、同教会を担当して、積り豊かな働きを続けたのであつた。

(つづく)

家を訪問することも、ほとんど不可能になつた。なぜなら宣教師たちと交際のあらる日本人もみな、嫌疑をかけられたからである。宣教師たちの心配と恐怖とが募つたのも無理はない。また宣教師たちの間に一種の落胆と臆病風とが拡まり、いくら働いても効果の挙がらぬこの布教地を棄てて、ブラジルへゆこうと、明からさまに言う人か幾人か出たのも、不思議ではないのである。ブラジルからは、すでに前から同地在住日本人、とりわけブラジル語をほとんど解せぬ人人の布教司牧に当たる宣教師をよこしてくれという依頼が来ていたので、後に司祭三名と修士二名とがブラジルに赴いた。それは千九百三十九年に行つたヴィルジル師と、千九百四十一年に行つたグラチアン、ユスチニアン両師およびシルヴィウス、オスワルド両修士とである。



一九三六年にできた留萌教会

千九百三十九年八月二十一日、ドイツとソ連との間に、不可侵条約が締結されるに及んで、ドイツ宣教師にとり事態は更に悪化した。ドイツはその少し前に日本と防共協定を結んでいたため、日本では右の条約締結を裏切行為と見なしたのである。

千九百三十九年には、わが教区最初の邦人教区付司祭が二人、他界した。ヨゼフ大久保俊作師（一一七九号附録の写真参照）とアンドレア 榊原有師とがそれである。大久保師は、苦小牧教会のアレキ

シオ・ヒップ師（日本に帰化して森信夫と名乗る）が、修道会総長の命令で、自分の生国スイスに招かれたので、千九百三十九年五月、その後任として赴任したが、苦小牧で僅か四カ月勤めただけで、九月十日の日曜日、教会でミサ聖祭執行中、脳溢血で倒れ、その後間もなく世を去つたのである。享年四十三。師はそのミサの間のその直前、善き終りを遂げる準備について説教したばかりであつたので、師の急逝はその説教を殊のほか感銘深いものとしたのであつた。また榊原師は司祭に叙品されてから、苦小牧、小樽、札幌の各教会に勤めていたが、多病で苦しい長患いの後、千九百三十九年四月六日、東京で永眠した。享年三十六であつた。

千九百三十九年の出来事の内、なお挙げべきは、二巻物の「カトリック聖人伝」の刊行であろう。ピオ十二世教皇陛下に赤い絹布装幘の、この聖人伝両巻を献上したところ、陛下は聖庁國務長官の書面を以て、御嘉納の趣きをマレラ教皇使節を通じて光明社主に伝えさせられた。そしてこの著作に多大の讃辭を寄せられ、「雄雄しい宣教師たちの勇敢な企画」が

政府はこの規定の実施に極めて厳重な態度で臨む考えであつたので、せめて教会の存続を図るための措置を講ずるよりほか、仕方がなくなつた。

十一月になると、政府は早くもまた、公教要理と祈祷書とを改めてほしいと言ふ新しい要求をして来た。公教要理は全く体裁を変えて、問答体を廃し、その代り教科書の形式を採用して貰いたい、また今日行なわれつつある愛国教育の風潮にかんがみて手を加え、模範としては聖人でなく、日本の英雄を用いるべきである。更に祈祷書からは、天皇のために祈り、平和を求むる祈り、および王たるキリストに対する祈りを除かなければならぬ、というのである。

改革や変更は、いつもまずプロテスタ

（一）日本政府の見解によれば、国内の教区があまりにも多すぎるから、これを減じてほしい。

（二）日本の教会は外国から独立してほしい。それでもはや決して外国からもローマからも援助を受けてはならぬ。

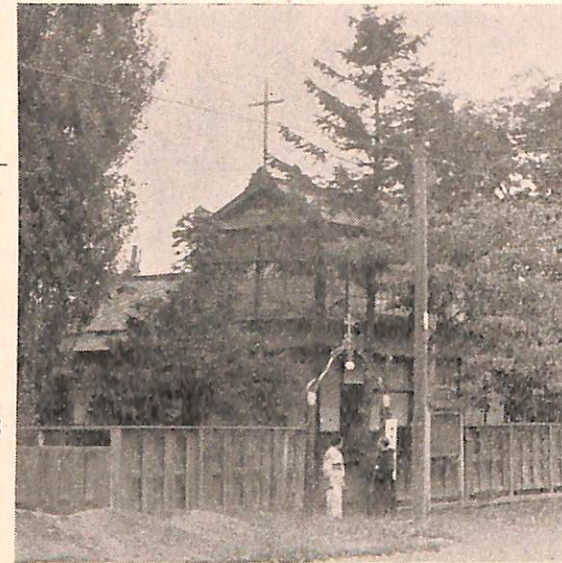
（三）いろいろな新聞雑誌を統合しなければならぬ。すべてのカトリック新聞雑誌の内存在するのは、新聞では「カトリック新聞」雑誌では「声」だけにしてほしい。

（四）外人である学校長は早速邦人と交送しなければならぬ。

（五）日本の学校はみな無宗教を立前としていたのであるから学校の名前に宗教的印をおいてはならぬ。修道服もやはり宗教的印と見なす。故に修道女たちは今後学校に出る時には俗服を着なければならぬ。

（六）外人教職員は当分授業を続けていいが、ただ語学の教授に限る。そして漸次日本人教職員と交送してほしい。

（七）教会在勤の宣教師も、時のたつにつれて日本人と交送してほしい。日本に来る新しい宣教師は政府から厳重な取調べを受けなければならぬ。



一九〇四年にできた名寄教会

政府はこの規定の実施に極めて厳重な態度で臨む考えであつたので、せめて教会の存続を図るための措置を講ずるよりほか、仕方がなくなつた。

十一月になると、政府は早くもまた、公教要理と祈祷書とを改めてほしいと言ふ新しい要求をして来た。公教要理は全く体裁を変えて、問答体を廃し、その代り教科書の形式を採用して貰いたい、また今日行なわれつつある愛国教育の風潮にかんがみて手を加え、模範としては聖人でなく、日本の英雄を用いるべきである。更に祈祷書からは、天皇のために祈り、平和を求むる祈り、および王たるキリストに対する祈りを除かなければならぬ、というのである。

改革や変更は、いつもまずプロテスタ

それは千九百十五年一月、ちようど第一次世界大戦の時、「戦争の落し子」として日の目を見た。最初の十二年間は、週刊紙「光明」を始め、その他の出版物も札幌市内の印刷屋で印刷させていたのであるが、千九百二十七年、マリアの宣教師フランシスコ会の「天使病院」の修女たちが、その経営する天使病院のほかに、印刷所を設けて以来、光明社の出版物はそこで印刷することになった。これは実に日本における教会関係の印刷所の嚆矢であつて、今日注目し値する企業に発展しているのである。

千九百四十年の初めには、光明社が創立二十五周年を迎えた。この出版社の始まりは、極めて微々たるものであつた。

月二十二日には、フランシスコ会員博士ヤヌアリオ・メンラー師がシベリア経由で、わが代牧区に到着した。世界大戦すでにたけなわであつたが、師は日独同盟を理由に、ただ札幌の光星商業学校教師として、辛うじてシベリア経由の旅行許可を受けることができたのであつた。そしてこれを最後に十年以上も、ドイツから宣教師は、ただの一人も、もはやわが教区に来ることができなかつたのである。

千九百四十年の初めには、光明社が創立二十五周年を迎えた。この出版社の始まりは、極めて微々たるものであつた。

月二十二日には、フランシスコ会員博士ヤヌアリオ・メンラー師がシベリア経由で、わが代牧区に到着した。世界大戦すでにたけなわであつたが、師は日独同盟を理由に、ただ札幌の光星商業学校教師として、辛うじてシベリア経由の旅行許可を受けることができたのであつた。そしてこれを最後に十年以上も、ドイツから宣教師は、ただの一人も、もはやわが教区に来ることができなかつたのである。

千九百四十年の初めには、光明社が創立二十五周年を迎えた。この出版社の始まりは、極めて微々たるものであつた。

月二十二日には、フランシスコ会員博士ヤヌアリオ・メンラー師がシベリア経由で、わが代牧区に到着した。世界大戦すでにたけなわであつたが、師は日独同盟を理由に、ただ札幌の光星商業学校教師として、辛うじてシベリア経由の旅行許可を受けることができたのであつた。そしてこれを最後に十年以上も、ドイツから宣教師は、ただの一人も、もはやわが教区に来ることができなかつたのである。

千九百四十年の初めには、光明社が創立二十五周年を迎えた。この出版社の始まりは、極めて微々たるものであつた。

月二十二日には、フランシスコ会員博士ヤヌアリオ・メンラー師がシベリア経由で、わが代牧区に到着した。世界大戦すでにたけなわであつたが、師は日独同盟を理由に、ただ札幌の光星商業学校教師として、辛うじてシベリア経由の旅行許可を受けることができたのであつた。そしてこれを最後に十年以上も、ドイツから宣教師は、ただの一人も、もはやわが教区に来ることができなかつたのである。

二日のことであつた。師は上品な好もしい人物で、なによりもまず、外人宣教師たちの境遇を案にするよう努力してくれ

一七、戦時

(一九四二年—一九四五年)

戦時中はあまり述べることがない。宣教師たちは孤立させられ、ほとんど全く活動ができなようにされていた。かれらと国民とは、計画的に遠ざけられたのである。新聞でも学校でも、また演説などでも、到る所で外国人を憎むよう扇動してこれと交際してはならぬと国民に警告した。かれらはみなスパイだから、と言うのである。毎月公然、いわゆる「防諜週間」が行事として催され、その週には特に新聞で外人を痛罵し、国民の敵と非難したものであるが、これは主として宣教師を目ざしたのであつた。かれらは「スパイ第一号」である。宗教は単にかれの真意と活動を隠蔽するための仮面に過ぎない、と言うのである。またキリスト教は日本精神と両立しない。キリスト教を奉じている者、または奉じようとする者は、いずれも忠義な日本臣民ではあり得ない、ということも国民に駭と叩き込まれた。このやり方はどう見ても、日本がナチスからいろいろと学んだのであるらしい。

キリストの働き手にとつては、実に淋しい意気沮喪せざるを得ない時世であつた。かれらの間には、「朝には神父、後には人夫」という諺まで出来たくらいであつた。

戦時中の宣教師たちの生活の特色は、全くこの一語に尽きているといつていい。朝にミサ聖祭を執行すると、そのあとはこの艱苦の時代に何か食べ物を手に入れるため、自分たちの庭園で労働し芋や野菜を作るのであつた。けれども信者の人々が概して司祭たちに依然変らぬ忠誠を尽くしたことは、かれらを称讃するために、ぜひ記しておかなければならぬ。不実な日本人たちが悪口したり絶えず目を付けていたりしても、かれらは極く少数の臆病な人々を除き、毅然として信仰を守り、しばしば自分自身つらい犠牲を払つてまで、宣教師たちが糊口できよう、心配してくれた。わが教区が、



戸田教区長の就任式を終つて

た。師の悲劇的最後にについては、前にも述べた。

一つの事業も地つに至らずして、終戦の時まで持ち堪えることができたのは、大部分が信者たちの忠誠にして犠牲を厭わぬ美点のおかげであると言つていい。戦時中、国家主義の波濤澎湃として起こつたこの時期は、實際従来の宣教師たち

戦後逸早く布教活動を再開し、以前の仕事を継続することができたのは、全くそのおかげであつたからである。しかし終戦後の時代に移る前に、戦時中他界したわが会の人々のことを、簡単に追憶記載しなければならぬ。

千九百四十三年には、フランシスコ会員アントニオ河村謙師がなくなつた。師は千九百三十四年フルダで受品し、翌年帰国した。更に東京で研鑽を積むこと一

千九百四十三年には、フランシスコ会員アントニオ河村謙師がなくなつた。師は千九百三十四年フルダで受品し、翌年帰国した。更に東京で研鑽を積むこと一

フルベル作 並木新六訳

切支丹物語

- 第1篇 ころび切支丹 定価 一〇〇円 送料 一〇円
- 第2篇 散りゆく蓮 定価 四〇円 送料 一〇円
- 第3篇 あやめ 定価 三五円 送料 一〇円
- 第4篇 江戸の地獄 定価 二〇円 送料 二〇円

発行所 光明社

年、それから千九百三十七年札幌のわが男子の学校光星商業に來たり、千九百三十八年フランシスコ会員ペトロ武官師に代つてその校長となり、千九百四十二年までその職に在つた。軍務に服した師は後間もなくチフスにかかり、千九百四十二年二月十五日、東京で永眠した。享年僅か三十七。(前号写真参照)

フランシスコ会

北海道布教小史 (一三)

一九〇七年から一九二九年に至る分は

ヴェンセスラウス・キノルド司教の報告による

ゲルハルト・フリーベル

千九百四十四年にはフランツ・フェルゴット師が長逝した。師は召命を受けることが晩く、千九百八十二年の時受品して司祭となり、翌年渡日、わが教区に來た。そして三十有余年の間、倶知安、小樽、札幌北十一条、および北広島各教会で宣教師として活躍した。けれども重い糖尿病に冒されたので、千九百四十年札幌の修道院に籠居しなければならなくなり、ついには余儀なく天使病院に入院、そこで一カ月の後六十八歳で世を去つた。千九百四十四年七月二十五日のことである。

師は小兒のように素直な宣教師で、とりわけわが聖堂や小聖堂にあるその油絵の作品によつて、わが教区になお生き続けている。師はまた自分の勤めていた個々の教会の記録を入念に認めたそれによつて後代に精密な資料と興味深い事件とを伝えてくれた。(写真参照)

千九百四十五年にはフランシスコ会員アレキシオ・ヒップ師が帰天した。千九百二十二年から日本に帰化して「森信夫」

と名乗つていた人である。師が日本に來たのは、千九百十年のこと、その最初に勤めた所は、設けられたばかりの白老教会であつた。師はそこで千九百十一年から同十五年まで、アイヌの間で働いて他の神父達に囲まれたフェルゴット神父

足のため千九百十五年閉鎖されたが、師に付けられた「アイヌの酋長」という綽名はあとあとまで残つていた。師の堅い髪の毛と波打つていひげとはこの名称に應じたい威厳を容顔に添



いたのである。なるほど同地の教会は永続せず、第一次世界大戦の結果、司祭不

わつた。千九百三十九年から同四十年にかけて発布施行された宗教法によつて、



初聖体の子供に囲まれたアレキシオ森神父

小牧の各教会に転勤したが、どこでも全くその体格の示す通り、元氣よく熱心に働いた。師は日本に帰化したけれども、戦時中は苦小牧でかなり不如意な孤独の生活をさせられた。それで師は激烈な感冒にかかつた時必要な安んずることも得ることができず、長引いた感冒は不幸にも急性肺炎と奔馬性肺結核とに変わり、見かけはいかにも丈夫そうであつたこの人を僅か二三日であつたのである。ア

一八、終戦後の数年

(一九四五年—一九四九年)

えていたのである。後にアレキシオ師は北広島、旭川、釧路、札幌北十一条、および苦十五年三月十日のことであつた。

第二次世界大戦に惨敗の結果、日本にはさまざまな変化が起こつたが、そういう風で宗教および布教の状況も変わった。千九百三十九年から同四十年に、各宗教団体は直接または間接に、全く国家の権力に従わざるを得なくなつたが、悪評紛々であつた同法は突然撤廃され、今度はそれと全く反対になつた。信教の完全な自由と政教の全き分離との宣布されたのがすなわちそれである。

この新たな自由は、熱狂歓迎する所であつたが、しかし最初の頃は思う存分これを利用することができなかった。どこを見ても、ひどい物不足が目についた。まず食糧と衣料が缺乏していた。尤も、これは間もなくよくなつた。といふのはとりわけアメリカ進駐軍の寛大な援助のおかげであつて、同軍

は実際感嘆に値するほど、教会のため尽くして、これを甚だしい窮乏の裡から救い出してくれたのである。それから宣伝用のもの、公教要理、および祈祷書を印刷する紙がなかつた。新しい教会を設けるための建築材料がなかつた。なにかなく困つたのは資金で、まだあつた僅かばかりの金は、インフレのせいではやがて価値を失なつてしまつた。しかし最もつらかつたのは、宣教師の缺乏していることと、その数は戦争の間に減つていたのである。豊かに積つた穀物が刈入れを待つて



司 祭 信 者 に 囲 ま れ た 瀬 野 教 区 長

いるのに、刈り手がいないのである。そしてこの状態は、はじめて助手がくるまで数年の間、続いたのであつた。終戦後の数カ月間中、特筆に値するのは、千九百四十五年、聖母無原罪の御孕りの祝日に、とりわけ戦争中わが教区が

ベルリンとウイーンで腕を磨き、帰朝したばかりの一派人ヴァイオリニストがその芸術的演奏で、この聖祭に美を添えた。戦時中、恐れて教会に来なかつた信者が幾人も、痛悔に溢れ、謙遜にこの感謝のミサに再び与かつている姿も、目

ついた。また終戦後初の御降誕祭も、各教会でできるだけ盛大に、再び行なわれた。邦人司祭、浅井正三、三原武夫、田村忠義三師が帰国したのは、千九百四十六年三月二十七日のことであつた。かれらはローマで学業を修めていたのであるが、戦争のため卒業後も同地に留まることを余儀なくされ、ある人などは十年以上も不在の後、ようやくわが教区に帰つて来たのである。こういう働き手がふえたのは、最も歓迎すべきことであつたが、それから間もなく、一派人司祭がまた世を去つた。それはマルチノ・見玉三男師である。師は神学生時代すでに肺患を得たが、ついに千九百四十年七月二十七日、札幌でキノルド司教から叙品されることのできた。しかし司祭になつて後、再びサナトリウムに入らなければならなくなつた。千九百四十一年からは、手伝いのように、北広島、および小樽の教会に勤めていたが、戦争の關係で後にはよんどころなく室蘭教会を担当せざるを得なくなり、途中で、いくたびか休みながら、千九百四十六年夏まで、同地に踏み留まつていた。しかしその時宿病が猛烈な勢で再発、千九百四十六年九月から千九百四十七年十月二十七日目を瞑じるまで、札幌天使病院に臥床していたのである。享年僅か三十三であつた。

新しい自由を得て、教会の活動は、戦後の窮乏の許す限り、全面的に再開された。戦時中全くやめていなければならなかつた公けの催しも復活した。オイゼビオ・ブライイトン師は、札幌の処女会員たちを用いて、自作の聖女アグネス劇「ローマの花」を上演した。また札幌でカトリック美術展覧会を開いて、キリスト教の美術作品や祭服を展覧したところ、来観者約一万を算えた。高貴の方々が教会の事業に参観の榮を賜つた。天皇の弟君、高松宮殿下が千九百四十七年四月十二日、札幌天使院のマリアの宣教師フラスシスコ会修道女たちの博愛施設を訪問されたのもそうである。前に休刊していた「光明」も終戦後間もなく、すなわち千九百四十五年の待降節から再び発行され、天使院印刷所は猫の手も借りたいほど多忙を極め、その状態は何年も続いた。新時代の順風に乗つて、学制も改正された。それで千九百四十七年四月には札幌に、従来の藤高等女学校は中学高校併置の藤学園とし、なおその上に藤女子短期大学をも設けた。この大学は修業年限いづれも二カ年の英文科、国文科、家政科(被服コース及び食物コース)、保育科に分かれたれ、今は約六百五十名の在学生を擁している。因みに幼稚園からこの大学に至るまでの全学園生徒学生総数は約二千五百名である。また天使院の修女たちも、その看護婦

学校を整備して、天使女子短期大学とすることができた。この大学は厚生及び養の両科に分かれたれ、修業年限は前者が三カ年、後者が二カ年で、今約二百二十名が在学している。

札幌の北海道大学に前から設けられていた学生たちのカトリック研究会は、戦時中は中止しなければならなかつたが、千九百四十七年、再び開かれた。その主催の最初の公開講演会には、六百名以上の学生が来聴した。この研究会では、同年九月十二日、日本国内のみならず国外にまでも知られている立派なカトリック信者、最高裁判所長田中耕太郎氏が、世界の新局面におけるカトリック教会の立場について講演された。日本の大学生たちに、左傾していた者、今なお左傾している者の多くのあることを考えれば、この研究会はいかに教会のために役立つであらう!

たのであつた。終戦後四年間の頂点ともいふべきは、聖フランシスコ・ザヴェリオ祭で、これは千九百四十九年、この聖人の日本渡来四百周年を機として広く行なわれ、札幌でも独自の記念行事を催した。すなわち六月十日午後六時、聖フランシスコ・ザヴェリオの遺物たる聖腕がイエズス会の二司祭に捧持されて札幌に到着、駅前大広場では日本人警官および米進駐軍憲兵が警戒整理に当たり、数千のカトリック信者、ならびにわがカトリック経営の男女学校生徒が同広場に整列してこれを迎えたが、このめずらしい出来事を見に来た未信者外教師の数も非常に多かつた。聖腕が捧持されて、駅を出、広場に到ると、光星学園のブラスバンドが聖歌を吹奏し始め、次いで大群衆が信心と感激とをこめてそれを歌つたのであつた。かように盛大壮重な信仰表示は札幌ではけだし未曾有のことであつた。翌日は日曜日であつたが、その日にはこの聖腕を捧持して、北十一条教会から藤学園の戶外運動場まで、行列して街路を練り歩き、そこに設けられた大祭壇で、盛大祝賀ミサを行なつた。これには日本人官公吏および米軍の首脳者たちも出席したが、信徒は全北海道から馳せ集まり、その数六千と注された。

この新たな自由は、熱狂歓迎する所であつたが、しかし最初の頃は思う存分これを利用することができなかった。どこを見ても、ひどい物不足が目についた。まず食糧と衣料が缺乏していた。尤も、これは間もなくよくなつた。といふのはとりわけアメリカ進駐軍の寛大な援助のおかげであつて、同軍は実際感嘆に値するほど、教会のため尽くして、これを甚だしい窮乏の裡から救い出してくれたのである。それから宣伝用のもの、公教要理、および祈祷書を印刷する紙がなかつた。新しい教会を設けるための建築材料がなかつた。なにかなく困つたのは資金で、まだあつた僅かばかりの金は、インフレのせいではやがて価値を失なつてしまつた。しかし最もつらかつたのは、宣教師の缺乏していることと、その数は戦争の間に減つていたのである。豊かに積つた穀物が刈入れを待つて

この新たな自由は、熱狂歓迎する所であつたが、しかし最初の頃は思う存分これを利用することができなかった。どこを見ても、ひどい物不足が目についた。まず食糧と衣料が缺乏していた。尤も、これは間もなくよくなつた。といふのはとりわけアメリカ進駐軍の寛大な援助のおかげであつて、同軍は実際感嘆に値するほど、教会のため尽くして、これを甚だしい窮乏の裡から救い出してくれたのである。それから宣伝用のもの、公教要理、および祈祷書を印刷する紙がなかつた。新しい教会を設けるための建築材料がなかつた。なにかなく困つたのは資金で、まだあつた僅かばかりの金は、インフレのせいではやがて価値を失なつてしまつた。しかし最もつらかつたのは、宣教師の缺乏していることと、その数は戦争の間に減つていたのである。豊かに積つた穀物が刈入れを待つて

教界に至つた。その結果日本の各教会では、宣教師の数が、今まで曾て見なかつたほど増加した。殊に隣りの中国で、信仰の使徒が多数共産政府に追放されるようになったから、そうであつた。かように宣教師が増加したためどの教区でも前にすすでに記した通り、キノルド司教は御自分の教区のため、多数の教区付司祭養成に努められたが、これは日本の事情によく適い、かなりな成果を収めた。従来は教区付司祭と修道司祭とが、相共に札幌代牧区という広い地域の司牧に当たつて来たのであるが、今や互に別かれて、それぞれの担当地区を定むべき時が到来したのである。それで千九百四十九年九月十三日、瀬野教区長はさしあたり教区を三地区に区分した。これはもちろん独立したのではなく、相合して依然札幌教区長の管轄の下にあつたのである。

に仮区分が行なわれた。前にすすでに記した通り、キノルド司教は御自分の教区のため、多数の教区付司祭養成に努められたが、これは日本の事情によく適い、かなりな成果を収めた。従来は教区付司祭と修道司祭とが、相共に札幌代牧区という広い地域の司牧に当たつて来たのであるが、今や互に別かれて、それぞれの担当地区を定むべき時が到来したのである。それで千九百四十九年九月十三日、瀬野教区長はさしあたり教区を三地区に区分した。これはもちろん独立したのではなく、相合して依然札幌教区長の管轄の下にあつたのである。

宣教師の増加が北海道に及んだのは、少し遅く、ようやく千九百五十年になつてからであつた。新築展の準備をするため、まず手始め

この名称の下には、札幌北一条(創立一八八一年)、札幌山鼻(一九三〇年)、札幌円山(一九三七年)、小樽富岡(一九〇三年)、小樽住ノ江(一九四九年)、俱知安(一九一一年)、江別(一九三四年)、北広島(出張所としては凡そ一八九二年、本教会としては一九二三年)、苦小牧(一九三〇年)、および室蘭(一八九三年)の各教会が包括せられ、邦人教区付司祭の布教地域となつて



藤 学 園 の 広 場 に 行 な わ れ た 聖 フ ラ ン シ ス コ ・ ザ ヴ エ リ オ 祭

この名称の下には、札幌北一条(創立一八八一年)、札幌山鼻(一九三〇年)、札幌円山(一九三七年)、小樽富岡(一九〇三年)、小樽住ノ江(一九四九年)、俱知安(一九一一年)、江別(一九三四年)、北広島(出張所としては凡そ一八九二年、本教会としては一九二三年)、苦小牧(一九三〇年)、および室蘭(一八九三年)の各教会が包括せられ、邦人教区付司祭の布教地域となつて

この地域でフランシスコ会がまだ保持しているのは、修道院に隣接して千九百八年にその設立した札幌北十一条教会だけであつたが、これは千九百五十二年の取極めによつて、本當の意味で修道院の教会になつた。

なお札幌山教会のためにもフランシスコ会は、いつまでか期限は不定であるが、教区長の依頼により宣教師を駐在させることとした。

(一) 旭川地区

この名称の下には、旭川(創立一九〇四年)、稚内(一九三三年)、北見(一九三三年)留萌(一九三六年)名寄(一九四〇年)および砂川(一九四九年)の諸教会が包括せられ、わがフルダ管区のフランシスコ会員がこれを担当している。北見教会はその数年後、再びわれらの手を離れた。

(三) 将来の地区としての北海道東部および岩見沢地方

なお二つの布教地区が近く決定せられるであろう。まずその一つは釧路(創立一九二七年)および帯広(一九三〇年)の二教会を擁する北海道東部地方である。この地域を受け持つ宣教師を探している内フランシスコ会はさしあたり、布教人員を配置しなければならなかつたが、もし十年以内にこの地域を担当する新しい宣教師が得られなかつれば、ここは邦人教区付司祭のために保留することと定め

られた。それからまた岩見沢の周辺地域も担当者未定である。岩見沢(創立一九〇九年)および清水沢(本教会一九四九年)大夕張(分教会一九五〇年)の各教会も同様に、教区長の依頼によつて仮にフランシスコ会員が司牧の任に当たつてはいるが、この地域に対しても、新しい宣教師たちを物色中である。そしてもし十五年

二〇、布教地区分割当て後の数年間

(一九四九年—一九五二年)

前述の布教地区分割当てと布教人員の組分けは、札幌教区を創設した人々にとつて、疑いもなく精神的にもまた物質的にも犠牲を意味するものであつた。従来布教活動の場所は、大部分地たなければならなくなり、われわれの布教地域となつた地区は、なるほどいささか工業や炭坑採掘も行なわれているが、概してまだあまり発展していない、人口の稀薄な、農業を主とする遠隔の奥地である。この割当て変更は、ほとんど始めからやり直すに等しく、戦争のために長い間われわれドイツのフランシスコ会員が故国との連絡を絶たれ、人員も少なければ、資力もかなり乏しいままに置かれただけに、われわれにとつて、困難を倍加した。とは言え教会の利害はいつでも個人のそれに優先させなければならぬ。ただキリストの御国が広まり栄えさせれば、

以内にそれを見出すことができなければこの地域も教区付司祭の担当地区となることとされている。

こういう風に、時代の情勢と要求に従つて、札幌教区を急速に発展させ、一層繁栄させるための計画が立てられているが、主要問題は、新しい布教人員を得ることと、各教会の地区を整備することにほかならない。

それでいいのである。

宣教師の甚だしい欠乏を除くために、終戦後の数年間には、キノルド司教と当時のフランシスコ会管区長エマヌエル・ツェントグラフ師は、米国およびオーストラリアのフランシスコ会員、それからまたアイスランドの聖コロンバン宣教会にも依頼したが、この望みは叶えられなかつた。しかし千九百五十年になつた頃からだんだん宣教師たちが中国を引きあげなければならなくなつたので、新管区長ルドルフ・ケルネル師は、これを所望の布教人員増加の機会と見て、当時すでに中国を去り、香港に居住しておられた極東フランシスコ会員総代理者、アルフォンス・シヌヌーゼンベルグ師に絶つて、手の空いた中国の宣教師たちを、わが北海道布教地に振り向けていただくよう、要請した。この依頼は聞き届けられ

(つづく)

千九百五十一年秋には、オランダのフランシスコ会員三名が、中国から日本に來た。アプデマス・ファン・デ・サデ師、アルテミウス・フルス師、およびスタニスラウス・ムルデル師がそれである。この人々は最初東京六本木の語学校にいて、それから北海道に來たり、少時の間わが宣教師たちと共に働いていたが、千九百五十三年北見地方に赴き、後これを自分たちの布教地区として担当した。

われわれの同僚であるドイツ人修士も千九百四十九年から千九百五十二年に至る間に、増加した。まず戦前ブラジルの日本人司牧に當たるため、同地に赴いたわが宣教師が二人北海道へ歸つて來た。すなわち千九百四十九年十一月、ヴァイルシル・ナードル師が札幌に歸着し、そのちううど一年あとにユスチニアン・ヒンツ師が來たのである。ドイツからは、千九百五十年八月、博士ジギスベルト・ピーデルマン師が來たが、この人にはわが教区の

フランシスコ会

北海道布教小史 (一四)

一九〇七年から一九二九年に至る分は

ヴェンセスラウス・キノルド司教の報告による
ゲルハルト・フリーベル

ことをあまり見てもらうことができなかった。なぜなら師は間もなく、教皇公使



1949年に出来た清水沢教会

マキシミリアン・デ・フェルステンベルグ大司教に、その秘書兼教会法顧問として、東京に留めおかれたからである。七月にはフルダから來たハインリヒ・メッ

ツレル修士が到着、札幌のわが修道院にいて仕事をすることになつた。こうして宣教師の不足は、まだ長い間全くは満たされなかつたものの、漸次改善されるに至つたのであつた。



1950年に出来た夕張分教会

新宣教師獲得の配慮と共に、われわれの主要な使命は、新たに割り当てられた布教地区を整備完成することであつた。千九百四十九年には、ヤマアリオ・メンラー師がその担当している岩見沢教会の広い布教地域に、新しい教会を一つ設けた。それはいづれも重要な炭坑地帯にあるもので、十月十六日には砂川教会が十二月三日には清水沢教会が、祝別奉獻せられたのである。千九百四十九年九月における布教地区分割当てと関連してヤマアリオ師が自らその初代主任として岩見沢から砂川に転任し、そこから更に長い間清水沢をも司牧していたが、なお

その上に千九百五十年一月二十六日には清水沢の分教会として、大夕張教会をも開設した。実に「活動の範囲が大となればなるほど、活動の熱心もますます大となる」とは、師について言われる言葉であらう。

わが新布教地区の中心となる旭川には、本部として聖アントニオ修道院を建て、千九百五十年五月に入居した。この修道院附属聖堂は、同年十二月三日、聖フランシスコ・ザヴェリオの祝日に、千九百五十二年夏には、砂川地方にあつてそこから約六十キロメートルを隔てた所にある田園の小都市富良野にも、新しい教会を設立し、九月に入居した。(挿絵次号)

千九百五十二年夏には、砂川地方にあつてそこから約六十キロメートルを隔てた所にある田園の小都市富良野にも、新しい幼稚園が開設されたが、この経営を擔する、美しい幼稚園である。当時は建築に必要な材料が不足していたため、

千九百五十年三月二十九日、早くも最初の中国宣教師たちが、札幌に到着した。それはイタリア、ポロニヤ管区出身のエンリコ・ゴッチ、及びガウデンチオ・モンチ師であつた。これに続いては、同年その同僚であるカミロ・コンカリ師とサルヴァトル・トレヴィサニ師が、次いで翌年にはライムンド・カメリニ師とウゴリノ・アルカリ師が來た。この人々には、少時の後一地域をその担当布教地区として譲るつもりであつたのである。けれどもかれらの故国の管区は、この計画に同意しなかつた。

千九百五十二年夏には、イタリア、ヴェネチア管区出身のフランシスコ会員前中国宣教師ダミアノ・プレッサン師が新宣教師として來たり、釧路へ行つた。翌年の三月には師の同僚ヴィクトリオ・ガヴァツォ・ジェルマノ・ヴォルカン、両師が師の許に來た。この人々の管区は、始めから北海道東部を担当布教地区として引き受けるつもりであつた。千九百五十二年の御復活に帯広教会を引き受けると共に、この人々はまだ正當の権利を以てではなかつたが、事実上自分たちの布教地区を編成したのであつた。

建築許可を得るのに多大の困難を伴なつてきたにもかかわらず、このようにわが布教地区の整備は、その担当後、直ちに緒についたのであつた。

終戦後の数年間に、われわれ宣教師の胸を閉じた今一つの大きな心配があつた。それは後進邦人修道者についての心配である。これに関しては、「一体布教地に修道会などというものが必要か？」という質問を答える人は、「聖会史上に、修道聖職者のいなかった時代、もしくは教区が、果たしてあつたか？もしあつたとすれば、それは教会の益になつたかどうか？」と、反問してみるのが最も早道であらう。

後進修道者の養成は少年から始まる。それゆえ千九百五十年春、帰国するドイツ商人一家から、小樽にあるその家を買取り、わが修道会の最年少者たち、まだ中等学校に通学しなければならぬ学生たちを入れる小神学校とすることにした。そこへゲルハルド・フーベル師が九名の学生を連れて引き移つたのは、千九百五十年十一月二十二日のことであつた。この家はその後フランシスコ会所属少年の保護者なる、ツールースの聖ドヴィコに献げられたのである。

わがラテン語学習者たちのためには、千九百五十年から同五十一年にかけて、九州の首都ともいへべき福岡市に、聖ボ

ナヴェンツラ学院を建てた。なぜ札幌から汽車で五十時間もかかる遠い所を選んだのかと言へば、それにはいろいろ理由があつた。まずわれわれは、曾てすでに、九州に一家屋を得ていた。これは修道院でなく、また本来の意味での教会でもないが、しかし福岡司教区所属熊本市待労院における甚だ重要な司牧の持場である。マリアの宣教師フランシスコ修道女会がすでに千八百九十六年八十名ないし百名程を收容する癩療養ホームとして設立したこの施設は、年月のたつ内に、育児ホーム、幼稚園、病院のような博愛事業が加わつて、そこだけで司牧されるべき人が四百名ばかりあるほどまでに発展した。日本の事情では、かような司牧の持場は、すでに一大教会に相当する。わがフランシスコ会員ヒラリオ・シヌメルツ師は、千九百四十八年にもう、この持場に行つていた。そういう風であつたら、九州にわれわれの方の出先ができたとしても、それは容易に納得できることであつた。その上福岡司教区が、その司教区にわが修道司祭の協力を要請しておられたし、また福岡に設立すべき学院に關連して、修道院付教会設立も許しておられた。それに昔の信徒の子孫多数を擁する九州からは、少なからぬ人が召命、殊に修道の召命を受ける見込もあつたのである。

しかし決定的であつたのは、わが修道

ナヴェンツラ学院を建てた。なぜ札幌から汽車で五十時間もかかる遠い所を選んだのかと言へば、それにはいろいろ理由があつた。まずわれわれは、曾てすでに、九州に一家屋を得ていた。これは修道院でなく、また本来の意味での教会でもないが、しかし福岡司教区所属熊本市待労院における甚だ重要な司牧の持場である。マリアの宣教師フランシスコ修道女会がすでに千八百九十六年八十名ないし百名程を收容する癩療養ホームとして設立したこの施設は、年月のたつ内に、育児ホーム、幼稚園、病院のような博愛事業が加わつて、そこだけで司牧されるべき人が四百名ばかりあるほどまでに発展した。日本の事情では、かような司牧の持場は、すでに一大教会に相当する。わがフランシスコ会員ヒラリオ・シヌメルツ師は、千九百四十八年にもう、この持場に行つていた。そういう風であつたら、九州にわれわれの方の出先ができたとしても、それは容易に納得できることであつた。その上福岡司教区が、その司教区にわが修道司祭の協力を要請しておられたし、また福岡に設立すべき学院に關連して、修道院付教会設立も許しておられた。それに昔の信徒の子孫多数を擁する九州からは、少なからぬ人が召命、殊に修道の召命を受ける見込もあつたのである。

志願者学習の問題であつた。われわれフランシスコ会員は、当時自分の修道会の学校を、まだ一つも有していなかつた。東京にあるその地域のための神学校では、修道志願者を神学生として入学させるのに、困難があつたが、福岡大神学校の聖スルピス会の神父がたには、喜んでわが学生たちを迎える用意があつた。それで千九百四十九年以來、すでにわがラテン語および哲学学習者を、福岡の聖スルピス会神父がたの許に送つていたのであるが、千九百五十一年かれらに自分のホームを設けてやることとなり、その校舎が祝別されたのは、同年の五月で、ヴィルジル・ナゲル師がその初代院長、ソラノ・デンケル師が附属教会の主任司祭に就任した。

今では、この福岡聖ボナヴェンツラ学院が、日本にあるすべてのフランシスコ宣教師団のために役立つに違いない。わが修道会の学生たちは、そこで二年間ラテン語の課程を修め、それから東京附近浦和にあるカナダのフランシスコ会修練院に入る。そしてそこから、総代理アルフォンス・シヌメルツ師が、千九百五十四年四月、東京都世田谷区瀬田町に、哲学および神学を修める所として開設された、わが会の聖フランシスコ神学院に移るのである。こうして修道会の後進およびその養成の問題も、終戦後の数年間に、かたがついたのであつた。なお、千

九百四十九年から同五十二年にかけて、わが宣教師団から報告すべきことは、次の通りである。(挿録次号)

千九百四十四年夏には、当時の教区長戸田師が、札幌から約四十キロメートル離れた所にある月形村新田に、土地を買入れた。それは終戦後インフレになりそうだと考えたからで、まだ教会に残つていた僅かな金をできるだけ有効に用いるためであつた。この購入は、後に至つて、非常な利益であつたことがわかつた。札幌マリア院の修女たちはこの土地を引き受けて、千九百四十五年五月から耕し始め、その年のうちに見事な農園を作り、附近の少女たちのためには、後に裁縫科と家政科とを設けた。また千九百五十一年からは、その経営する札幌藤学園の身体虚弱な生徒たちの療養所をもそこに置いた。この療養所の付いた学校が、養護学校として国家から認可されたので、少女たちはそこで療養しながら、学習を継続することができるのである。

千九百五十年七月一日から同三日までは、札幌藤学園がその創立二十五周年祝賀を行つた。その折同校生徒は、ゼーノ・フレック師作の聖劇「十字架の勝利」を上演して、大成功を収めた。

「わたしは日本の学校三万五千の内、千校ばかりを見ましたが、藤学園はそのなかで最も優れていると申しあげても、決して過言ではありません……ここで学ぶ少女たち、ここでわが子を教育して貰う父兄たちは実に幸福であります。」云々と述べられた。

千九百五十一年五月五日、すなわち日本の子供の日は、札幌天使院の修女たちが、そこに新しく育兒園を開いた。市のある晴れの表彰式の席上、この修女たちに市当局から渡された褒状には、札幌におけるその育兒園は模範とするに足る、とあつた。この近代風の育兒園は、主としてアメリカ進駐軍の寛大な寄附の

二一 キノルド司教の帰天

(一九五二年)

おかげで、建てることのできたのであつた。そのほか同会では、これより先すでに満洲や樺太からの引揚者を收容するホームをも開設していた。

千九百五十一年八月二十三日には、天使院の修女たちが、十日間に亘つて聖マリアに關する展示会をも開いた。そのためかれらは請うて世界中から聖母の美術作品の複製を集めたが、来観者は五千人を越えた。

一方光明社では、戦争の数年前すでに出版していたが、千九百四十年秋政府の改革法の犠牲となつて休刊した、第三会の雑誌「聖火」を、千九百五十二年七月から再び発行するようになった。

聖別することがおできになつたのであつた。けれどもこれはまた、その司教としての最後の職務執行でもあつた。そしてこの聖式を終えて歸られた時には、御疲労が甚だしかつたのである。次いで御降誕の大祝日には、もう一度その三つのミ

るとは、その時々言われたお言葉であつたが、クリスマスの日目に、司教は書簡の後ミサ聖祭を中止されなければならなかつた。その御衰弱は、同日臨終の秘蹟をお授かりにならなければならぬほど、ひどかつた。けれども御病氣はまだ危篤には至らなかつた。それはほとんど五月月にも及んだのである。御復活の頃には、また回復されるように見ええた。御復活の日曜日である四月十三日から、五月十三日まで、キノルド司教はまた毎日、ミサを献げることがおできになつたが、やがて新たに危険な容態となられ、九日の後他界された。すなわちその最後に聖体拝領されたのは、五月二十一日朝のことである。その日の夕方には、危険に陥られ、同僚修士や修女たちに囲まれ、五月二十二日の早曉御靈魂を創造主の御手に返されたのであつた。

「この義人の御靈魂は諸天使諸聖人に囲まれてわたくしどもの所を去られました。天国で大合唱団が『見よ、偉大なる



天使院にて安置されたキノルド司教の遺骸

「司祭を！」と歌い始めたことは、わたくしの信じて疑わぬ所であります。」天使病院の院長なる童貞は、われわれの深く愛していたキノルド司教の御最期について、こう書いています。

キノルド司教は、千八百七十一年七月七日、ドイツ、パデルボルン司教区内ギールスハーゲンに誕生され、千八百九十年十月七日、フルダでフランシスコ修道会に御入会千八百九十七年



四山カトリック墓地に登る聖職者の一団

日本に派遣され、千八百七一年一月九日横浜に上陸、同じ月の十九日札幌に到着され、北海道に布教を始められた。そして千九百十五年四月十三日知牧に任命され、千九百二十年四月三日フランシスコ会の札幌布教区の、最初の代牧兼司教に挙げられたのであった。

キノルド司教は日本に天主の御國を拓くため、四十五年の余も働かすに当たつての慎重さと忍耐、および指導するに当たつての慈父のような懇篤さにあつたのである。師はただご自分の同僚修士たちのみならず、日本の全教会からも愛と尊敬とお受けになつた。日本の教会全体に関するような重大な事業には、いつでも教会上司は好んで師の助言と批判を求めた。師は信者たちからこの上ない尊敬を受けておられたのである。

御晩年は、静かな籠居と苦しみとの御生活であつた。それは言わば愛する布教地のために祈らうと、昼も夜も指でロザリオを繰つておられたようなものであつた。それに重い御眼病のため、ほとんどもはや見ることも読むことも、おできにならなかつた。そういう風であつたから、同僚修士たちがお淋しい折に御訪問申し上げると、非常にお喜びになつた。



キノルド司教の紋章

司祭に叙品されて後、まず十年間は同管区の方々の修道院で、講師、修練長および院長を勤めておられたが、布教国にゆきたいとの御望みは、ますます強くなるばかりで、師はすでに当時のアフリカ東部のドイツ植民地に、ドイツのフランシスコ会布教区を創設することを志しておられた。しかしちようどその頃、ペルリオーズ函館司教が日本北部の布教にフランシスコ会の宣教師たちを求めておられたので、キノルド師は千九百六年十一月

果を挙げられた。それは別に師が雄弁な宣教師であつたからではない。日本語は師にとつて一生涯重い十字架であつた。それは習い始められたのが、実に三十七才の時、晩学のせいであつたであらう。師の偉大さは計画を立てるに当たつての賢明さ、それを実行



キノルド司教の石碑

された。ペトロ土井東京大司教が、北一条教会で、浦川仙台司教、在東京教皇公使館のノックス師、および瀬野札幌教区長の輔佐、同代牧区の聖職者その他宣教師多数参列の下に、莊厳な死者ミサを挙行されたのである。葬列は午後一時半同教会を出発、市の街路を通つて四山墓地に赴いたが、これに加わつた人は、夥しく、北海道の果ての教会からさえ、信徒が自分たちの尊敬する司教に最後の礼を尽くそうと、馳せ集まつて来た。道端にはわがカトリックの学校の男女学生が増列し、葬列は凱旋の行列のようであつた。今キノルド司教は札幌四山のふもとに、静かな墓地に眠つておられる。そして後に司教区で建てた立派な大きな御影石の墓標が、その奥津城を飾つてゐる。

フランシスコ会

北海道布教小史 (二五)

一九〇七年から一九二九年に至る分は

ヴェンセスラウス・キノルド司教の報告による
ゲルヘルド・フリーベル

三三 札幌教区司教区となる

(一九二五年—一九五三年)

東京の教皇使節館から、札幌代牧区が正式に司教区に昇格されるという知らせが来たのは、千九百五十二年、十二月十七日のことであつた。その初代司教は、京都司教区付司祭、ベネチクト富沢孝彦師であるといふのである。

翌日瀬野師は札幌を去つて、その出身司教区の東京へ歸つた。師は千九百四十四年からほとんども九九年の間、わが教区のために全力を尽くして下さつた。しかもそれは宣教師たちがみな、新しい時

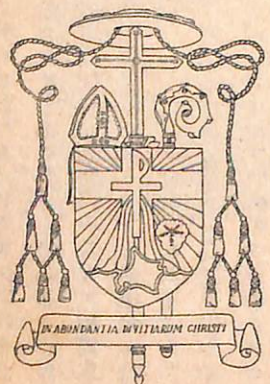
千九百五十二年十二月十一日付のローマからの正式文書は、二月末札幌に到着、千九百五十三年三月四日、北一条の教会で、別れゆく従来からの教区長瀬野師から、新任の富沢司教の面前で発表された。司教区はこの式と共に発足したのである。



勢に対処しなければならなかつた、困難な戦時およびそれに劣らずむずかしかつ



た終戦後の幾星霜であつたのである。師は千九百五十二年八月、健康上の理由で神学校に入られた。それから千九百三十七年同地で司祭の聖品を受けられた。その後にも更に研鑽を積み、めでたく神学(一九三八年)および教会法(一九四一年)の博士の学位を獲得されたが、戦争が勃発したため、数年間ローマに留まつておられた。そして千九百四十二年から同四十六年まではヴァチカン駐在大使節館の教会顧問を勤めておられたが、終戦後千九百四十六年日本に帰国、生まれ故郷京都市の西陣聖ヨゼフ教会主任兼同司教区顧問となられ、千九百四十七年同地に学生連盟を結成された。これは二年後には全国的組織となつたが、師はその副会長



富沢司教の紋章

富沢新司教は千九百一十一年二月十二日、京都に御誕生、マリア会が東京で経営している有名な曉星学園で中学の課程を終え、次いで千九百一十九年東京の前

辞任し、後進に道を開こうとした。ここに師が北海道の教区のためになされた働きに対して、衷心から感謝を申し述べる次第である。

に就任された。司教叙階式は、千九百五十三年三月十日、聖ヨゼフの祝日に、札幌北一条司教座聖堂で挙行された。祝聖者は教皇公使マキシミアン・デ・フェルステンベ

九日、聖ヨゼフの祝日に、札幌北一条司教座聖堂で挙行された。祝聖者は教皇公使マキシミアン・デ・フェルステンベと古屋京司教とであった。古屋司教はまた、前にその教区の司祭であつた富沢司教に向つて慶祝の詞をも述べられた。この祝典の来賓としては、荒井横濱司教、東京大司教区主事長江師、もと東京大神学校校長、パリ外国宣教会員カン

二二、最終決定の布教地区割当て

(一九五三年—一九五五年)

前にもすでに述べた通り、北海道における布教地域の区分割当ては、千九百四十九年に着手されたが、その目的とする所は二つであつた。それは第一に邦人教区付司祭にその担当する地区を割り当ててやるためであつた。邦人聖職階級を確立するには、これが必要な先決条件であつたからである。第二には新しい宣教師のグループに与えようとする、新地区を造るためであつた。仕事が広範になつて、その区分を多くすることができた。

それで富沢司教は、着手された区分割当てを、いよいよ完了されたのであつた。まず函館地区に整理の手が伸びた。函館天主堂は、千八百六十八年の創立にかり、北海道のすべての教会の母教会であつて、千八百九十一年には、新設函館司教区の司教座聖堂となつた。千九百三十六年には函館司教区が仙台司教区と変更されたが、北海道の南部にある函館地区が、札幌教区に併合されるのは、今やただ時の問題に過ぎなかつたのである。

これに関する布教聖省の決定が発表されたのは、千九百五十二年六月十九日のことであつた。それによつていよいよ、北海道全島は札幌教区に属するようになったのである。この函館地区を富沢司教は千九百五十三年五月二十九日、契約によつてパリ外国宣教会のフランス人宣教師たちに委ねられた。かれらにとつてそれは、すでに百年近くも前、すなわち千八百五十九年にかれの先輩のメルメ1師が、迫害時代以来最初の司祭兼宣教師として上陸した、馴染深い地への帰郷にほかならなかつたのである。函館地区は、函館元町(創立一八六八年)もと亀田と称された函館宮前(一九〇一年)、渡島当別(一九一三年)の各教会を包括するもので、最近更に湯の川(一九五六

の契約が結ばれたのは、千九百五十五年六月六日のことで、この地区の擁する諸教会は、北見(創立一九三三年)、網走(一九五三年開設、一九五六年新築落成)および紋別(一九五五年)である。キノルド司教が千九百十七年来日せられた時には、北海道にまだ、函館、札幌、室蘭、亀田、小樽、および旭川と都合六教会しかなく、信徒数一千に満たなかつた。それが五十年後の



一九五三年旭川大町に出来た修道院と教会



一九五〇年に出来た富良野教会



一九五三年福岡に出来たフランスシスコ修道院

二四 わが布教地区における最近の発展

(一九五三年—一九五六年)

以下は、わが布教地区、すなわち布教五十周年祝賀の前四年間におけるフルダ管区フランスシスコ会員の活動に限つて記すこととする。まず挙げなければならぬのは、フルダから管区長デオカル・グレイデーヒ師が訪問に来られたことである。師はロタル・プレンバ師を伴ない、千九百五十三年

五月七日空路東京に着かれた。同管区長は東京都に一週間滞在して、日本の布教をいろいろな方面から知る機会を持たれたが、その後北海道のわが布教地区に來られて、優に一カ月間御滞在、各宣教師各教会を、個別に訪問された。師は必ずやかれらの大使命を悟られたであろうが、終戦後の布教地の区分や宣教師たちは、札幌に帰られると、宣教師一同の会

の割当て変更によつて、われわれにかかつて来た、またこれからも依然かかるとあるう大なる困難を、十分に理解されたに違いない。六月中旬には、師は南方へ旅行し、福岡のわが会の修道院や、熊本琵琶崎の女子修道院の小聖堂付司祭の家、それに原爆都市長崎などを視察され

教師各位の近くにいるのである。師の帰国後最初のお便りには、こう記してあつた。管区長が帰国されて間もなく、七月二十三日には新宣教師ニコラオ・プレッシェル師が東京に到着、また千九百五十四年一月二十五日にはダレオン・ゴルトマン師が、そのあとを追うて来た。やがて布教人員の増強となるべき若き宣教師が三人、東京にある語学校に入つたのは、宣教師にとつて喜ばしいことであつた。なお千九百五十六年十月六

日には、最後の新宣教師として、ドミニコ・パウエル師を迎えることができた。けれどもわれわれの喜びは、その内にまた下火となった。と言うのは、千九百二十四年から日本に帰化して、平世修明と名乗ったわが古参宣教師ヒラリオ・シヌメルツ師が、千九百五十四年に世を去つたからである。師は司祭に叙品された千九百十年布教に来たり、千九百十一年から同二十四年まで俱知安、北広島、岩見沢各教会に転勤し、次いで千九百二十四年九月、札幌北一条教会主任チモテオ・ルツペル師が雷火に撃たれて急逝するや、その後を襲い、まる二十三三年の間その職に在つた。ヒラリオ師は確かにわが会の最も有能な最も成果を挙げた宣教師の一人であつた。その愛想のいい性質と、交際の巧みさで、師は日本人のなかに多くの友人を獲得した。師はまたさまざまな慈善事業でも有名でしばしば日本政府から表彰や援助金を授けられ一度などは天皇の



慈愛園の人々に囲まれた平世神父

御名を以てさえてうされたことがあつた。戦後患つた師は、ついに本当の意味での司牧を締めなければならなくなつた。千九百四十七年から同四十八年にかけては、聖ゲオルグのフランシスコ修女に力を尽くした。ヒラリオ師はもう一度、千九百五十三年に、札幌北一条、それから富良野で、牧職に用いられたが、もういけなかつた。その東京で他界したのは、千九百五十四年八月十三日のことであつた。享年七十。

師が死んでから四日たつて、わが会の若き邦人神学生が一人、やはり東京で胃の手術を受けて死亡した。それはわが会以前担当の岩見沢教会出身レオナルド前田修士で、享年僅か二十六に過ぎなかつた。かれは本当のフランシスコカンパニの持主であつた。われわれが後進邦人修道者にかけている希望の一つを、このように早く失なわなければならなかつたことは、まことに遺憾の極みである。

わが布教人員をいたく減少させたもう一つのわけは、ポロニヤ管区所属のイタリア宣教師たちが立ち去つたことであつた。かれらは千九百五十年および同五十一一年に、中国からわが布教地に来り、その数六人になつてゐた。当時わが方は北海道布教地の一地域を、かれらに委ねようとしたのであるが、かれらの上司が、それに同意しなかつた。しかしかれらは北海道区分割当てがすんでから、自分たちの布教地を探しにかり、新潟知牧区に一地区を得たので、千九百五十六年の三月から九月までに、そこへ去つて行つた。そのためわが宣教師は手不足で困り、よんどころなく札幌円山教会を司教に返還したほか、熊本琵琶崎の

待労院や新田マリア院における司牧の仕事も、もはやすることができなくなつた。その上わが地区の富良野教会のために、釧路地区から一宣教師を貸して貰うよう頼まなければならなくなつた。それほどイタリア人神父たちの転出は、布教力に突然大きい缺口を生じ、しかもこれを補うことは容易ではなかつたのである。

以上大体布教人員のことを述べたから、今度はわが布教地区の整備について語らなければならぬ。この点では最近四カ年に大いなる所があつた。それはまた必要でもあつた。何となれば布教地の分割後は、言わば新たに着手するのと同様であつたからである。戦前の古い諸教会の内、われわれが今なお保持しているのは、札幌北一条(創立一九〇八年)、旭川五条通(一九〇四年)、稚内(一九三三年)、北見(一九三三年)、留萌(一九三六年)、および名寄の六つしかない、この内北見教会は数年後またオランダ人フランシスコ会員の手に委ねられた。千九百四十九年の区分割当ての時には、ちょうど砂川教会が落成したばかりであつたが、これはわが地区にあるので、われわれの担当となつた。これで全部であつたのである。それでどうしても建築にかならなければならなかつた。まず千九百五十年旭川に聖アントニオ修道院を、千九百五十二年富良野に新教会を建て、千九百五十年にはまた名寄に幼稚園を設け留萌教会を改築した。(つづく)

フランシスコ会
北海道布教小史 (一六)

一九〇七年から一九二九年に至る分は
ヴェンセスラウス・キノルド司教の報告による
ゲルハルド・フリーベル

千九百五十三年から同五十六年までに北海道におけるわが会の布教地区に新教会四つ、新聖堂二つおよび幼稚園二つを作つた。それになお東京にも板橋修道院とそれに属する新教会ができた。以下建設方面のことを簡単に記して見れば、千九百五十五年オランダのフランシスコ会員たちに委譲した北見地区にある網走に、一家屋を借りて新教会を開き、アブデラス・ファン・デ・サンデ師が千九百五十三年八月初代主任として赴任した。なおここに、その後このオランダのフランシスコ会員たちが千九百五十六年網走に司祭館と幼稚園との付いて美麗な聖堂を建てたことを述べておこう。

聖ゲオルグのフランシスコ会修女たちが、千九百五十三年春、旭川に第二の藤高等学校を開くに及んで、同市のその地区(春光町)は独立の教会区となつたが教会は今のところまだ敷地だけである。まず何もかも建てなければならぬ。教会の仕事はまだ藤高等学校の校舎内で行なつており、司牧に当たつてゐるのは、デ

デモ・ヨルダン師である。千九百五十四年九月四日には、旭川六条にもう一つ教会を設けた。これで旭川には教会区が四つできたこととなる。その牧者はロタル・ポレンバ師であつて、今のところ司祭館とその中に小聖堂があるだけである。同月、すなわち九月にはカミロ・コンカリ師が、北海道の炭坑地帯にある盛んな町美唄の教会に行つた。美唄には千九百五



一九五〇年に改築成つた留萌教会

十二年からすでに、教会ができていたがそれはただ砂川の分教会に過ぎなかつた。カミロ師は、メリノール宣教会の人々が千九百五十四年夏清水沢に到着するに及んで手が空いたので、最

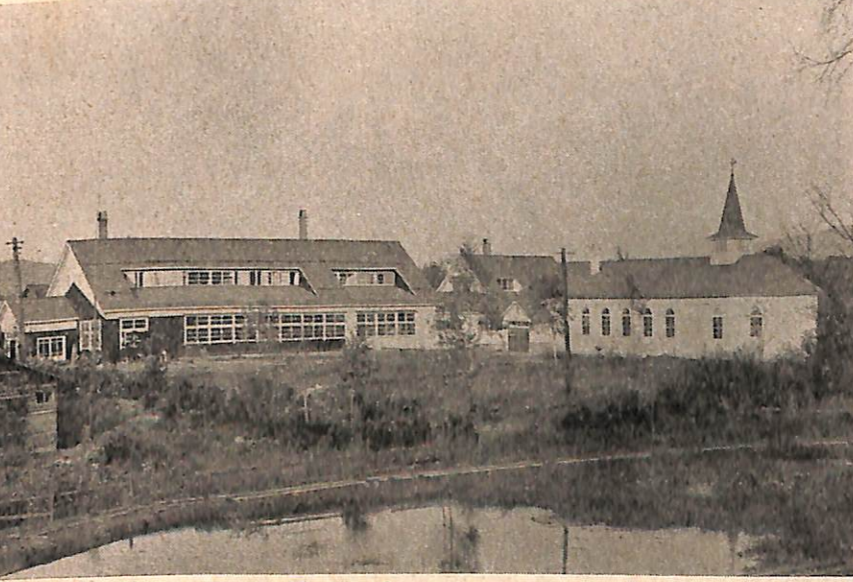
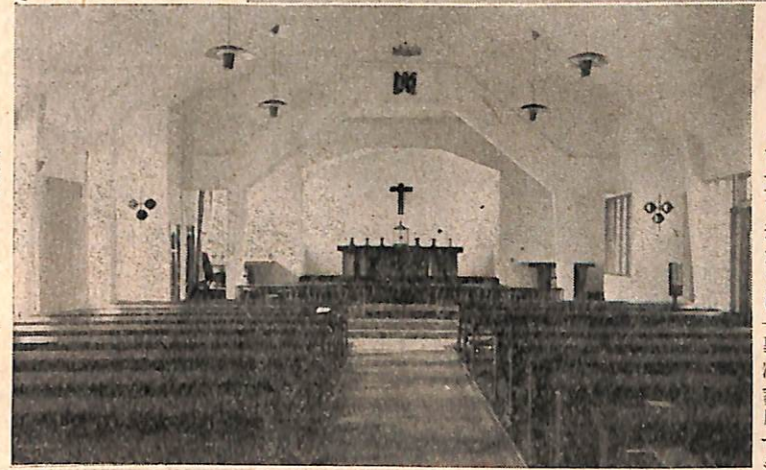


一九五五年に出来た旭川六条通教会
築工事は、旭川五条、砂川、東京板橋の三聖堂であつた。すでに千九百四年フランシスコ宣教師たちの設立した旭川五条教会の建物は、もちろんすべて始めからのものとは限らないが、悪くなり腐朽した。これは仕方ないことである。その建直のきつかけとなつたのは、千九百五十四年の同教会創立五十周年祝賀であつた。司祭館を除いて、どこもかしこも改築し始めた。まず数年前から盛んになつた幼稚園の番で

がなかつたので、札幌から出張しなければならなかつた。しかし千九百五十六年から、札幌円山教会主任アウグスチノ・ティシエレンゲル師がこの主の美しい美唄教会を担当することとされた。同時にこの幼稚園を少し改築し、司祭館を拡張した。名寄の向こうに枝幸という町がある。名寄から汽車で四、五時間かかる所である。その町に住む少数の信者は全く自発的に千九百五十六年、宣教師の宿泊できる一室の付いた小聖堂を建てた。その時から枝幸へは名寄から月二回出張司牧してゐる。



新築の聖マリア教会。一九五六年九月十日竣工。新築の聖マリア教会。一九五六年九月十日竣工。



内部の様子。一九五六年九月十日竣工。

全く新しい建物ができたから、この幼稚園はそれによつて非常に幼稚園らしくなつた。それから千九百五十六年春には、新築の聖マリア教会の建築工事が始まつた。その新しい聖マリア教会は、八月十五日、富沢司教の手で祝別奉獻された。それは人々の心を高揚させる儀式であつた。この聖堂は近代風な建て方で、誰にでも気に入つてゐるが、また普通方々の聖堂で用いてゐる畳のかわりに、腰掛が備えてあるのも、北海道としては変わつてゐる所である。この教会の主任はベルナルデン浅井師である。砂川教会にも聖堂の悩みがあつた。千九百四十九年に建てられ、今までは二階が聖堂と司祭の居室、下が幼稚園になつてゐたが、千九百五十六年から聖心愛子会の修女たちが幼稚園の運営を引き受け

た。折には旭川の旧聖堂の建築材料も共に使うことができたのである。この新しい建物は周囲の田園風景の飾りとなつた。その教会の塔には、フランススコの鐘がかかつてゐる。これは数年前、札幌の聖フランシスコ教会のために送つてよこされたものであるが、そこには鐘をかける

十五年間有効の契約が成立した。教会が設立されたのは、九月八日のことであつた。この聖エリザベト教会の初代主任になつたのはルカ・ベルトラム師であつた。これは千九百五十三年のことであつたが、やがてこの新教会には、悩みがでてきた。その聖堂には司祭館内の二間を宛てていたのであるが、所属信者が絶えず増加するばかりで、狭隘を告げるに至つたのがそれである。それは受洗者や志願者が相当数あると共に、その教会の受持地区に、どこからか移つて来た、「旧信者」が新たに続々と現われて来たからである。その内にルカ師は福岡のラテン語学校の聖ボナヴェンツラ学院の院長となつて赴任し、ゲレオン・ゴルトマン師がその代りになつた。さて教会の悩みはいよいよ堪え難いまでになつたので、うにかしうにかしうにしなければならなくなつた。あれやこれや考え、た揚句、司祭館の敷地は狭いことは狭いけれども、そこに座席二百を有する、やや大きい小聖堂を建てるこ



わが光明社も、この祝賀の年に、ザルガタによる邦訳旧約聖書の第三巻を刊行

ととした。こうして板橋教会の建築は千九百五十六年秋に出来あがつたが、このためにはゲレオン師が故国へ手紙で寄附金の勧請を行なつた。その生れ故郷の町、ケルンの大司教区庁からは、右の教会建築のために、百万円を越える金が来た。これおよびその他の寄附金で板橋の聖エリザベト教会はできたのである。聖堂そのものは、近代風の清らかな木造で、祈るのに適当な、落ちついた建物である。設計に当たつたのはスイス人ペトレム・ヘム宣教師フロイレル師で、その方面で次第に名をあげた人である。この聖堂は千九百五十六年十二月二十二日、待降節の第四主日にペトロ土井東京大司教の手で祝別奉獻された。



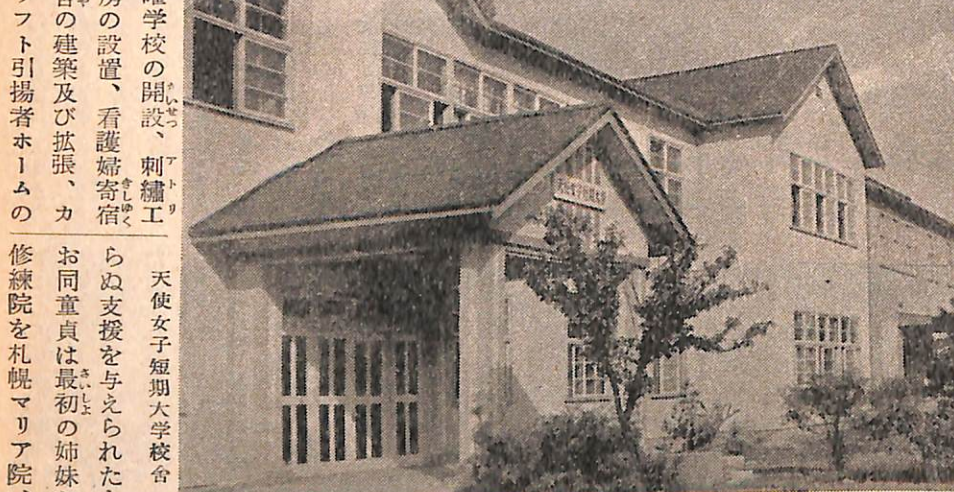
一九五六年落成の東京板橋教会聖堂内部

ある。わが会の出版部たる光明社が、その刊行方を日本司教会議の席で委嘱されたのは、千九百四十七年のことであつた。それから札幌の修道院で、當々克苦翻訳の仕事が続けること多年、草稿はすでに全部でき上つてゐる。その第一、第二両巻は、千九百五十四年九月、および千九百五十五年十二月に、それぞれ発行されたのであつた。

最も長い間、すなわちわれわれと手を携えて始めから札幌および北広島で社会事業を行なつて来た、マリアの宣教師フランシスコ修道女会天使院の修女たちもまた、日本他の地域でいろいろの仕事をしているにもかかわらず、わが地区でも安閑とはしていなかつた。それは天使病院の敷地にわたる拡張、千九百二十七年設置の印刷部



札幌天使院修道女たち



暹学校の開設、刺繍工房の設置、看護婦寄宿舎の建築及び拡張、カラフト引揚者ホームの

暹学校の開設、刺繍工房の設置、看護婦寄宿舎の建築及び拡張、カラフト引揚者ホームの建設、お同童貞は最初の姉妹たちと共に、その修練院を札幌マリア院、聖ゲオルグのフ

フランシスコ会
北海道布教小史 (二七)
一九〇七年から一九二九年に至る分は
ヴェンセスラウス・キノルド司教の報告による
ゲルハルド・フリーベル

開設わけでも前述の天使女子短期大学厚ランシスコ会修女たちの許に創設した。その姉妹たちが、千九百五十二年には砂川地区では、千九百五十二年から聖心愛子会の姉妹たちも働くようになった。これは日本

に帰化したドイツ人修道女御園テレジア童貞を創立者とする日本本ばかりの修道会で、同会の創立に当たっては、キノルド司教がひとかたな布教地区に、全く特殊な修女たちが来た。これはわれわれが招いたのでもないが、独自の使命をもつ修女たちで、すなわちフーコー神父の「イエズスの友愛会」の人々がそれである。かれらは地図の上からその小修院をわれわれの布教地区に置くことを定めた。と言うのは、日本で鉄のカーテンが一ばん近い所を探したのに、それは北海道の北端稚内であったからである。わが会の宣教師たちは、曾てそこから、当時札

にもいくつかの聖歌を増加した。この改訂増補版は過去十年間に流布するのと約十七万部、方々の学校でもこれを採用したので、ただカトリック信者の間のみならず教外者にも知られ公教要理と祈禱書とを除けば、カトリックの書物中、ベスト・セラーの第一位を占めていると言つてよからう。

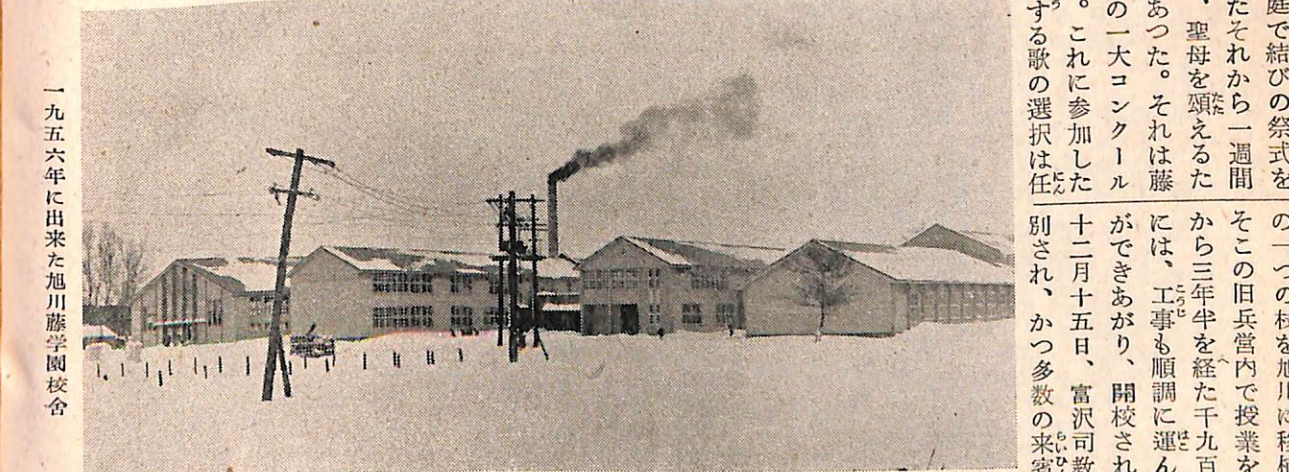
この数年間の記録の内から小さいことながらここに挙ぐべきは、千九百五十三年八月十二日に、聖女クララの帰天七周年記念祭が、わがフランシスコ会所属札幌北十一条教会でも、盛大に行なわれた。この祝いの前には同教会で、三日間の祝祭が開かれたが、多数の信徒がこれに参加した。祝いの当日には、富沢司教



一九五三年に出来た北見藤幼稚園

千九百五十四年は「聖マリアの年」であつた。わが会の布教地区でも、できるだけ盛大にこれを祝つた。十月十七日には、一大提灯行列を催し、わが修道院所属の札幌北十一条教会から、市の往來を

園までゆき、その大校庭で結びの祭式を行なつたのである。またそれから一週間後の十月二十四日には、聖母を頌えるための、特別な行事があつた。それは藤学園で、札幌各聖歌隊の一大コンクールが開かれたことである。これに参加した聖歌隊は七つで、演唱する歌の選択は任意であつたが、た



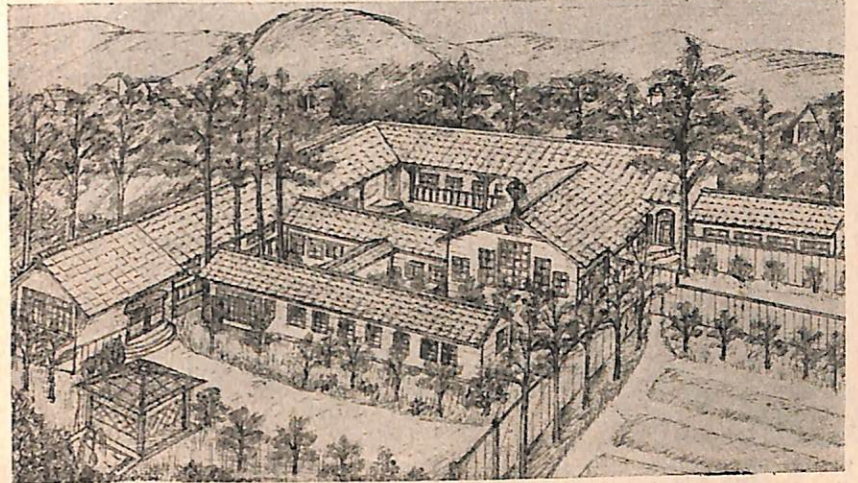
一九五六年に出来た旭川藤学園校舎

わが会の布教地区で働いている修女たちについて、まだ一言すべきことがある。千九百二十五年から札幌に藤学園を經營し、多大の成果を挙げ、戦後更に女子短期大学を開設することができたマリア院の童貞たちは、

の一つの枝を旭川に移植し、まず最初はその旧兵営内で授業を始めたが、それから三年半を経た千九百五十六年十一月には、工事も順調に運んで大きな新校舎ができあがり、開校された。この学校は十二月十五日、富沢司教の手で厳かに祝別され、かつ多数の来賓を迎えて感銘深い学校祭を行なつたが、いずれも賛辭を呈せぬ人はなかつた。現在すでに、この学校には女生が八百名近くまた附属幼稚園には園児が百五十名ほど在籍しているが、その完全な整備にはなお数年を要するであろう。童貞たちは札幌同様そこにも、それと関連して女子短期大学を設けるつもりである。(つづく)

幌教区に属していた樺太に行つたものであつたが、戦後この布教地は鉄のカーテンのかけに隠れてしまつた。しかし晴天の日は稚内市のわが教会から遙かに樺太の南岸が見える。さてイエズスの友愛会の一修女が、小修道院設立の相談に同市に赴いたのは千九百五十四年のことであつたが、後千九百五十六年に海岸から歩いて数分の所に、質素な漁師の家の間に日本風の家を建てた。これがこれらの修院として祝別されたのは、七月三十一日のことであつた。一外人修女(スイス人)が、一邦人修道志願者と共に暮らしているが、それは宗谷海峡を隔てて目の前にあるソ連の改心のために、犠牲と祈りを献げていると言ふ方がいくらいである。

なおここに、わが北海道の布教地区にはないが、わが会北海道宣教師の一人が



西ノ宮聖クララ会修道院

は同地に数年勤めていた間に、日本人の生活に適した修道生活、殊に観想修道会その必要性を、ますます痛感するばかりであつた。こうして漸次観想修道院創立の構想ができあがり、クララ会女子修道院設立の計画が進められた。師はすでにそれに対して、教養ある志操高尚な少女数名に準備させていたが、戦争のた

めはこの計画は挫折してしまつた。戦後は物質上にはいろいろ困難があつたにもかかわらず、時勢は前より好都合になつたように見えた。長い間の宿望を果たすまでには、ずいぶん久しくかかつた。すなわち志す所は日本人ばかりの会の設立であつたが、いかにして着手すべきか。するとほかならぬローマから、実行可能な途の指示があつた。それはクララ会の会則と会憲とを奉ずるが、外国にあるクララ会修道院と関係のない、独立の修道

区の権利によつて、司教の指導の下に置かれることとされた。こうしてそれが設立されたのは、千九百四十九年のことで、その家屋としては、大阪司教が西宮に適當な大きい建物を用立てて下さつた。最初の修道志願女たちは、千九百五十年着衣し、翌年ようやく単式誓願を立てた。千九百五十四年、盛式誓願と禁入制とを有するクララ会修道院として設立の件を教会法でいよいよ認可したという教令がローマから来た。それで最初の修女四名



札幌マリア院の修道女たち

院を設けよというのである。その修道院は、後に教皇権下に属するまで、まず司教

設立は完了し、西宮聖クララ修道院は完全な資格あるものとして、聖クララ修道女会に編入されたのであつた。その初代修道院長はローマから任命された。志願者は大勢あつたが、今までに採用されたのは、僅か十七名に過ぎない。それは修道院が修女二十五名しか容れることができないからである。今までのところ、孜孜として働くこと、寄附を受けることと、優に生計を立てることができた。霊的方面では、この修道院は設立以来わが管区に属しているウゴリン・ノル師の指導を受けている。この日本のクララ修道院が、日本におけるわがフランススコ会の布教地区にも、恵み豊かな影響を及ぼさんことを切に望む次第である。



築計画は、その実現がいつのことか見通しがつかないので、ルカ・ペルトラム師は千九百五十二年札幌へ転任になるやいなや、更に拡張に着手、縦にはもはや余地がない所から、側廊を付けて横の方へ広げた。こうして今やこの教会は三廊を有する聖堂を持つに至つたが、これは司

幌教区に属していた樺太に行つたものであつたが、戦後この布教地は鉄のカーテンのかけに隠れてしまつた。しかし晴天の日は稚内市のわが教会から遙かに樺太の南岸が見える。さてイエズスの友愛会の一修女が、小修道院設立の相談に同市に赴いたのは千九百五十四年のことであつたが、後千九百五十六年に海岸から歩いて数分の所に、質素な漁師の家の間に日本風の家を建てた。これがこれらの修院として祝別されたのは、七月三十一日のことであつた。一外人修女(スイス人)が、一邦人修道志願者と共に暮らしているが、それは宗谷海峡を隔てて目の前にあるソ連の改心のために、犠牲と祈りを献げていると言ふ方がいくらいである。

めはこの計画は挫折してしまつた。戦後は物質上にはいろいろ困難があつたにもかかわらず、時勢は前より好都合になつたように見えた。長い間の宿望を果たすまでには、ずいぶん久しくかかつた。すなわち志す所は日本人ばかりの会の設立であつたが、いかにして着手すべきか。するとほかならぬローマから、実行可能な途の指示があつた。それはクララ会の会則と会憲とを奉ずるが、外国にあるクララ会修道院と関係のない、独立の修道



札幌短期大学校舎

その少しあと、千九百五十五年から同六年にかけて、ヤマアリオ・メンラード師はこれに附属する一幼稚園——スマイレ幼稚園を設けた。なるほどマリアの宣教師フランススコ修道女会の修女たちも、附近に約三百名の園児を擁する天使幼稚園を経営しているが、これは年々多数の小児を入れることができないので、ヤマアリオ師は教会附属幼稚園設置を決議したのであつた。最初は

伝道館を拡張して用いていたが、入園希望者が多いので、いろいろ新しい建物を加え、その結果今では、修道院所属札幌北十一条教会は、二百名を越える園児と教諭六名とを有する幼稚園を持つていたのである。

二五、布教五十周年記念行事
(千九百五十七年)

このフランススコ会北海道布教小史は「千九百五十七年一月十九日は、フランススコ会員がほとんど三百年の間中絶していた日本布教を再開した五十周年記念日に当たる。」という言葉で始めたが、その日が来た時、われわれは自分でもそれを祝つた。とは言え、それはひそやかに、つましやかに、したのである。北海道の雪の多い、寒い冬は、晴れの大きな祝いをする時ではない。われわれは大体において、教会内の祝いだけに限つた。その日取りは一月の十五十六両日とした。なぜなら正月の十五日はいわゆる「成人の日」で、国の祝日であるからで、それ故信徒の人々もわれわれと共に祝うことができたのであつた。

一月十五日には、午前九時から、わが会所属札幌北十一条教会聖堂で過ぎし五十年の間にわれわれが主からいただいた数々のおん恵みに対し

て、感謝の盛式司教高座ミサが執行された。ミサの形式として、司教閣下は、至聖三位を崇めるための荘厳な特志ミサを献げることを許して下さった。かように一九三五年札幌教区のフランシスコ会神父達



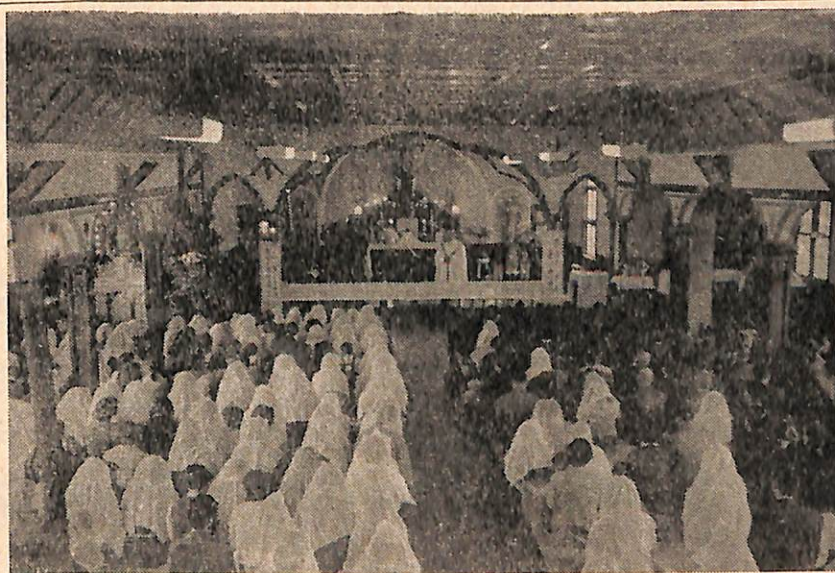
司教閣下が行なわれ、そのなかで過ぎし五十年の歴史を回顧せられて、宣教師たちが曾ての指導者、故キノルド司教の賢明なるよき統率の下でした働きに対してかれらに感謝せられた。

教会での祝いの後、修道院の食堂で午餐を攝つたが、これにはわが会の神父たちのほか、司教閣下を始めとして、邦人教区付司祭がほとんどみなど、それに北海道の他の布教地区代表者の方々も列席された。この会食はいかにも和気あいあいとして打ちとけたものであった。布教中のいろいろな逸話が——その多くは愉快なものであったが——披露されて、聴き手を喜ばしめた。これらの話のうちには銘記しておくだけの価値のあるものが、いくつもあつた。この食事に対しては、近くの天使院から気前よく御馳走をよこしてくれた。

してわれわれは「聖父と聖子と聖霊」に感謝申しあげたのであるが、莊重な天主讃歌「テ・デウム」においても、われわれは三位一体の天主の讚美に感謝の意をこめたのであつた。慶祝の説教は、富沢

した。しかしこの度は尊敬すべきキノルド司教閣下を始め、その他同僚宣教師など、愛する死者たちのためであつた。千九百十年十月三日札幌に来着の古参宣教師オイゼビオ・ブライントン師が司祭、エ

た。しかしその理由は至極簡単である。札幌教区はどうしてその最高牧者キノルド



われわれがこのフランシスコ会北海道布教小史を「光明」の附録として、今まで連続発行したのも、いささかわが会布教五十周年を祝う心からにほかならない。この小史は、わが教区の古い信者には必ずや幾多懐かしい思い出を喚び起こしたことであるが、新しい信者にはそれが、モイゼのその民に対する左の言葉のような作用を及ぼすことを、われわれは望むものである。「古の目を偲び、すべての世代を憶え。汝の父に尋ねよ、さらば彼女に告げん。汝

助祭となつて、莊嚴な死者ミサを執行、その後司教閣下が「棺側赦禱式」を行なわれた。前日の司教高座ミサには、その日一般の公休日であつたので、拝聴者の多かつたのも敢て驚くに足りないが、この死者ミサにも多数の出席者があり、聖体拝領者もたくさんあつたのには、司教閣下も一驚を喫された様子であつた。

札幌北十一条教会聖堂の年寄等に問え、さらば彼等汝に言わん、主の分はその民なり。彼これを導き教え、その御眼の瞳の如く護り給いき。主その御翼を展げてこれを載せ、その御肩に負いてこれを運び給えり。主御独りその導者にましますなり」(申命記三二ノ七以下) (おわり)

訂正 一一七五号と同九号附録写真説明中 倶知安教会は一九一一年、銅路は同二七年